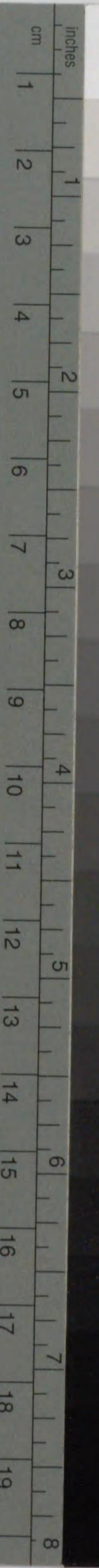


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

- A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

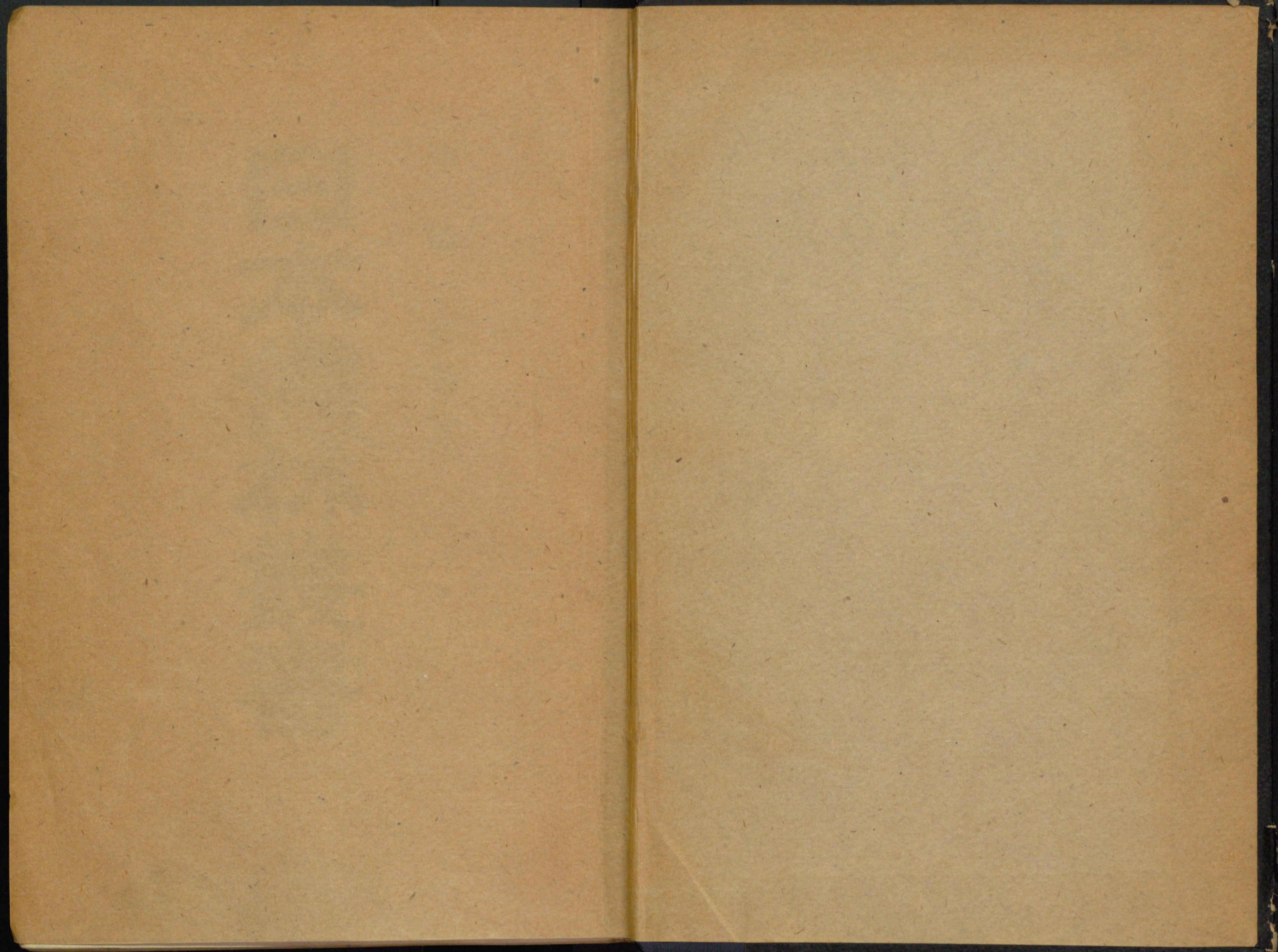
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



© Kodak, 2007 TM: Kodak

4
10

574-18
1200501519437





日本儒林叢書

關儀一郎編纂



日本儒林叢書 第四册

論辨部書目

燃	辨	非	辨	辨	辨	辨	適
犀	道	徂	徂	伊藤維楨	送浮屠道香	大學非孔氏之遺書	從
錄	解	徂	道	號仁齋	序	辨	錄
一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	二卷
服部蘇門著	石川麟洲著	蟹養齋著	荻生徂徠著	鈴木貞齋著	佐藤直方著	淺見綱齋著	大高坂芝山著
二四頁	四〇頁	二四頁	一七頁	三頁	九頁	二〇頁	三〇頁

非物氏	平瑜著	一卷	一二頁
閑距餘筆	中井竹山著	一卷	一八頁
讀辨道	龜井昭陽著	一卷	一八頁
徂徠學則 <small>及附錄</small>	荻生徂徠著	一卷	二六頁
徂徠學則問答	谷口大雅著	一卷	一一頁
徂徠學則辨	上月專庵著	一卷	一八頁
讀學則	井上金峨著	三卷	一六頁
梧窓客談	山內退齋著	二卷	四二頁
時學鍼炳	高泉溟著	二卷	四四頁
讀書正誤	石川香山著	一卷	四〇頁
集義和書顯非	西川季格著	二卷	四一頁
理氣辨論 <small>附讀理氣辨論(栗齋)</small>	中江岷山著	二卷	六〇頁

非聖學問答	高瀨學山著	二卷	四六頁
斥非	太宰春臺著	二卷	四一頁
駁斥非	深谷公幹著	一卷	二六頁
崇孟 <small>附讀崇孟(栗齋)崇孟解(城山)</small>	藪孤山著	一卷	二五頁
思問錄 <small>附批評(月洲)原聖志(東咳)</small>	藤澤東咳著	一卷	一六頁
湯武論	伊東藍田著	一卷	一三頁
和漢明辨	佐久間太華著	一卷	二四頁
王學辨集	豐田信貞著	一卷	二〇頁
王學駁議	山口菅山著	一卷	八頁
洗心洞學名學則	大鹽中齋著	一卷	二二頁
豈好辨	會澤正志齋著	一卷	一二頁
辨妄	安井息軒著	一卷	一七頁

隔靴論	一卷	鹽谷宕陰著	一四頁
養子辨證 <small>及附錄(尙齋)</small>	一卷	淺見綱齋著	一七頁
同姓爲後稱呼說	一卷	三宅尙齋著	四頁
養子辨辨	一卷	三輪執齋著	六頁
朱學辨	一卷	鎌田柳泓著	三二頁
俗儒辨	一卷	蟹養齋著	六頁
逸史糾繆	一卷	豬飼敬所著	二一頁
抱腹談	一卷	高松芳孫著	一二頁
抱腹談抱腹	一卷	海保漁村著	七頁
讀直昆靈	一卷	會澤正志齋著	五二頁
讀葛花	一卷	同著	四〇頁
讀末賀能比連	一卷	同著	一二頁

四

讀級長戶風

一卷

會澤正志齋著

二〇頁

以上四十五種五十四卷

例言

適從錄 二卷 大高坂芝山著

本書は宋學の見地より、伊藤仁齋の語孟字義を駁せる者にして、主客問答、撞巢窟、擊蛇笏、適從文を本編とし、書簡四通を附録とせり。仁齋の門人、仁齋に之が辨を作らんことを請ひしに、仁齋（是時六十九歳）抗争の益なきを説きて、遂に辨を作らざりきと云ふ。本書は元祿八年（四十七歳）の著に屬す。所收本は元祿十年の刻本に據る。

著者芝山の略傳は、本叢書第三冊、史傳書簡部の例言、南學傳の條に見わたり。

辨大學非孔氏之遺書辨 一卷 淺見綱齋著

本書は伊藤仁齋、大學非孔氏之遺書辨を作りて、大學の八條目、正心說、其他孔孟の意に異なる者あるを指摘して、孔氏の遺書に非ずと斷せるに對して、著者全文に互りて、逐條辨駁を加へたる者なり。元祿二年（三十八歳）の著に係る。

所收本は刻本に據る。刻年未詳。

著者綱齋は名は安正、小字は重次郎、綱齋と號し、又望楠樓と號す。近江の人なり。綱齋、少にして山

崎闇齋に學び、砥行植節、社中に冠たり。後闇齋の敬義内外の説に従はず、又其神道を喜ばず。是を以て遂に容れられざりき。人ご爲り慷慨、贊を諸侯に委するを潔しとせず。故に貧甚しと雖も、敢て祿仕せず。門人三宅觀瀾の水府に仕ふるや、其志道を行ふに非ずとし、即ち書を贈つて之と絶ち、又佐藤直方が親の喪未だ除かざるに出仕せるを面折し、亦交を絶つ。正徳元年に歿す、年六十。門人若林強齋能く其學を傳ふ。著す所、靖献遺言、聖學講義、精一集説、四書講義、文集等あり。

辨送浮屠道香師序 一卷 佐藤直方著

本書は伊藤仁齋の僧道香を送る序を辨駁せるものなり、本書は貞享四年(三十八歳)の著に係り、元祿四年の刻本と、正徳三年の改修刻本との二種あり、今正徳本に據り、元祿本(一本と稱す)の相違の分を附記して参照に便す。

著者直方は通稱五郎左衛門。備後の人なり。山崎闇齋に就學す。闇齋の神道説に従はず、又其の敬義内外説に服せず。遂に闇齋に絶たる。直方字號なし。或人其説を問ふ、曰はく邦俗に従ふのみと。初年結城侯に宣し、元祿六年致仕す。後厩橋侯の師となり、其邸に居ること二十餘年、然れども道合はざるを以て、遂に之を辭す。享保四年に歿す、年七十。著す所、四書便講、講學鞭策録、鬼神集説等あり。

辨伊藤維楨號仁齋 一卷 寫本 鈴木貞齋著

本書は伊藤仁齋の齋號は、皇室の御諱を犯し、僭踰不敬の至りなることを論辨せる者なり。

所收本は本會所藏の傳寫本に據る。

著者貞齋は名は重充、通稱金七。土佐の人なり。淺見絢齋に學ぶ。後室鳩巢と往復し、其學を信する甚だ篤し。初伊勢に寓し、後大坂に徙る。歿年未詳。

辨道 一卷 荻生徂徠著

本書は一家の見を以て道の何物たるを辨明したる者にして、大旨道は先王の作爲に成りて、天下を安んずるの道なり、又禮義は道の名、仁智は徳の稱、仁は長人安民の徳なり等と説き、古文辭を學ぶべきを論じ、思孟を斥し、宋儒の理學を排撃せり。享保二年(五十二歳)の著に係る。

所收本は刻本に據る。刻年未詳。

著者徂徠の略傳は本叢書第三冊史傳書簡部の例言、學寮了簡の條に見えたり。

非徂徠學 一卷 蟹養齋著

本書は宋學の見地より、徂徠の學則及辨道を駁し、并せて仁齋の説に及べる者にして、其大旨は自序に見えたり。寶曆四年(五十歳)の著なり。

所收本は明和二年の刻本に據る。

著者養齋は名は維安、字は子定、通稱佐左衛門。安藝の人なり。三宅尙齋に學ぶ。尾張侯の儒臣となり、後辭して大坂に講説す。安永七年に歿す、年七十四。著す所、崎門讀書法、復古辨、四書精意鈔説、

讀小學記等數十種あり。

辨道解蔽 一卷 石川麟洲 著

本書は宋學の見地より、徂徠の辨道を駁せる者にして、寶曆五年(四十九歳)の著なり。所收本は寶曆五年の刻本(井上巽軒博士所藏)に據る。

著者麟洲は名は正恒、字は伯卿、通稱平兵衛。京都の人なり。向井三省に學び、小倉藩に仕ふ。寶曆九年に歿す、年五十三。著す所、童子問辨妄、遊學紀行、文集等あり。

燃犀錄 一卷 服部蘇門 著

本書は徂徠及び春臺等の著書中、解説考證の誤謬ある者を指摘して糾正したる者なり。明和六年(四十歳)の著なり。卷末の蘇門著書目録に據るに、此書の外に、續録、別録、餘録の三種あるが如し。然れども存否詳かならず。

所收本は明和六年の刻本に據る。

著者蘇門は名は天游、字は伯和、蘇門と號し、又嘯翁と號す。京都の人なり。父織造を業となす。蘇門多病を以て家資を族人に譲り、唯讀書を事とす。その學漢魏の傳注を主とし、専ら博洽を務む。また佛典及老莊の學を好み、自ら號して三教主人と曰ふ。初め徂徠の説を悦びしが、後其非を知り、物氏を攻撃するを以て己か任とす。明和六年に歿す、年四十六。著す所、赤裸裸、落草放言、嘯臺餘響、碧巖方

語解等あり。

非物氏 一卷 平瑜 著

本書は程朱學の見地より、徂徠の説を駁し、傍ら仁齋に及べる者なり。著述の年時未詳。所收本は天明三年の刻本(井上巽軒博士所藏)に據る。

著者平瑜は字は子瑾なること、鵬齋の序に見ゆ、その程朱學派たることは、本書によりて知るを得れども、經歷歿年等は詳かならず。

閑距餘筆 一卷 中井竹山 著

本書は徂徠集中の文意又は語句に就て、其紕謬を指摘せるもの。自序に享和元年(七十二歳)數十年前の舊稿を淨寫し。題して閑距餘筆と曰ふ云云と見たり。

所收本は帝國圖書館所藏本に據り、外一本を以て參稽したり。本書は著者相續者中井天生氏の好意により、本叢書に收むるを得たり。謹んで感謝の意を表す。

著者竹山は名は積善、字は子慶、通稱善太、大坂の人なり。五井蘭洲に學ぶ。其學宋學を奉すれども、偏隘固陋に陥らず。執政樂翁公の諮詢に應へて、草茅危言を作りて之を上り、又逸史を著して之を献す。後懷徳書院の長となり、學者大に進む。仕官を好まず、諸侯の聘に應せず。文化元年に歿す、年七十五。著す所、前掲の外に、非徴、祭祀私議、養子私議、建學私議等數十種あり。

讀 辨 道 一卷 龜井昭陽 著

本書は徂徠の辨道に對して、忌憚なき批評を加へたるもの。昭陽の學護園を宗とせるに、其崇ぶ所に阿らざるは、稱歎すべきなり。

所收本は天保十一年の刻本に據る。

著者昭陽は名は昱、字は元鳳、通稱は昱太郎、空石又は月窟と號す。南冥の男なり。家學を傳へ、博綜淹通、經子を精研す。天保七年に歿す、年六十四。著す所、周易僭考、尙書考、毛詩考、古序翼、左傳鑽考、國語參考、論語語由述志、孟子考、老子考、莊子瑣說、蒙史等數十種あり。

徂 徠 學 則 及附錄 一卷 荻生徂徠 著

本書は爲學の法則を説けるものにして、七條より成る。大旨古言を明にし、世の古今及名物を審にし、大者を立て、博を貴び、命を知るべきを説く。附録には答安澹泊書等。學事に關する書牘五通を收めたり。

所收本は享保十二年の刻本に據る。

徂 徠 學 則 問 答 一卷 谷口大雅 著

本書は徂徠の學則附録中の語句に對する谷口大雅の質疑書と、徂徠の答書とを輯録せる者なり。而して大雅の第二次の質疑に對し、徂徠は答書を裁せずして物故せしは惜むべし。

所收本は享保十三年の刻本に據る。

著者大雅は名は元淡、通稱新助。江戸の人。郡山藩に仕ふ。其の徂徠の門に學びしが、徂徠の學に服せずして宋學を奉じたりしは、本書によりて知るを得。歿年未詳。

徂 徠 學 則 辨 一卷 上月專庵 著

本書は宋學の見地より、徂徠の學則を辨駁せる者にして、寶曆元年の著なり。本書に往往大雅の學則問答を引用せるを見る。

所收本は寶曆二年の刻本に據る。

著者專庵は名は信敬、鶴洲と號す。淺見絅齋門下の山本復齋に學ぶ。經歷歿年未詳。

讀 學 則 三卷 井上金峨 著

本書は徂徠の學則及附録中の語句を摘出して、之に批評を加へたる者なり。寶曆六年(二十五歳)の著に係る。

所收本は寶曆六年の刻本に據る。

著者金峨は名は立元、字は純卿、通稱は文平。江戸の人なり。幼時川熊峰に學び、後井上蘭臺に従學す。金峨の學、一家を偏主せず、訓詁を漢唐の註疏に取舍し、義理を宋明諸家に取り、群言を折衷して一家を成す。又務めて護園の學を排撃す。帷を駒籠に下して學徒に授く、後下谷に移る。從遊する者日に益

進む。既にして中村侯に仕へ、また東叡王府に仕ふ。天明四年に歿す、年五十三。著す所、匡正録、經義折衷、孝經集說、論語集說、辨微錄、考槃堂漫錄等あり。

梧窓客談 二卷 山内退齋著

本書は伊藤仁齋の語孟字義、中江岷山の理氣辨論、田中麗山の三才辨義の三書を駁せるもの。著者の學系詳ならざれども、本書を見るに、宋學を奉せる人なるが如し。正徳三年の著なり。所收本は正徳五年の刻本に據る。

著者退齋は名は久作、字は新民。大坂の人なり。學系歿年等未詳。

時學鍼炳 二卷 高泉溟著

本書上卷は學術の變更と題して、漢土及我國の儒學の變遷、及び孔孟程朱の學脈を叙し、又客難を設けて伊物二氏の學を排撃し、下卷は雜論と題して、論語等の經義を解説し、且つ伊物の説を論駁せり。所收本は延享四年の刻本に據る。

著者泉溟は名は志、字は養浩、泉溟は其の號。和泉の人なり。少壯にして伊藤東涯に従學せしが、遂に程朱に歸せり。歿年未詳。

讀書正誤 一卷 石川香山著

本書は徂徠の論語徵、春臺の論語古訓及同外傳、其他仁齋の説、支那諸史の誤謬を糾正せるもの。而し

て史誤を正せる一篇は、史記、通鑑、及歷代諸史に互りて、文字の誤脱等を正せるものにして、著者の注意周密なるを見るに足る。

所收本は享和三年の刻本に據る。

著者香山は名は安貞、字は順夫、通稱貞一郎、香山は其號はり。尾張の人にして、深田厚齋、小出慎齋等に學び、藩の儒官となり、明倫堂の督學、繼述館の總裁たり。文化七年に歿す、年七十五。著す所、唐宋八大家文楷、勸學俗訓、五史要覽、陸宣公奏議集註、代奕雜抄等あり。

集義和書顯非 二卷 西川季格著

本書は熊澤蕃山の著せる、集義和書を非斥せるものにして、自序に師藤樹の學脈に背きたる論說、師を後にし己を先にせる論說、王陽明の語を折きたる說等を舉げて、之を駁せるよし記せり。元祿四年の著なり。

所收本は元祿十年の刻本に據る。

著者季格は本姓清水氏、後西川と改む、中江藤樹の門人なり。郷貫歿年等詳かならず。

理氣辨論附讀理氣辨論 二卷 中江岷山著

本書は仁齋學の見地より、宋儒の太極理氣本然氣質格物窮理等の説を辨駁し、宋學の老佛と致を一にせることを論證せるもの。寶永六年(四十五歳)の著なり。

所收本は刻本に據る。刻年未詳。

著者岷山は名は一貫、通稱平八、岷山は其號なり。伊賀の人。學を伊藤仁齋に受く。寶永中大坂に寓して講説を業とす。古學を唱へ、師説を發揮するを以て任とし、常に宋學を攻撃して、綱齋尙齋等と敵視す。享保十一年に歿す、年六十二。著す所、四書辨論、疑叢辨等あり。

讀理氣辨論は崎門派の服部栗齋の說にして、其著隱居放言中に收めらる。栗齋の略傳は本叢書第三冊史傳書簡部の例言、先儒三子評の條に見えたり。

非 聖 學 問 答 二卷 高瀬學山 著

本書は太宰春臺聖學問答を著して、徂徠の說を述べ、孟子を斥し、宋儒を排せるを憤り、之に詳細なる駁撃を加へたるものなり。

所收本は寛延二年の刻本(藤塚隣氏所藏)に據る。

著者學山は名は忠敦、字は希樸、學山と號す。紀伊の人なり。紀伊藩に仕ふ。學山宋學を宗とし、又律學を好む。嘗て明律の疑義を以て徂徠と往復する數次。徂徠の歎稱する所となる。寛延二年に歿す、年八十二。著す所、論孟鈔說、唐律諺解、明律例私考、明律詳解、非斥非等あり。

斥 非 二卷 太宰春臺 著

本書は本篇一卷、附録一卷より成り、本篇には姓名字號地名等の稱呼、禮制、講經、詩法等に互りて、三十

餘項を擧げて、世俗の誤を正し、附録には孟子論、封建論等九首を收めたり。而して孟子論は上下に分ち、孟子を痛斥せり。

所收本は延享二年の刻本に據る。

著者春臺の略傳は、本叢書第三冊史傳書簡部の例言、紫芝園國字書の條に見えたり。

駁 斥 非 一卷 寫本 深谷公幹 著

本書は太宰春臺の斥非中の數項を擧げて、之を駁せる者、又附録として、春臺著書中の稱謂の誤を辨する者數條、辨非孟論、答松崎觀海書。性善論等を收めたり。辨非孟論は、斥非附録中の孟子論を駁せるもの。藪孤山の崇孟と并看すべし。自序によるに、本書は寶曆六年(春臺歿後九年)の著なり。

所收本は西島醇氏の所藏本に據る。

著者公幹の傳詳かならず。但し本書所收の答松崎觀海書を見るに、西島氏の說の如く。蓋し堀河學派の人ならんか。

崇 孟 附 讀崇孟 崇孟解 一卷 藪孤山 著

本書は太宰春臺の斥非附録中の孟子論を辨駁したる者なり。

所收本は安永四年の刻本に據る。

著者孤山は名は懋、字は士厚、通稱茂二郎、孤山と號す。熊本の藩儒なり。家學を承けて程朱の學を治

め、又能く詩文を屬す。享和二年に歿す、年六十八。著す所、詩文集、山水清音等あり。

讀崇孟は服部栗齋の著に係り、宋儒の性説發揮の功を稱して、春臺の論を駁せる者。又崇孟解は中山城山(徂徠派)の著に屬し、春臺の説を助けて孟子を斥し、并せて孤山の崇孟を駁せる者なり。城山は名は鷹、字は伯鷹、城山と號す。讃岐の人なり。藤川東園に就て醫方乃ひ護園の學を修む。帷を高松に下す。後塾政を嗣子に付して閑地に就き、全讃史を著して、藩府に上る。天保八年に歿す、年七十五。著す所、辨名辨道考、論語徵考、孟子辨解等四十餘種あり。(東咳文集に據る)

思問錄 附批評 一卷 藤澤東咳 著

本書は孟子の諸侯に王たるを勸めしは、孔子の尊周の精神に反し、君臣の大倫を亂るものなるを論じて、世の學者に問へる者なり。天保九年(四十六歳)の著に屬す。

所收本は刻本東咳先生文集に據る。

著者東咳の略傳は本叢書第三冊史傳書簡部の例言、榮觀錄の條に見たり。

原聖志は同じく東咳の著に係り、孔子の志は周室の興復にありしを力説せるもの。また東咳文集に收めらる。

思問錄の批評中、本文内に夾める者は、岩垣月洲(京都の人、その父邦彦は岩垣龍溪の高弟なり。幼にして家庭に學ぶ。博洽にして、才識人に過ぐ。明治六年に歿す、年六十六。)の説なり。又欄外の評は

何人の説なるか詳ならず。以上二種の批評は、内田遠湖先生所藏本に據る。

湯武論 一卷 伊東藍田 著

本書は湯武は放伐に非ずして篡弒なることを論せるもの。而して附録として説解題賛記序書牘、計十二通を添へたり。明和八年(藍田三十八歳)の細井氏の序あり。

所收本は安永三年の刻本(足利衍述氏所藏)に據る。

著者藍田は名は龜年、通稱金藏、藍田は其號なり。江戸の人。荻生道濟に從學し、後餘熊耳、根君美に從て切磋す。文章を能くするを以て名あり。文化六年に歿す、年七十六。著す所、大戴禮記補注、徂徠學則標注、歷代通記等あり。

和漢明辨 一卷 佐久間太華 著

本書は國牀制度風俗等に就て、皇國の漢土に優れることを辨明せる者にして、禪讓放伐、及び孟子朱子に對する駁撃は、其尤も力説せる所なり。

所收本は安永七年の刻本に據る。

著者太華は名は盛明、字は立僊、讃岐丸龜の人なり。學系歿年等詳かならず。

王學辨集 一卷 豊田信貞 著

本書は王陽明の學説を駁せる、李退溪、林鷲峰、山崎闇齋、佐藤直方、淺見綱齋、三宅尙齋諸氏の論説を集

録せるものなり。正徳二年の編纂に係る。

所収本は正徳年間の刻本に據る。但し卷末稻葉默齋の識語は、後人刻本に追記せるもの。今并せて之を刻す。

著者信貞は佐藤直方の門人たることは、崎門學脈系譜に見られたれども、傳記詳かならず。

王 學 駁 議 一卷 寫本 山口菅山 著

本書は朱子學の見地より、王陽明の學を駁せるものにして、初の書牘に於て總括的に非斥し、次に古本大學序に就て駁撃せり。天保十四年(七十二歳)の著なり。

所収本は内田遠湖先生所藏本に據る。

著者菅山は名は重昭、通稱定一郎。若州小濱藩の人なり。若林強齋の流派に属す。安政元年に歿す、年八十三。

洗 心 洞 學 名 學 則 一卷 大鹽中齋 著

本書は自己の學の孔孟學にして、また孝の一字を以て本領とすることを説き、(學名學則ハ天保二年ノ作)且人に答へて學を論せる書九通を附載せる者なり。

所収本は天保五年の刻本に據る。

著者中齋は名は後素、字は士起、通稱平八郎、中齋と號す。大坂の人なり。夙に王陽明の人と爲りを慕

ひ、其學を治め、吏務に敏なり。文政十年、耶蘇の邪黨を逮捕し、同十二年、猾吏豪富の奸謀を糾察して功あり、時に年三十六。既にして致仕し、陽明學を以て生徒に教授す。天保八年米價騰貴し、貧民殆んど餓死せんとす。平八郎、之か救濟の策を立て、山城守跡部某に説かしむ。聽かれず。乃ち怒つて兵を擧ぐ。事成らずして自刃す。時に年四十四。著す所、洗心洞割記、儒門空虚聚語、増補孝經彙注、古本大學割目等あり。

豈 好 辨 一卷 會澤正志齋 著

本書は主として耶蘇教の害を論じ、之が撲滅策を説けるもの。文政十一年(四十七歳)の著なり。所収本は刻本に據る。但し刻年未詳。

著者正志齋の略傳は、本叢書第三冊史傳書簡部の例言、及門遺範の條に見たり。

辨 妄 一 卷 安井息軒 著

本書は耶蘇教の所説、妄誕不經にして、且我國忠孝の教と相容れず、其禍害の及ぶ所甚大なることを論辨せる者なり。附録として、鬼神論及び共和政治を論する書を添へたり。著述の年月詳かならざれども、源久光の序によるに、蓋し晩年の作ならん。

所収本は明治年間の刻本に據る。

著者息軒の略傳は、本叢書第二冊隨筆部第二の例言、睡餘漫筆の條に見たり。

隔靴論 一卷 鹽谷宕陰 著

本書は清國の鴉片戦争記を讀みて、清國の敗因と英人の詐謀とを叙し、以て鑒戒の意を寓せる者なり。安政四年(四十九歳)の著に属す。所收本は安政六年の刻本に據る。

著者宕陰は名は世弘、字は毅侯、宕陰と號す。江戸の人なり。松崎慊堂に師事す。濱松侯の文學となり、後幕府の儒官となる。其經を治むるや、宋學を墨守せず、漢唐に參し、至當を得て後に止む。又能文を以て名あり。前後その門に入る者數百人。邦君諸侯亦多く弟子の禮を執る。慶應三年に歿す、年五十九。著す所、丙丁炯戒錄、丕揚錄、鞭駘錄、視志緒言、宕陰存稿等あり。

養子辨證及附錄 一卷 淺見綱齋 著

本書は先儒の説を引用して、異姓養子の不可なる所以を論證せる者なり。本書初め養子辨證と名づけしが、後氏族辨證と改稱せり。(改稱の事由は尙齋の辨證附錄序に見ゆ)元祿五年(四十一歳)の著なり。所收本は元祿年間の刻本に據る。

著者綱齋の略傳は、辨大學非孔氏之遺書辨の條に見たり。

養子辨證附錄は三宅尙齋の手に成り、元祿六年(三十二歳)の著なり。本書は未刊書なるが、内田遠湖先生所藏本を謄寫して、本叢書に收めたり。

著者尙齋は名は重固、通稱は丹治、尙齋と號す。播磨の人なり。山崎闇齋に師事す。直方、綱齋と共に崎門三傑の稱あり。阿部侯に仕へ、忠直誠を盡す。居ること十年、旨に忤ひ忍に幽囚せらる。越ねて三年、赦にあひ、去つて京師に往き、儒を以て業となす。指紳列侯從遊する者甚だ多し。土佐侯の請により、江戸に來りしが、居ること半歳、其大夫山内規重の卒せしにより、辭して京に歸る。寛保元年に歿す、年八十。著す所、四書筆記、五經筆記、默識錄、狼寔錄等二十餘種あり。

同姓爲後稱呼說 一卷 寫本 三宅尙齋 著

本書は同姓の人を後嗣とする時の稱謂に就て論じたるもの。正徳二年(五十一歳)の著なり。所收本は内田遠湖先生所藏本に據る。

養子辨 一卷 寫本 三輪執齋 著

本書は綱齋の養子辨證を駁して、養子も事情によりては否認するを得ざる所以を論じたる者なり。所收本は本會所藏本に據る。

著者執齋は名は希賢、字は善藏、執齋と號し、又躬耕廬と號す。京都の人なり。佐藤直方に學びしが、後王陽明の致良知の學に悟る所あり、士大夫の間に講説す。嘗て直方の薦に因り、厩橋侯に宣せしが、遂に致仕して京に歸る。執齋最も事跡に諳達し、其の言優游餘味あり、聽者をして心醉せしむ。又和歌を善くす。寛保四年に歿す、年七十六。著す所、古本大學和解、陽明學名義、傳習錄頭書、執齋雜著等あり。

朱 學 辨 一卷 鎌田柳泓著

本書は朱子學の要義を發揮辨明するを旨とせる者にして、三教同異辨、道統詩、辨周子學、敬説の四篇より成る。敬説は國字を以て記し、獨得の解説をなせり。享保二年の著なり。所收本は享保二年の刻本に據る。

著者柳泓は名は鵬、字は圖南、號は柳泓。紀伊の人なり。江村北海に學ぶ。文化中京都に歿す。著す所、老子鑑、心學五則、理學秘訣、心苑餘材等あり。

俗 儒 辨 一卷 寫本 蟹養齋著

本書は一俗儒の問に就て、自己の朱子を信奉する所以を説き、且朱學に對する疑難を辨解せるものなり。明和四年(六十三歳)の著に係る。

所收本は湯淺廉孫氏所藏本に據る。

逸 史 糾 繆 一卷 寫本 豬飼敬所著

本書は中井竹山の著せる逸史の、事實用語等の誤を正せるもの。文政十二年(六十九歳)の著なり。本書に收むるに當り、讀者参照の便を計り、逸史の文の丁數を注記す。

所收本は中古叢書本(帝國圖書館所藏)を底本とし、本會所藏本を以て參稽せり。

抱 腹 談 一卷 高松芳孫著

本書は高松芳孫の著にして、著者佐藤一齋を訪ひて、易説を談せしが、千古未發と自負せる説も、一齋の顧みる所とならず、退いて論書を作りて呈せる者是れなり。一齋、芳孫各々對手の易説を評して、互に抱腹に堪へすと云ふ。これこの書名を付せる所以なるべし。

所收本は井上巽軒先生所藏本を底本となし、東洋文化誌所載(一本と稱す)を以て參稽したり。

著者芳孫の經歷歿年等詳かならず。著書には本書の外に正學指要、日東易蘇等あり。

抱 腹 談 ノ 抱 腹 一卷 海保漁村著

本書は高松芳孫の抱腹談を讀みて、問ふもの答ふるもの、何れも抱腹すべきことのみなりとて、その誤謬を正せるものなり。

所收本は東洋文化誌所載に據る。

著者漁村は名は元備、字は純卿、晩年別に紀之と名づけ、春農と字す、漁村は其號。上總の人なり。大田錦域に師事す。秋田侯、濱松侯、之を聘して儒官となさんとせしが、皆應せず。安政四年醫學直舎儒學教授となる。慶應二年に歿す、年六十九。漁村人となり敦樸寡言、黽勉書を讀み、尤も經學を精究す。其經を治むる、古注疏に原ね、之を各經に徴し、史子集に參して、其の異同を辨訂し、是非を研覈し、以て古聖賢立言の原意に合せんことを務む。著述三十餘種、易書詩及論語には漢注考あり、學庸には鄭氏義

あり、孝經孟子左傳國語には並に補證あり。考據の精密、古今獨歩と稱せらる。

讀 直 毘 靈 一卷 寫本 會澤正志齋著

本書は本居宣長の直毘靈を批評せる者にして、大旨その我國躰の萬邦に勝れるを論ずるを稱すれども、古書に無き私説を立て、且儒教を排斥せるを駁撃するにあり。安政五年(七十七藏)の著なり。所收本は無窮會所藏本を底本となし、帝國圖書館所藏本を以て參稽したり。

讀 葛 花 一卷 寫本 同 著

本書は本居宣長の葛花(末賀能比連を駁せるもの)を批評せる者にして、その躰裁、讀直毘靈に類せり。本書及讀末賀能比連、讀級長戸風の三書は、安政六年(七十八藏)の著に係る。所收本は無窮會所藏本に據る。以下二書また同じ。

因に云、葛花を駁せる者に、阿州伊勢茂美(號白山)の非葛花二卷あり。天保六年著、同十一年刊行せらる。論旨正志齋の説に類せり。併看すべし。

讀 末 賀 能 比 連 一卷 寫本 同 著

本書は市川匡(號鶴鳴)の著せる末賀能比連(直毘靈を評破す)を評せる者なり。

讀 級 長 戸 風 一卷 寫本 同 著

本書は沼田順義の級長戸風(直毘靈、末賀能比連、葛花の三書を評せるもの)を批評せる者なり。因に云、級長戸風の駁書に、國學者側の菅原定理が著せる花能志賀良美一卷(天保九年著)あり。併看すべし。

本卷の編輯に就て、秘藏の珍籍を貸與せられたる、井上巽軒、内田遠湖二先生、及び藤塚鄰、湯淺廉孫、西島準之助、足利術述諸氏の厚意に對し、謹んで感謝の意を表す。

適從錄序

夫道一而已矣。苟非其人，不虛行也。世儒擾擾，見有邪正，方其言既發，則是非不可得而度也。西京遺民，維翁好學舊，讀書博，於文章也腴。只惜自幼及老，未就正于承學，則其見良偏。其言亦僻。近來有語孟字義出焉。東都官隱梅花清處士，荐應貴介友生之需，闢彼篇中之異見。一一無不歸至當也。處士於此書，不俾筆鋒爲角觝，乃理義之所在，而無可無不可。疇肯間然。辭葩詞藻，我東方振古不鮮矣。至于論道議經，則開國以來，未有若盛乎斯時也。然則維翁，清處士，雖所見各殊，而於道亦足以發。何相恨怒之有乎。余生其際，幸獲此卷，遂忘固陋，漫加評語。且伴數句冠其端。寧好事附于剖劂氏云乎哉。是稱文明之餘化，足爲太平之美觀也。時元祿丙子九月望日。東溟逸史探毫於觀海亭上。

適從錄篇目

上卷

主客問答二十條

下卷

撞巢窟

擊蛇笏

適從文

附

與岡恂翁書

答高慎夫書

答埜義叔書

一

一七

二〇

二三

二三

二七

二八

適從錄上卷

主客問答

肇秋猶若炎熱。弄涼一日逍遙于四瞻樓。此樓主為誰。橘宜昭公也。揖讓坐定。設茶菓談笑。主人問曰。有西都逸民伊藤維楨者。撰語孟字義。近方視之。卿既閱否。賓答曰。余於聖賢之書。未繇信得及。奚暇看徧近之編。格言至論。未充腸薰陶。更何辨鄙猥之議。主人曰。不然。世間知道者只些。黃吻童穉。白面書生。蠢蠢蚩蚩。匍匐歸之。為彼羅之。為彼籠之。今夫無辨。相率淪胥。卿其莫吝言矣。尚幸辨說。俾後進知所厥適遵可也。賓曰。唯唯。余目疴昏眊。慵看書。願舉公之所誦。余得而問然。如其當否。便公須再擇焉。主人曰。其區區細故。固不足論評也。請揭其大者一二。而聽其是正云爾。

主人問曰。彼謂聖人言德而不言心。後儒言心而不言德。是聖人貴德而不貴心。後儒不知德徒貴心故也。奈之何。賓答曰。余素聞彼曩市鄜之販夫。今蠹魚之一老爺。怪哉顧其所言。則嚶嚶然誇言。不悚不懼。虎瞰前脩。鯢視世儒。矜伐自逞。孰過於此。如茲言。即誤認我儒以性為學。

引列聖心
孟皆說人
不言聖心
又曰徒出
局其字出
辨得明英
快於作可
謂大英

佛氏以心為學之意而言爾。舜命禹曰。人心惟危。道心惟微。維廼萬世心學之淵源。真文忠公所以為編心經之本也。書曰。簡在上帝之心。易曰。復其見天地之心。所謂天地之心。普萬物而無心者也。伊尹曰。一哉王心。是乃聖人之心。純一而已也。高宗曰。啓汝心沃朕心。然則訓導者。推我中心之誠。納諸彼心之明處而已。洪範曰。貌言視聽思。思者心也。孟子曰。心之官則思。是也。大雅曰。維此文王小心翼翼。小心謂畏敬。惟聖罔念作狂。是以文王猶小心翼翼。況學者乎。蔡九峯曰。精一執中。堯舜禹相授之心法也。建中建極。商湯周武相傳之心法也。曰德。曰仁。曰敬。曰誠。言雖殊。而理則一。無非所以明此心之妙也。心既放失。則一身無主。萬事無綱。何以學古道乎。故聖賢之教。莫多岐。在存心窮理也已。老悖諱言云。聖人不貴心不言心。是何之謂也。孟子既說良心。說本心。說仁義之心。又以口腹耳目為賤為小。以心志為貴為大。曰先立乎其大者。則其小者不能奪也。此鄒君貴心而亟言。彼固孟子之罪人也。孔子曰。操則存。舍則亡。出入無時。莫知其鄉。唯心之謂與。言心之神明不測。得失之易。而不可不操存也。彼謂魯論言心也少。子曰。學而時習之。不亦說乎。有朋自遠方來。不亦樂乎。人不知而不慍。不亦君子乎。曰悅。曰樂。曰慍。非心而何哉。又曰。學而不思則罔。言不求諸心則昏而無得也。稱顏子曰。不遷怒不貳過。其不遷與不貳。非心而何哉。子曰。我十有五而志于學。又曰。發憤而忘食。樂以忘憂。曰志。曰憤。曰樂。聖人自言其心事也。徒局其字出在。則五常字出

于書經。而論語二十篇中無五常字。然而篇篇莫匪所以述五常之德也。鄉黨一篇無道德字。直載聖人言貌交際衣服飲食之事。抑道者不離乎日用之間。故聖人一動一靜。無往非道。無時非德。故曰。鄉黨一篇。道德之至。宛然如聖人之在。目也。詎為真道德字而猜之乎。維彼昏耄。未誦無題格禁牀詩乎。云胡生涯係蠶墨痕。追尋故紙。紛紜勞擾。無通其義。膠柱調瑟。刻舟求劍。其此之謂與。

主人問曰。彼謂後儒不知德。以德為得之義。然則德是待修為而後有之。豈足盡本然之德哉。如何。賓答曰。論語為政以德。集注曰。德之為言得也。行道而有得於心也。語做禮記之文。而意依韓子足乎已無待於外之謂德。其及釋明德。則曰。人之所得於天。而虛靈不昧。又釋德性曰。吾所受於天之正理也。朱子釋本然之德如此。天生德於我。註曰。天既賦我以如是之德。乃言賦子聖德。聊無修為意。釋文王之德曰。純一不雜。猶述湯之一德也。凡釋經因元文旨。而下註脚字。奚必停于一處。滯于一隅乎。以朱文公為不知德。自許為知德。余斷曰。非頑疾則齟狂。非齟狂則頑疾之劇。愁筆之於書。以為誑後昆。詎獲以一人之手掩天下之目乎。凡彼所引之朱說。有出于註釋者。有出于手書者。有出于語類者。或有悉出于三書者。或有並錄于手書語類者。如其悉出。則以註釋為證。而答之。如其並錄。則以手書為據。而酬之。昔人於朱子書。亦皆如此耳。

引孟子易之語辨之。義理至當。有復性字。其復來向矣。新語也。

此一段全探朱子之解。而為貼己之言。與上異。下文甚殊。

主人問曰。彼謂先儒用復性復初等語。皆出于莊子。奈何。賓答曰。孟子曰。堯舜性者也。湯武反之也。反復也。豈非復性之謂乎。易曰。不遠復。豈非復初之謂乎。彼看老莊也熟。而看聖經也危。故好記得老莊。而不記得聖經。己先陷于異端。却毀先哲為老莊之黨。以蠹測不及之詆訶。其言之無謂。如魏人之訾火浣。越犬之吠雪華也。群小之壓碩德。其勢之不敵。如精衛填滄海。蚍蜉搖巨樹也。變東為滄。變大為巨。則為有諱言耳。主人問曰。彼謂朱子為陰陽非道。所以陰陽者是道。乃非也。如何。客答曰。我嘗讀易及通書。曰一陰一陽之謂道。繼之者善也。成之者性也。朱子解曰。陰陽氣也。形而下者也。所以一陰一陽者理也。形而上者也。繼之者。氣之方出而未有所成之謂也。善則理之方行。而未有所立之名也。陽之屬也。成則物之已成。性則理之已立者也。陰之屬也。又按善以元亨利貞言。性以利貞言。以文脈之聯接考之。道字分明所以一陰一陽之理言也。彼直指一陰一陽以為道。乃未曉循語脈而看焉。分道器而說焉。其議謬矣。

主人問曰。彼謂天道有流行有對待。然天道之所以為天道。本以流行而言。對待自在流行之中。本非有流行對待之二端也。又評有理而後有氣之說曰。可謂臆度之見耳。奈何。賓答曰。咸非也。流行對待之分。以變易交易矣。聊假言之叙而曉之。或言春夏秋冬元亨利貞之類。乃流行之謂也。或言東西南北仁義禮智之類。乃對待之謂也。流行天道也。以氣而語其行之序。則溫熱涼寒是也。

對待地道也。以質而語其生之序。則水火木金土是也。天地之理。不得自然不恣地矣。彼徒瞥說易變易也。而惹之未識易所謂天地定位。山澤通氣。天數五。地數五。五位相得而各有合。是皆以對待言。妄肆說了。又獨何心哉。按雖理氣合一無間。而理無形。氣有跡。故似理當稍先語。所謂太極生兩儀。所謂太極動靜而生陰陽是也。朱子曰。推之於前而不見其始之合。引之於後而不見其終之離也。天真二五妙合。無前後之可論。迺文公既屢說去。彼眩蔡虛齋以下明儒紛紛之說。惛議我文公。但未深思而已。

主人問曰。彼誹中庸章句。指天以陰陽五行化生萬物而為天命曰。可謂之天道。不可謂之天命。不知奈之何。客答曰。此句猶是謂天道流行。貼本經天字。下句說氣以成形而理亦賦焉處。便分曉貼本經命字說出。朱子釋經文。所謂蠶絲牛毛。毫分縷析者也。彼蠢愚復狠。不虛心商量。主張我見。叨議往哲。好欲尋瑕疵。指摘成文。或取上一截。而捨下一截。或乍奪下句。而聿韞上句。點瀆珠璣。分裂錦繡。於序聖賢之典型煥炳。欲其誣亦難乎哉。又問。彼謂命字一是氣也。乃謂陳北溪釋命一字兼二義。有以理言者。有以氣言者曰。杜撰特甚。如何。賓答曰。熟聆彼言。含糊不決。冥搜不實。若命字。以二義解之。判然甚透徹。更何疑之有乎。自窮達天壽出於氣數。言之。則子曰。不幸短命。又曰。命矣夫斯人。子夏曰。死生有命。孟子曰。得之有命。程子所謂中人以下以命處義是也。自天賦于人物之理言之。則夫子五十知天命。子思所謂天命之性。

均是君子小人之別。均之。義理至當。有復性字。其復來向矣。新語也。

詩曰。維天之命。又曰。其命維新。書曰。奉若天命。又曰。顧諟天之明命是也。且天道天命。元非兩端。以流行與賦予分也。已。孟子既說良心。又說非心。便心字固匪一般。其如性字情字才字。復焉止二意。彼硬做字同必義同。又硬做字殊必義殊者。黯黯不了之論也。薛文清曰。經書中。有字同而義異者。如易泰卦泰。乃亨泰之義。論語君子泰而不驕。泰之舒泰之義。大學驕泰以失之泰。乃侈肆之義。又如書言有忍。乃濟忍。乃容忍之義。論語言忍。乃忍於為惡之義。孟子言不忍人之心。乃仁心發見之義。讀者當各即其義而觀之。不可以字泥也。朝鮮李滉曰。夫子所謂己欲立而立人之己字。公也。顏子克己復禮之己字。私也。一字之間。一公一私。不啻如霄壤之判。尤不可以不審也。又有字異而義同者。曰威有一德。曰皇建有極。曰天地之中。曰止於至善。只是一理。敢莫差別。猶一室開四窓也。又有字異義相近者。程子訓人以敬。司馬公訓人以誠。孔明周子訓人以靜。雖言不侔。而其趨則近似。猶一堂設兩階也。我普蒐古經。困勉所得。豈可敢浮語輕言乎。唯恐後生之惑。故有不能已於言也。

主人問曰。彼譏朱子以無聲無臭為道體。又所以然之理為道體。曰於聖人之書無斯理。老莊虛無之說也。如何。客對曰。是亦摩一句掇片言當全體。而使其言唐突偏跛也。譬猶山有草木禽獸。指山之一艸而為山歟。程朱素以性與天道為道之體統也。無聲無臭句。朱子憑詩及中庸而解周子所謂無極字。所以形容斯理之妙。下句以樞紐根柢解太極字。所以莫墮于虛無之看也。凡事物之

此段學論
所須知者
也。暫舍
辨之。唯
義。文章
他文到
可也。

理。有表有裏。有精有粗。朱子以為其表者人事之儀。而當然之則也。以為其裏者。道義之體。而所以然之故也。如子孝臣忠。乃當然之則。而向上面以尋其忠孝之本。自仁義之性流出。是所以然之理也。魯論所謂文行忠信之屬。當然之則也。曰逝者如斯夫之屬。所以然之理也。揆諸前聖之言意。昭合無阻。符合不違。展哉同心之言。其臭如蘭。此之謂也。言詞氣象。因時世之風。故似辭殊而其歸同。便群聖賢之語也。若以言同而信其歸一。乃佛老之話心性。譚道德。亦與我道為一致耶。仰瞻古聖之語。自二典暨二漢。至殷盤暨周誥。言語文字不均。氣象殊邈何哉。世代變革。人物替換故也。然而要歸之一者。以道無二本也。詩洎禮易洎春秋。文章固遼絕。言語孔懸隔。或緣書法別。或緣世習異。然而其道大端。何以殊哉。論孟學庸。時世相接。源流不遠。雖道脈昭晰。而其言說氣象。則大段不整一也。矧程朱之出。上去於孔孟之時二千五百年。風移俗易。淳澆不齊。六經殘缺。釋李喧囂。此時豈得與孔孟言詞氣象一同焉哉。若強同之。則徒覩却堯學他行事者也。故孔孟程朱所同道也。心也。不同者言詞文為也。孔孟程朱。若易地皆然。今以言詞之異。却疑其道之真。輒所謂夏蟲疑冰。實書癡也。曉于道者。發前聖之未發。而道益明矣。達于文者。勉去陳腐之言。而文始奇矣。曷必勦說蹈襲。而拾唾涎涎耶。易曰太極。書曰降衷。詩曰秉彝。禮曰太一。夫子所謂一貫。顏子所謂卓爾。孟子所謂其原。言不同。然理即同矣。性也天道也。朱文公所說道體云者也。後學斷然莫迷於書癡翁之言也。

引易中庸
孟子出
乎理字
不滯如
長江流
文公再
此語而

主人問曰。彼譏程朱說理字曰。理字聖人專屬之事物。而不屬之天人。聖人以道字為言。而及于理字者甚罕矣。道字活。理字死。如何。客答曰。嗚呼酷矣。鄙陋難變。痴騃難曉也。先民查覓世衰道微。漢唐諸儒。未識明命具于心。萬物備於我之義。徒以記誦訓詁為學。以詞華藻繪為學。粵逮濂洛關閩之君子。始闡明性道。發揮倫理。聖學晦。復昭。否。復行。猶披雲霧而覩青天。剪荆棘而循大路。輒繫程朱獲孔孟之正統。為後學之軌範。不可得而罔矣。易曰。從性命之理。程子云性理也。即本於斯。易曰。窮理盡性。程子窮理之說。即本於斯。中庸曰。文理密察。足以有別。言智也。朱子智者妙衆理而宰萬物之說。其本于此與。周子云。理曰禮。言有條理而不紊。則禮也。朱子禮者天理之節文之說。其本于此與。孟子曰。心之所同然者理也。義也。故理義之悅我心。猶芻豢之悅我口。又曰。始條理者智之事也。終條理者聖之事也。程朱為來裔唱義理之學。迺其原發於孟子。固非程朱之肇言也。熟看諸經說。豈可謂聖人不屬理字於天人乎。豈可謂聖言及理字者罕矣乎。至厥道字活。理字死之說。似莊子混沌死語矣。戲侮之誕。可笑之尤也。

主人問曰。彼據陸象山之說。而毀先賢曰。天理人欲語。出于樂記。記曰。人生而靜。天之性也。感於物而動。性之欲也。物之感人無窮。而人之好惡無節。則是物至而人化物也。人化物也者。滅天理而窮人欲者也。彼以為此語根于老氏廢之。却言天理二字。不見于聖經。奈何。客對曰。

禮記一書。雖兼載而駁雜。間有醇乎出于正者。如曲禮內則之類是也。學庸垂世立教之大典。亦出于禮記。前修曰。樂記說樂之理。如此其妙。誰識非遺經乎。天理二字。假饒程朱始發明。而無古言之證。復於道無妨。於義無障。則云胡有忌避。況出在於先民之書乎。所謂佛氏尤忌言理字。彼陰用佛意而攀理障之說也明矣。陸氏說心理也。教人澄心。乃是禪學也。昔人既辨之。陸氏者彼之冠冕也。

主人問曰。彼議胡雲峯謂辨老佛與聖道異處。而在有無感滅之差。曰亂道之甚也。如何。客答曰。老子弗覺孟子所謂固有之性。而為虛無。佛氏弗悟易所謂寂感之妙。而為寂滅。胡氏剖折此間以快豁。大功於學者。謂之胡說亂道可乎。彼方混淆濁。雜邪正。而自為亂道之賊也。且彼為易云寂然感通。贊著德而云爾。非謂理之體也。寂感先賢以為心之體用。未聞為理之體。是亦狐疑猶豫之論也。夫視一而識百者。生知之聖也。聞一以知十。乃亞生知者也。聞一以知二。乃學知之資。以類而推測。因此而識彼者也。夫子睹觚不觚而嘆時俗。觀歌器而戒盈滿。依射儀而教德行。聽童謠而示自取。聖人淵淵一理。四通八達。聲入心通。從容自得可知焉。古人引詩書。借辭以明其意。大學言緝熙敬止。便假止字為字眼。而說止於大倫之極矣。孟子曰。何其血之流杵也。懼後君之好殺伐。故假設武成之辭而誡焉。皆匪詩書之本旨也。六書上古制字之源也。猶有假借法。而彼此相通。矧易之為經。稽實待虛。萬事各用。文王豈言乾元亨利貞。迺為占辭。孔子傳

彼聞一不
能知二之
至固陋之
猶見也人
君子以議
只不自噴
也。其非

以爲天之四德。今日著德語不可爲心德而用。然則古人之借引。皆非歟。孔子不足法歟。

主人問曰。彼譏易傳序體用一源。顯微無間。曰是唐清涼國師之言也。後學未知來處而珍重。奈何。賓答曰。伊川平生不好雜書。參同契。火珠林。申韓莊列。猶不見也。於釋氏之書。往往未曾接目。斯識匪襲佛語而學之。偶然相同耳。我自幼多作文字。其語暗與古文侔者不少。謂我不信。天日其嗷。絕域殊俗。世逃辭異。然間如是。矧中州之人。時世邇承。風均詞齊。而罔偶然相同乎。雖言同而意實別。猶形肖心別。伊川就太極二五自混一。而象與理自融會之妙處。說出來。佛氏意豈其然哉。佛本出于西戎。鴟舌之語。得重譯而始通。根多之字。借經文而始彰。故釋氏援聖經。則十而八九。後賢取釋氏。則十而一二。其亦大率出于時俗語。而非僞佛氏之語也。近世顧氏長卿寄我書曰。浮屠氏種種造言。劫怯愚民。延蔓構言。籠絡聖賢。宋元浮屠。竊取歷代大儒之名言。而混同其書。附會其說。此間不可不辨焉。故訝佛祖三經之外。槩出於後世之僞撰也。

主人問曰。彼譏程子沖漠無朕萬象森然已具之語曰。是出于莊子及禪錄。如何。賓答曰。吁人之曹聞。一至于斯歟。先覺有言。曰老佛我儒字字是。而句句合。然而不同。其不同者。謂本領之差却也。其言之宜採。則引用弗鮮。所謂其嗜欲深者。其天機淺。又謂尸居却龍見。淵默却雷聲。或云常惺惺法。或云活潑潑地之類是也。君子不以入廢言。當視其規模之洪也。到其性命之舛。人倫之悖。則亂之匡之。而不敢少假也。聖賢謹乎道。嚴乎倫理如此。更奚議耶。

此文先立
後入問答
而後旋中
翰波瀾
得文章家
之妙下今
誰與清處
哉士爭筆
鋒

主人問曰。彼解四德。以爲慈愛之德。遠近內外充實通徹。莫所不至。之謂仁。爲其所當爲。而不爲其所不當爲。之謂義。尊卑上下。等威分明。不少踰越。之謂禮。天下之理。曉然洞徹。莫所疑惑。之謂智。奈何。賓答曰。聖賢誨人。有專挑仁處。有專挑禮處。有對舉仁智。有對舉仁義。或咸陳四德。或盡述五常。夫提撕一字。則專言而兼餘事。並揚二字。則以體用說。而包其餘矣。逮述四德五常。則偏言而各得其當底。一理渾淪之妙。見於分殊之中。彼連四德解之。而各盡其用。則言複意重。以失分殊之宜。且性者。人人稟得者也。若彼說。則似中庸所謂唯天下至聖能盡性。而極仁義禮智之德者。豈固有之體段哉。彼未理會程朱專言偏言之義。本于古經之語。漫浪厭之。厥胡亂狼藉到此。亦可駭哉。由是想見。彼作古義。妄謬差錯。梗槩爰察。

主人問曰。彼謂仁義禮智四者。皆道德之名。而非性之名。自漢唐諸儒。至於宋濂溪先生。皆以仁義禮智爲德。而未嘗有異議。至伊川。始以仁義禮智爲性之名。而自此學者不復用力於仁義禮智之德。至於其工夫受用。則別立持敬主靜之目。不復徇孔氏之舊。奈何。賓答曰。歐陽永叔一生用力平心二字。善哉。薛敬軒謂。不非人是己。便所以學之進也。旨哉。彼既不能平心無我。故所說字字窒。而陷于告子荀子之見。荀子曰。人之性惡。其善者僞也。告子杞柳之喻爲性惡。故爲性本無仁義。必待矯揉而後成。彼爲仁義非性之名。乃繇此等之說與。孟子所謂率天下之人。而禍仁義者也。嘗聞四德之說。昉出於易。易曰。乾元亨利貞。是猶言性仁義禮智。故文言曰。君子

體仁合禮和義貞固。周子亦謂之正。所以智之為智。則以正固也。性命道德。祇是一統底事。為有所指而異名而已。一而二。二而一。敢非截然不相通也。仁義之理。自天之賦予而謂之命。自人之稟受而謂之性。循仁義而之焉。謂之道。得諸躬而不失。謂之德。故以仁義禮智為性。為命為道為德。又何妨之有也。孟子曰。君子所性。仁義禮智根於心。又曰。仁義禮智非由外鑠我也。我固有之。又指惻隱羞惡辭讓是非。為四者之端。又謂。仁義禮智之於父子君臣賓主賢者。也。命也。有性焉。杞柳之論。以為順人性而行仁義。然則四德為性之名。渙然無可敢疑也。彼已誦孟子之言。而倚牽為話頭。然憚于有我。莫淑濯舊見。更翻孟辨。橫附己意。以文飾其非。矜傲之私。一生胸臆。乃所謂冕旒蔽目。黠塞耳。泰山為之不視。雷霆為之不聽。猶還曷諫焉哉。孟沒以來。歷秦漢魏晉。以迄隋唐。人才孔衆。然而揀豪傑之士。便唯有韓文公而已。英華發。而文章淳如興焉。論辨雄。而聖道煥乎昭焉。其言曰。博愛之謂仁。行而宜之。之謂義。由是而之焉。之謂道。此三句乃自率性之謂道點化來。又曰。所以為性者五。曰仁曰禮曰信曰義曰智。所以為情者七。曰喜曰怒曰哀曰懼曰愛曰惡曰欲。爰知仁義為性。孟子韓子既諄諄詳言焉。彼為伊川始說。還匪大誤乎。諸子問仁。而夫子答處。各異者。仁是天性而為心之全德。凡學者僉覓詣此域而已。故夫子訓以求之工夫。曰居處恭。執事敬。言恭敬則心存。理得而曉仁之實矣。孟子於是乎言。仁人心也。義人路也。舍其路而不由。放其心而不知求。哀哉。學問之道無他。求

冕旒蔽目
云云。斯假
事者之乃
來。為假
塞耳目之
喻而已。

其放心而已矣。求焉由焉之工夫。何在乎。曰恭敬也。克己也。敬恕也。其言詛之類也。厥如是。乃能存心。得而入乎全德之境也。夫子答諸弟子之語。雖因其稟資而各異。然所以到要處會其同也。若以恭敬克己敬恕言詛。直指為仁。便譬如以色為目。以聲為耳。以味為口。庸其實體乎。或以熱為火。以寒為水。指雲為龍。指風為虎。庸其實物乎。差之毫釐。謬以千里。學者念哉欽哉。且敬與靜。其歸不遠。敬則心存而不走作。故存心曰之敬。不走作曰之靜。大學所謂定靜。周子所謂主靜。所以學到孟子不動心之地也。仰惟敬者。千聖同符。入德之門。稱堯欽明。稱舜溫恭。稱湯敬躋。稱文王敬止。稱武王敬勝。夫子曰。修己以敬。曾子曰。戰戰兢兢。子思曰。慎其獨。孟子曰。求放心。是皆所謂恭敬者也。然則持敬主靜。匪用力於仁義之德耶。持敬主靜。匪學問始終之要耶。彼却曰。程朱持敬之誨。匪聖門之舊軌。是乃殷紂謂敬不足行。而顏紀綱。蘇軾謂打破敬。而得罪聖教者也。彼非吾徒也。乃桀紂之徒也。本源一違。故詖邪之辭。七顛八倒。而至老且斃。不能省悟其過也。噫。主人問曰。彼議程子專言便仁之一事。實兼義禮智三者。曰其言為定論。而學者莫能識其說之謬。非與。客答曰。非也。孔夫子教門弟子。恒說仁一字。逮孟子而說仁義。或說仁義禮智。抑夫子之教。豈缺了緊要。俟孟子而後補也乎。四德之元者。善之長。而貫亨利貞。故曰乾元坤元。五常之仁者。心之全德。而兼義禮智信。故示以仁一字。譬猶專言重華協于帝。乃包濬哲文明溫恭允塞。

此一篇
文義非
支微者
乃不能
焉。美玉

之喻。本於。亦能。雖。子。於。理。能。程。雖。也。妙。分。發。明。一。格。千。言。古。之。也。

性。字。訓。朱。文。公。林。子。崖。高。中。支。等。說。大。概。如。許。

文。字。出。處。之。則。本。細。義。非。大。體。之。所。關。亦。故。辨。答。亦。故。輕。換。來。甚。法。章。之。又。

凡。作。文。之。類。不。然。語。意。自。然。不。苟。類。案。不。苟。玉。子。下。之。無。對。之。又。無。見。之。不。越。漢。之。罪。不。越。漢。於。左。傳。不。苟。其。用。字。不。苟。如。此。

偏言濬哲文明温恭允塞。乃各有其一德也。猶專言天縱之聖。乃包温良恭儉讓。偏言温良恭儉讓。乃各有其一德也。故曰性。曰仁。則渾然而義禮智信在其中。曰仁義禮智信。則粲然各具其一理也。譬有美玉於斯。專舉其渾然處。乃包温潤瑩徹條理堅確四者。偏指其粲然處。乃四者各有其文采也。玉猶性。而四者猶五常。温潤者仁也。堅確者義也。條理者禮也。瑩徹者智也。故仁義禮智非於性中而有四箇也。因其情之發。而反名其性之體也已。朱子說仁。詳見厥文集語類。今此毫言。詎嘗誣程朱爾哉。並孔孟而厚誣之者也。然而明者一見之。前後牴牾。彼此杆格。罅漏百出。無足強辨也。

主人問曰。彼謂橫渠說心統性情。非也。孟子曰。存心養性。又曰。動心忍性。以此觀之。心自是心。性自是性。所指各殊。心統性情。單言心而可也。既言存心。而又言養性。其言豈非贅乎。如何。客答曰。子思曰。喜怒哀樂之未發謂之中。發而皆中節謂之和。所謂未發已發者。非心之動靜而何。所謂中和者。非性情之德而何。橫渠心統性情之說。蓋出於此乎。孟子言存養者。謂操守此心不舍。則不害本體。而性得其養也。是指天性言之。動忍者。謂竦動其心。堅忍其性。是指氣稟之性言之。張子之言。於孟子之語。則無攸相碍。而孟子之言。亦不自贅復也。性字情字。偏旁皆從心。性是人生而有。心。方具是理也。情是心顯處。從青者。色初見於東方者也。彼未見爾雅乎。爾雅訓某字某字皆某字也。非字字盡致異義。極阻滯也。

主人問曰。彼譏明鏡止水四字出於莊子。聖人之書本無此語。亦無此理矣。曰心生物也。鏡水死物也。不可以死物喻生物。如何。客答曰。明鏡無埃。宜喻心之無欲。止水無瀾。宜喻心不妄動。所謂絜矩以喻此心之揆彼我之間。權度以喻此心之揣輕重長短之意也。明鑑止水。能照萬象。而妍媸之影。無所逃其狀。猶心應萬事。而善惡之情。無所度其實也。可謂譬喻得而抵當矣。何以言無此理乎。若謂不可以死物喻生物。則以權度譬心。孟子非與。詩曰。生芻一束。其人如玉。以玉譬人。詩人亦非與。莊子嘗汲於洙泗之派。而妄其源者也。儻其言之是者。安可悉廢之哉。

主人問曰。彼謗虛靈不昧四字。便用禪語。然歟。客答曰。不然。易曰。虛受人。書曰。惟人萬物之靈。其虛受者心也。所以其靈者。亦心也。故合而解明字曰虛靈不昧。虛靈明也。不昧亦明也。是正反說也。凡書有橫豎說。重疊說。則於其字丁寧致意焉。更非有兩意也。解敬解誠。曰主一無適。曰忠信不欺之類也。先賢取禪林之語。亦間有之。到其用處。乃大抵不同也。今不料意義之異同。不揣言詞之前後。推以為與禪意齊。則似以瓊瑤為賦砮而賤之。以夫子為陽虎而拘之。古書云。無理之至。不韙之罪也。主人曰。熟聽卿之董彼錯處。始有脆然逆于心。中則愕愕爾屢驚駭。終則愉愉如獨喜悅。其投隙地也。若庖丁之牛。其不凝滯也。若懸河之流。其炳也若分白黑。其易也若辨菽麥。豁乎若破竹之

末篇一語錯
條。言語錯
疊。莊子活筆
似。莊子活筆
勢。文章喜章
家。之。所。喜
也。結語
應。首。段。揖
讓。首。坐。定
句。尤。尾
好。關。鍵。

勢甚快哉。甚快哉。賴是推之。須無攸迷厥方矣。大題目處已彰彰。輒瑣碎之事。當不待攻擊而自傾墜也。客曰。曾聞君子無所爭。我之於彼。未嘗面晤。奚忿爭之有也。除非欲覈其正譌。何則彼言有誤而信儕。便為害弗細。夫息邪說。距詖行。則聖賢之徒也。我欲其効之。庶幾免其咎乎。日既晚。且休焉。乃揖左右而請出矣。

適從錄下卷

撞巢窟

洛人有名維楨者。讀書能文。但未知學之宗。喜可否先賢。或譏程張分釋氣質之性天地之性。或議程朱說體用二字。謂不出于聖經。其論我得而既聆焉。厥到昏冥偏駁之酷。則決然非大學。非中庸。疑十翼。我雖未視厥為說。然緣誤德性居敬之大義而推度。則其繆戾方可知焉。凡渠議程朱之學。廼攀陸子靜王守仁為巢窟。還不陽言焉。含含糊胡。沮喪於正大之姿。呈露於姦佞之態。彼肺腑之本色也。誹天性之說。廼以荀揚為巢窟。嘗體用其他文字出處之類。槩以明儒異說。及禪家語錄為扳援。非大學。廼以楊慈湖為巢窟。疑十翼。廼以歐陽子為巢窟。祇非中庸之一事。未審其援據矣。意猜其文廣遠高妙。而不類于魯論乎。伏惟成湯言若有恒性。夫子言繼善成性。孟子言性善。又曰。形色天性。乃皆謂天地本然之性也。伊尹曰。習與性成。夫子曰。性相近也。孟子曰。動心忍性。又曰。口之於味也。目之於色也。耳之於聲也。鼻之於臭也。四肢之於安逸也。性也。乃皆謂兼氣質之性也。爰識天性洎氣質。其說之濫觴。即自古已既有確論矣。但分釋

撞巢窟一
篇。首一
而陳列
之。而後
破之。可
謂奇思
文也。

大易以遇
卦之卦此
以勢之必
理如懸所
謂如懸所
水如懸所
也。驚濤
者。河。

之詞。權與于程張而已。其詳余曾著於性理論。大易以遇卦之卦為真悔。豈非體用之分乎。書曰。道積于躬者。體之立。敦學於人者。用之行。論語曰。禮之用和為貴。為其體之嚴也。繫以嚴與和非做禮之體用乎。子曰。學不厭教不倦。繫以智與仁做體用而說焉。孟子曰。仁人心。義人路。繫以仁與義做體用而說焉。子思曰。大本達道。體用之謂也。又曰。成己仁也。成物知也。性之德也。合內外之道也。繫更以仁為體。以知為用。而謂性之德合內外。乃觀體用一源之妙也。經傳曰本末。曰內外。曰敬義。曰寂感。曰入己。且自禮之賓主。軍之奇正。以至文章之起伏開闔。藥方之君臣佐使。雖事殊詞異。皆體用之誼也。經看緯看。錯雜而看之。廓如無所窒闔矣。相鼠有體。矧伊人乎。汝當有耳目鼻口之體。既有其體。則當有視聽呼吸言談之用。何獨於程朱之語疑之耶。抑為不可言古人之所未言。則虞夏之書。不言學字。到殷之中興。而後初言學字者。是乃傳說之謬乎。又為希言處以不可數言。則臻春秋之時。而後數言學字者。是乃夫子之誕乎。三百篇變為離騷。離騷變為漢魏晉而為賦為古詩。又變為五七言律詩。或為長吟短詠。都隨人心之淳澆。而世渝風移。隨風之移而詩賦之體漸變。聖賢之言語。亦猶是也。此理勢之必然也。孟子曰。不以辭害志。以意逆志。禮云。疑事毋質。又云。毋身質言語。讀書要法也。汝自以為到至處。將軀為準為則。敢無所忌憚。故讀書而不克闕疑迎志。奚而無禮於先覺。宜鑑詩人之刺也。大學名義。審見于古禮書。孟子曰。設為庠序學校以教之。夏曰校。殷曰序。周曰庠。學則三代

共之。然便在建大學以教人必矣。其教法條目。知何書乎。非論語。非孟子。非詩書易春秋。旁求得諸禮記之中。不知真否。若果而信。則今所存之經文。是三代教法條目。無可訝者。或果而為滅于秦火。則今所在之經文。是後世曲學者之偽作也。先賢曰。正經辭約而理備。言近而指遠。非聖人不能及也。豈敢後世曲學者所得而言乎哉。慈湖之學。簡疎曠闊踰于象山。故於大學之條目緊密而階級嚴正。悉相背馳。是惡其碍己。而去大典也。王介甫廢春秋。便以與己意相違也。司馬公疑孟子。便以有知見未徹也。故曰。目眩于異同。意出于愛憎者。子車子之瑕也。車子之瑕。其色粹而黑。一產而三家焉。其二粹而黑。其一則駁而白。惡其非類于己。齧而殺之。其同于己者字之。伊尹曰。有言逆于汝心。必求諸道。有言遜于汝志。必求諸非道。是亦慮於嗣王之喜同惡異而失邪正之權。而訓之爾。易之為經。歷乎義文周孔。而寢成矣。如十翼。則詞義峻潔玄微難測。三才理備。浩瀚如天。所謂韋編三絕而後作焉。程朱性理之學。蓋基址於此歟。歐陽氏文冠于一世。然經業則未。故迷于至公之大義。而得唐經亂周紀之愆。夫訕大傳之失。乃有先儒之論斷矣。中庸聖神道統相傳之書。其要在中一字。允執厥中。堯命舜。舜亦以命禹。見于論語及書經。湯執中見于孟子。又時中者。易經之大旨。皇極者。洪範之樞軸。皇極則中也。中之為道。格哉宏哉。故說極中和之效驗曰。天地位焉。萬物育焉。猶孟子語浩氣之體段。而曰至大至剛以直養而無害。則塞于天地之間。書述韶舞之效。而曰蕭韶九成鳳凰來儀。詩詠關雎之效。曰麟之角振

振公族于嗟麟兮。悉是贊其功效之大云爾。安只猜中庸之為高遠乎也。故中庸一經。考諸三王而不謬。建諸天地而不悖。質諸鬼神而無疑。百世以俟聖人而不惑者也。此正學而麗異說。不惑即奈如。師自己而不師古昔。不錯即奚為。先輩嘗評陸王曰。象山之說。怪怪奇奇。驚感于人。其為人磊磊落落。明白者也。陽明之說。如拾如醴。克媚于人。其為人如鬼蜮狐狸。陰邪者也。求是編。學部通辨。及林次崖。朝鮮李滉。辨之孔勗矣。彼未見之乎。見之然不解乎。云胡溺于奇怪之譎。而與鬼蜮同巢穴耶。書曰。闢四門。明四目。達四聰。詩曰。先民有言。詢于芻蕘。孟子曰。子路人告之以有過則喜。禹聞善言則拜。子曰。舜其大知也與。舜好問而好察邇言。今也汝訑訑之聲。自壅四聰。仰而不循舜禹之塗。伏而莫遵孔孟之訓。是以弗識詢道於君子大賢。况咨之同列朋友乎。夫程朱君子大賢也。嗚呼曾謂程朱不如芻蕘乎。庶幾汝謙遜自牧。激昂奮發。勇于自修。欲傲於子路。屈己受善。欲刑於大禹。舍己從人。欲儀於大舜。周訪先覺。以弘聞見。則當排面墻。破鬼窟。而泰然居安宅。脫脫行正路也。人皆稱艸萊之真儒。清世之逸民。豈匪天下後世之美觀乎也。

擊蛇笏

余嘗聞米幹叔與維楨為故舊。面質之曰。汝頗僻一念生於內。而言行萬事違于外。丘瓊山贊文公曰。周東遷而孔子出焉。宋南渡而文公生焉。自孔子後一人而已。泰華之邵。雖無離婁之明而視之。

此一篇辨
倒他失
處快段
未而排
悔三驅
禽猶門
敵城而
一路也
好文法
好一最

擊蛇笏一
篇忠觀碑
文忠觀碑
文忠觀碑
文忠觀碑
文忠觀碑
文忠觀碑
文忠觀碑
文忠觀碑
文忠觀碑
文忠觀碑

雷霆之驚。雖無師曠之聰而聽之。然汝獨為盲聾。只管營識之。外人皆憎汝之虛妄。詬訾謔諷蜂起。顛痛懲矜傲。須革異見。不然則我與汝肯不周旋。而遂絕交。見叔傳昔者羅整菴以書規戒陽明之失。而遂絕交。幹叔之彈維楨。即朋友之義也。鶴真昌曰。維楨為人。外軟弱媚悅。恰似所謂鄉愿者。內凶狠拂逆。過乎苟蘭陵。初賴朱說得通明。而後毀之。陰接浮屠日親厚。而陽斥之。植亦幟而欲為人師。然莫識者之來。自壅不順無賴之子弟。而為多罪逋逃之淵藪。只是依舊而業銜售之心術而已。豈足敢掛齒牙乎。見于真昌文雖其語似傷於忍刻。必當中彼之膏肓也。蘇子瞻曰。苟卿者。喜為異說而不讓。敢為高論而不顧者也。其言愚人之所驚。小人之所喜也。子思孟軻。世之所謂賢人君子也。苟卿獨曰。亂天下者。子思孟軻也。仁人義士如此其多也。苟卿獨曰。人性惡。桀紂性也。堯舜偽也。由是觀之。意其為人必也剛復不遜。自許大過。見于東坡文集其門人李斯事秦為相。坑儒士愚黔首。焚燒聖人之六經。烹滅三代之諸侯。咸用苟卿之言。彼李斯者特甚者耳。其後身軀赤其族。秦復遽滅亡。張子厚曰。既學而先有以功業為意者。於學便相害。既有意必穿鑿創意。作起事端也。德未成而先以功業為事。是代大匠剗。希不傷手也。又曰。世儒器然不知反約窮源勇於苟作。持不逮之資而急知後世。明者一覽。如見肺肝然。多見其不知量也。見于橫渠語錄潛想彼子之非大學。非中庸。非大傳。或曰仁義非人性。或曰居敬非聖教。則何以異乎苟卿謂亂天下者子思孟軻也。人性惡。堯舜偽也。世儒懵經綸。而靡崇正道。故恬而不怪。不咎

耳。此篇亦終篇。諸公之語。以總括。

不攘之。我復匪懷私忿也。為道為國。恐恐然深惶。彼說萬一行於後世。乃又有李斯乎。其毒酷於洪水猛獸之災。我為是邇以米鶴二子之言為按。逃以蘇張二公之說為斷。彙記以毆奸兇。猶孔道輔之擊蛇笏乎。見于闕里誌。

適從文

適從文好。看一。機軸也。唯聖人而後知。聖人非聖人。則不如不。

孟軻氏曰。宰我子貢有若智足以知聖人。汚不至阿其所好。乃引其語。以證自有生民以來未有孔子也。余歷撰書史。司馬公。張橫渠。邵堯夫。張南軒。呂東萊者。大宋之俊傑英邁也。其言行粹然。為天下後世之表儀。逮宋之末。有勉齋黃氏。西山真氏。元有許文正。劉靜修。明與有薛文清。丘瓊山。皆當時君子人。而言行顯乎後代。此數賢者。復豈阿其所好而虛譽哉。僉曰。程朱聖賢之資。義理之宗。德邵業鴻。其學迢跨唐越漢。上接千載不傳之統。下開萬世罔窮之道。自孔孟沒後。唯有程朱而已。世邈言湮。經業日黯。近有東溟皕生山鹿伊藤者。此二人者。自謂得聖學之歸。繼孔孟之統。叱咤程朱。蹂躪諸儒。如臧獲僕隸然。詩曰。具曰予聖。誰知鳥之雌雄。譬若矇瞍之摸象。唯聖人而後知聖人。世有伯樂。然後有千里馬。凡有聰明者。孰棄歷歷命世之善。而遵碌碌皕生之謗。乃造適從文曰。浮雲蔽陽靈。厥輝不可遂晦。泥砂填泗源。厥流不可遂闕。嬖人臧倉之沮孟軻。叔孫武叔之毀仲尼。適取不知量之辱。其於聖賢果奚為。陸王之徒嘲君子。猶武叔臧倉之譏。尊德而謙下者。作責沈以悔昨非。貴道有亶者。武夷白鹿各建祠。苟弗須憑陳

愆不忘率也。由舊章。

之辨。厥學蕩蕩乎咸熙。鳳凰高翔止于千仞之岳。不獲與鸞鷟遊。大鵬將徙擊于萬里之水。不能與斥鷃儔。蹊間茅塞嶺峻。彼意自用而不求。我小子竊粵悼。將詢尼丘暨紫陽。古曰。天無二日。土無二王。模範一揆道聿恢光。詩曰。不愆不忘率由舊章。噫嘻邪辭諛行。靡圯綱常。

與岡恂翁書

仲秋連雨不霽。濕微深於長夏。吾子歸鄉愈康健否。星夕之前一別以還無消息。恒思吾子而不克忘也。嚮吾子語僕曰。論孟字義印行。子既覽之乎。盍一說督舛訛。僕時倥偬聞過。置諸度外。敢不為意。言談更端。遷他事。翌日見四瞻樓主人。懇懇囑僕。而覓其辨折。乃卒贍數十件。以附僕之歸。僕是以不獲徒弭。遂竭鄙悃而論量畢。歷數日後。見九淵堂主人。始看全本。方識前數十件猶有未盡者。比來遭中塾氏東之適貴邑。具寄語。計既得關聽。僕近年沈痾。氣衰神乏。懶秉管。仲春遭災。聖經古史泊自作文。悉算而焚。家裏無費以頓買書籍。僅儲兒子所誦之小學四書而已。故欲考異同是非。以扶正抑邪。然失書史之徵。而乏攸依據。前日過爾不應。吾子之需便固不為意。或以此也。東都濟濟士類。及二公咕囁語僕曰。邇學者糾彼之詭。奚啻數人而已。瞋目譴怒。極口唾罵。摩掇程朱之詞。而比並以厖闕。雖似理之勝。而校諸言語文字。彼自溫厚老成。此却朴拙生硬。其高低負然不容相抗。曷以屈彼徒之喙哉。肆逼僕以不攘蕪穢之罪。僕欲舍置而得哉。熟視彼之書。察彼之為人。其性戇。故其論率僮侗。其見僻。故其說衆齟齬。厥戇也

此書雖言語太長。然語脈尤

知唐虞三代之氣象耶。爲管見之偏。其說亦恁地跛陀矣。厥齟齬也。彼言大學序及文集用復性語。出于莊子。愚按朱說賴孟子之意。唐李翱賴中庸而作復性書。然復性義。決匪倚莊子。又匪朱子獨說也。彼言苟支吾。又曰。致知皆有用之實學。非如後儒從事于事物之末。曩王陽明勗說此意。先儒既辨之。大學或問。文公論致知次第。自明性情至於修身治人以察萬物之理。敢非遺實用而從於末事。又非專務道德之大。敢舍物理之小。彼所議似是而實差。中庸曰。義宜也。就行過後而說。孟子曰。羞惡之心義之端也。就劈初頭說。二說自不相乖。彼以中庸之語。爲有不通處。引孟子爲證。苟未達思孟立言之旨。故其說亦支吾。夫子論子文陳文子集註。用師說而恰好的當。彼却曰。當理無私心。是可以訓誠字。不可以訓仁字。又議真實無妄之謂誠。曰誠字與僞字對。不若言真實無僞。按古人云真僞而爲真妄。廼誠妄是僞也。又汝前言欲以當理無私心訓誠字。較其當否。孰與真實無妄。汝言左右前後成矛盾。又訓信字曰。有便曰有。無便曰無。多以爲多。寡以爲寡。竊取先儒之解直字耳。此解貼直字而當乎。貼信字而當乎。議人則密。自爲則疎。舍其田而芸人之田者歟。彼謂六十四卦。三百八十四爻。一言以蔽之。曰可以無大過矣。此句夫子自謙辭。豈可包括盡易道乎。不如胡氏揭時中二字也。喜毀程朱之書。而屈其爲說。往往竊襲程朱之語。又謂先儒用老佛之語。而自言乃陰依老佛之意。是故諸說無所不糊塗。而一句片言未有平鋪條暢也。細論乃惟日不足。剡藤無餘地。先日就樓主之問目。而撰一大篇。後又撰三篇。編成而先

寄吾子。便應元初之需也。仍致書重記於所當辨之遺漏者若干條以附焉。義理無窮。自不以爲是。吾子看詳。再貺矩誨爲幸。萬惟諒察。八月二十三日季明拜啓。

答高慎夫書

前月幾望之華箋。昨昨重陽自岸氏之處達來。承盡近況。堪慰瞻仰。兩地各無事。人世之樂。莫如無事。承諭慇懃。問拙蹟憫窮厄。足觀故人之情洽。先書匆匆不曲言池魚殃。春二月庚子晝。武陵西北火。午後風疾火烈遽被。煙塵晦冥。家僮離散不知其處。單騎而脫。我騶調良。兒女子附尾。魚貫逃出。是以奕世授受武器什物悉燼。書史數千卷。無隻字存焉。猗嗟我髫齡皓首。宵旰搢搢然所講習之群經。所著述之文章。一夕滅盡矣。生涯之不幸。衰朽之憂鬱。都在于此。其他家資。何足深惜乎哉。適讀誦柳文。有賀王參元失火書。曰將大有爲也。乃始厄困震悸。於是有水火之孽。有群小之慍。勞苦變動而後能光明。古之人皆然。故將弔而更以賀也。玆言雖不經。亦出於常情之表。似有當探也。僕敢非大有爲之材。唯欲受命安塞劣而已。沐我太守之澤。而妻孥弗到凍餒。於僕分願足矣。是後輟涉獵。省繁辭。而守約恬靜養殘軀。然則書籍之焚。亦未無一得也。承諭曰。二十年前。子惠我辨異學之書。至今在書笈中。便見自弱冠其志偉也。續曰。夏首爲有事故。出葛城山詣於洛陽。游於一槐門。視語孟字義。做罔大駭。中心蘊結。遂行鳴瀧村。訊隱者藤井懶齋叟。話及彼事。叟曰。爲後進當正說而退邪誕。此語固可也。月餘而還家鄉。路歷伏見。聊訪

引柳文亦來
曰。柳文亦
之。無一得
也。可謂得
未。思奇
奇。思下
文。思下
懶。思下
之。思下
辨。思下
辨。思下
如。思下
如。思下

中村惕齋翁。又話矣。翁曰。喪心狂惑之所為。詎足勞口舌乎。此語亦可也。足下熟思。懶叟之言。實有遠慮。故逃來函勸僕致其辨。乃釋二十年前之緒。為憂道之深。望故之篤也。僕緣一郡牧之命。不得已而倉卒作主客問答。請陳厥由。郡牧素崇文公。均於文宣王。近瞰渠儂之書出焉。辜負于朱訓。意欲辨之。然未得之於辭。憤悱久矣。僕一日伺候其第。牧君點頭而質疑難。僕逐一答之。以解紛結。牧君欣然曰。願卿簡記救童蒙之惑。僕退後壬癸甲乙而稿成。牧君嘆曰。彼維楨者。朝刪暮輯。彫鏤蓋數十年。逮七十而茲書始出焉。卿立聞一過。以勇往之氣。直吐辭成章。縱橫徜徉。若前後無敵。以約攻多。擣巢覆穴。姦詐何處遁藏乎。足下睦我。故筆牧君之褒詞而告。敢莫為自銜矣。後來在二縣主之館。見全本。而知有未盡者。乃更作撞巢窟。擊蛇笏。適從文凡三篇。遂為一冊。名以適從錄。語曰。君子之於天下也。無適也無莫也。義之與比。夫程朱道義之所在。故所謂適從者。非有所倚也。義之與比之謂也。手膺而寄岡恂翁。為向教僕辨字義之訛也。今具錄而酬足下之囑。淑慝然否。足下須是嚴削定。萬萬為幸。餘事數件乘於別幅。九月十一日某再拜。

適從錄本為三冊。後更加數書。分為二卷。

答楚義叔書

先呈適從錄。寅乞繩墨。由此昨辱手教。日暮歸環堵後。就燈下讀過。來喻曰。彼云聖賢不特言心。今拖孟子良心本心之語而細之。便似非彼言之旨。僕謂不然。彼用特字者。為與古語抵

凡文貴折。此書折。轉少而。數折切。不。好。其。不。處。其。不。於。其。不。路。其。不。體。其。不。

悟潛遁也。其實只嫌言「心」字。故曰。尚書多說「心」說情。非唐虞三代之氣象。乃雖「人心道心」之說。亦拋擲而已矣。可見用「特」字之為遁辭也。來諭曰。引彼截取樂記之語。而此錄與彼書異奈何。僕閱彼書。前言「天理人欲」字出于樂記。而及援證。乃漏入「欲」字。故代他而修整焉。其餘一兩處。尚有轉換「二三」字者。皆為他周匝也。來喻曰。蚍蜉搖樹。夏蟲疑冰之類。咸為設譬。擊蛇笏一篇。雖諷讓之劇。復用古人之言。敢非身親致刻剝也。但責彼譏居敬。而言桀紂之徒。似太過於嚴厲。僕謂不然。古者漢名臣。面諍高祖之戲。戚姬曰。陛下桀紂之君也。唐直臣面諍太宗之營洛宮曰。陛下不如桀紂也。二主淑容而賞其諫。寬仁大度之量。所以為三王以還之明君也。君臣猶然。矧於斥異學乎。奚為所憚於言哉。孟子闢楊墨曰。楊氏為我。是無君也。墨氏兼愛。是無父也。無父無君。是禽獸也。凡紂邪說者。便不得不嚴其辭也。無父無君是禽獸也。其言當如是嚴。而後振末流之弊。筆鋒自不可沮尼。必然之勢也。嘗聞君子不欲加諸人。不忍絕諸物也。僕雖不肖。豈敢喜陵人殄物哉。人不許我默。我於是乎言。欲以明道也。彼維楨者。若果淑人。則慎受而可悔改。所謂善人能受盡言。是也。庸詎有拂戾增愆耶。假令不獲扶醉漢。廻狂瀾。復獲掃塵盆。芟秦蕪。而俾後學視正門路。乃是可也。足下能虛心而熟誦。庶幾他日觀我言之不欺。不備。月日某白。

答楚義叔書

適從錄既成冊。後見此書。乃取中。以附末篇。

來喻曰。頃看書生所寫適從錄。辨道體一段。顏子所謂卓爾。孟子所謂其原。換其原作躍如。不知何是。僕按卓爾為形容字。對此句。則當用得躍如字而可。故後來改爾。來喻曰。程子易傳二言。彼以為採佛家語。高明以為其詞暗同。匪襲彼而取。然而在前經。未見援據。學者深以為嫌。伏祈示教。僕按書曰。辭尚體要。論語曰。禮之用。此乃聖經說體用為左驗。易曰。顯諸仁藏諸用。以四德言。則發見流行處。或自內而外。或自外而內。元顯諸亨。利藏諸貞。通顯為用。復藏為體。通顯中有復藏。復藏中有通顯。故曰。春夏是顯秋冬所藏之仁。秋冬是藏春夏所顯之用。以五常言。則禮顯恭于表者。主于裏之仁也。智藏明于裏者。宜于表之義也。故曰。禮者仁之顯。智者義之藏。率性之道。則顯諸仁。費而隱。則藏諸用。聖言前後合符節如斯。須觀體用一源之妙。中庸曰。莫顯乎微。又曰。夫微之顯。又曰。知微之顯。惟言道無細大。誠無幽明。德無內外。不可以不慎之不可以揜矣。不可以不省焉。顯微相由。為非有間隔也。爰識程子言意俱本於易中庸矣。賴是視之。便此非採彼。而彼却撫此等語也必矣。

跋適從錄

適從錄上下卷。紫芝山清處士之所作也。曩者振衣於南岡之下。歸休二三歲。是時自稱清處士。其後事侯國。則非處士也。然而任武事之備。晦文房之光。躬居官第。心游江湖。所謂祿隱者也。故依舊自稱而已。茲者因貴介諸士之祈。不得固辭。而作為斯篇。聊採厥筆戰。準擬諸師律。主客問答。若應侵兵而防禦之。撞巢窟。若環敵壘而攻拔之。擊蛇笏。若擒巨魁而殲滅之。適從文。乃若戡亂而宣教化也。三書乃若露布而驅餘賊也。距遏之術。可謂無遺策矣。世之儒生。謹彼書之非理。輒尋字逐句。細以襯貼。手段甚低。如註脚然。安得壓倒他底。故斯篇應酬大意。不敢尋字逐句。滔滔說去。不為他凝滯。唯據發正氣。而邪妖自消也。讀者須知此義也。或曰。學問之方。在自反自修而已。彼之差違。匪我之所關。奚為喧然攻之乎。余曰。噫汝言過矣。君子一言以為知。一言以為不知。言不可不慎也。汝務為聖學。而未聞聖法。徒讀古籍。而未諳古言。孟子曰。能言距楊墨者。聖人之徒也。朱子說云。邪說害正。人人得而攻之。不必聖賢。如春秋之法。亂臣賊子人人得而誅之。不必士師也。聖人救世立法之意。其切如此。若以此意推之。則不能攻討。而又唱為不必攻討之說者。其為邪說之徒。亂賊之黨可知矣。今緣汝說。乃孟辨朱說。咸為非乎。憑氏陳氏辨陸王。固非乎。以是為非。乃清處士斥雜植。亦非也。以是為是。乃辨正者。聖賢之徒。匪詖邪之黨也。

元祿乙亥九月晦日

夕佳亭一叟跋

元祿十丁丑年三月吉祥日

武陽芝神明町

書肆

和泉屋市兵衛版行

適從錄下卷終

辨大學非孔氏之遺書辨

大學非孔氏之遺書辨

按凡文體稱辨者。直學其事而辨其失也。今已曰大學非孔氏之

遺書。則其所自好。何更須辨。此欲急著非字。而不知與辨字意相矛盾。先儒亦有犯此誤者。

欲為孔孟之學者。不可以不讀孔孟之書。欲讀孔孟之書者。不可以不識孔孟之血脉。讀孔孟之

書。不識孔孟之血脉者。猶航之無柁。夜行之無燭。瞽者之失杖。而莫識其所嚮方也。其可乎。

程子讀論孟之法。朱子所以載卷端及近思錄。至備矣。今又何用更創此等說以為贅也。况其意欲

獨崇論孟而擠大學。以為之張本乎。

苟讀孔孟之書而識孔孟之血脉。天下何書不可讀。何理不可辨。試以異端之言。雜諸聖人之書中。

以聖人之言。置諸異端之書中。其視之如視黑白。分之如辨菽麥。隨手而取。入耳則知。不爽毫

釐。不差秒忽。夫然後謂之能知孔孟之血脉焉。

此其自任之說也。然若止咀嚼意象名義之類例。而不覈是非真妄之實然。則所謂血脉亦終無寸之尺。

無星之秤耳。余嘗讀其所著送浮屠道香文。率推儒混佛。務為不忤。而其卒以雖儒者不可犯貪

嗔癡三戒焉。而至於大學。乃視以為異端之書。則其顛倒白黑。渾吞菽麥。恐不特毫釐秒忽之爽

差也。

將何以能得知孔孟之血脈而不惑乎。夫孔子之聖。賢於堯舜遠甚。而自有生民以來。未有比其盛者矣。而孟子願學孔子而得其宗者也。

不知大學而徒稱斯言。即買櫝還珠之甚者。

若使孔孟復生於今世。其所說所行。不可過語孟二書。則棄語孟二書而其何以能之。

程朱平生所說所行。棄論孟何以求之。即大學之血脈。而所謂聖人復起不易吾言者。於是乎驗。

誠以論語一書。其詞平正。其理深穩。增一字則有剩。減一字則不足。天下之言於是乎極矣。天下之理於是乎盡矣。實宇宙第一書也。

此亦程朱雅言盡矣。但未聞大學之道。

則其所為言極理盡者。恐亦未易言也。

孟子之書。亦羽翼論語。而其詞明白。其理純粹。非若禮記諸篇出於秦火炕燔之餘。而成於漢儒附

會之手。故次論語而其言無詭者。其唯孟子歟。

禮記固非先秦全經。而其間實有孔門真書。則始不以此信疑焉。如鄉使孟子諸篇紛在禮記之中。又

何害其為明白純粹。而槩可以秦火漢儒而不省乎。

學者苟取此二書。沉潛反覆。優游饜飫。口之而不絕。手之而不釋。立則見其參於前。在與則見

其倚於衡。如承其馨歎。如視其肺肝。不知手之舞之足之蹈之。夫然後能得知孔孟之血脈。而不

為衆言淆亂之所惑也。

讀書之法。朱子至矣盡矣。即其平日所經歷自得者。是以能剖衆言之淆亂。以發孔曾思孟相傳之血

脈。豈後學所得遺議效譽哉。

大學一書。本在戴記之中。不詳誤人姓名。蓋齊魯諸儒。熟詩書二經。而未知孔孟之血脈者所誤

也。

程子於孔曾。讀其書得其心。何必待問誤人姓名在否而後決。且設令其實非聖學之正脈。則使

馬遷班固之徒。標其名於志傳之中。亦何益于證斷也。如孝經一書。乃秦漢以來相傳以為孔子所

傳。曾子所授。未嘗有致疑於其間者。而至於朱子著刊誤辨其勸說亂道之迹。而後天下後世因

之惑。其他不可一二數也。蓋聖賢得道之全而體諸心。其眼目權衡。自然精明。決非末學淺

智。生眼新意。所能觀視強倣矣。則今所為辨說。踈考謬論。至如下文。又何足怪。故孟子曰。

前聖後聖其揆一也。此聖賢相傳之要訣也。子貢曰。得其門者或寡矣。夫子之云不亦宜乎。此後世

妄議聖經者之斷案也。

其齊家傳以下。言孝弟慈。論絜矩之道者。吾有取焉。固能得詩書之意者也。

是亦特以其親愛敦化之意。稍與資質所熟氣味相會。故所取如此耳。其實本不識大學血脈。豈能

真知不出家而成教於國。詠歎反復深切者。以及夫絜矩之道之要哉。若知之則大學一篇相貫只一

事。何至截斷前後。舍彼取此也。

至乎其列八條目。及其所說學問之法。則不能無疑。

有疑于此。則其所謂血脉。非真血脉矣。

大學曰。古之欲明明德於天下者。先治其國。欲治其國者。先齊其家。欲齊其家者。先脩其身。

欲脩其身者。先正其心。欲正其心者。先誠其意。欲誠其意者。先致其知。致知在格物。程子

以此為古人為學次第。然而愚謂。孔孟言為學之條目者固多。未聞以此八事相列。若此其密焉。

故程子曰。於今可見者。獨賴此篇之存。而論孟次之。而朱子又謂。此篇則因小學之成功。以著大

學之明法。外有以極其規模之大。而內有以盡其節目之詳者也。其餘則或問盡矣。

論曰。子以四教。文行忠信。明夫子教人之條目。在此四者而無他法也。

格物致知。所以學文而究其理也。誠意正心修身所以力行而踐其實也。誠敬持守以培其根。所以

主忠信而為之本也。此外果無他法。論語特摭其要。而大學則極其詳密者。

又曰。知者不惑。仁者不憂。勇者不懼。明此三者天下之達道。而進學之叙無出於此者也。道當作

格物致知。則明足以燭理。故不惑。誠意正心修身。則理足以勝私。故不憂。所以必知之必仁

之。非至於至善之域而不遷則弗措。乃勇者不懼之事也。外之而說知仁勇。此之謂不知進學

之叙矣。

曾子曰。夫子之道忠恕而已矣。明忠恕終身可以行之。而夫子之道莫過於此者也。

大學之道忠恕而已矣。此聖學相貫之尤著者。而或問說盡矣。而略不考察。其疎于孔朱之書。學術

之要如此。

中庸曰。為政在人。取人以身。脩身以道。脩道以仁。此亦言為學次第如此。何其簡而易從耶。

為政取人。則齊家治國平天下之事。而亦以脩身為本。正心以上。則所以修身而盡得道體仁之

方也。故中庸本章已首言之。而至於章終。遂以明善誠身二端究其歸。而朱子又於大學結文。援

以相發。使學者知道學源流之所在矣。何其要且盡也。由此觀之。右所舉四說。言雖各異。要之

亦惟同一轍同一心。而其首尾齊整。條理具備。未嘗有如大學者。則程子之言何不信哉。且夫八目

雖詳。其要又惟不過乎明德新民二端也。是亦豈不簡而易從哉。而若但厭煩苦密。直擺除條目。

從初只以守簡而易從者為事。則其方似捷。而實則疎率苟且。正猶朱子譏陸象山易簡工夫耳。是

語類陸子部若能實識得。則不外乎二端之實。而八者之功。無一毫之罅。又何煩密之累。大抵有志

于聖學。而不知其全者。隨其所見。各自立宗旨。未必無一意思可觀。而其要必有弊。卒未

可與共適道。而必趨于平實簡易之便者。其通病也。夫聖人之道。固平實。聖人之教。固簡易。

然其所為道為教之實。精粗本末。等級脈絡。皆出于自然之理。而非吾所能增減取舍也。是以不

離日用至近之間。而規模之全不能外矣。固有一定可據之準。而條理之細不容遺焉。規模極全。

而無玄妙曠蕩之妄。條理盡細。而無多端委曲之擾。是以其用力也。亦不數不躡。不混不雜。循循孳孳。曲盡積熟。而後夫平實簡易之功。有不期而然者。而所謂道所謂教者。方為不違。若不然而。但見平實簡易之為美。而悅其易從焉。則先已有此意種。不知不覺胚胎結構于方寸之間。是以鍊磨思想。益極其工。而意味識趣。愈見其熟。遂自成就一規模格局。而凡橫視縱觀。淺深鉅細。觸處到着。皆無往而非夫平實簡易之意也。則其於道之本然全體。必不免安排僞侷。執主偏壓之弊。而其究也。乃鹵莽迂踈。恣睢誕謾。無所不至而止矣。可不慎哉。矧今所舉四條。固已有四說之異。苟不叩其關鍵以會乎歸趣。則未暇問八目如何。胸中已自四分五裂。莫所適從。尚何簡易之能從。

大學以為人之進道。若登九層之臺。歷一堦又歷一堦。而後進至于臺上耶。此惟見經文欲先而后字相疊。上下推說。而輒為此說。未嘗識到其統叙之要旨耳。以此妄議聖經。多見其不知量也。

夫道不在于他。即人之道也。以人脩人之道。何遠之有。試看大學八目。有一事遠人以為道者乎。

孔子曰。仁遠乎哉。我欲仁斯仁至矣。孟子曰。道在邇而求諸遠。皆言道之甚近也。豈若登九層之臺乎。

所引孔孟之言。特指示仁道之端的。以覺妄意于高遠難知之間者耳。若其進脩實功。則必不可

不須等級積累之漸。以極我欲之至。而盡在邇之全。大學工夫。即其事也。而今以道之不遠

較學之有序。殊為不倫。况八目未嘗登九層之臺乎。

宋人嘗譏韓子。以其引大學不及於格物致知。亦不深考耳。

以不深考譏朱子。雖朱門奴婢。亦將掩口而笑。其亦不深考之甚。

孟子曰。人有恒言。皆言天下國家。天下之本在國。國之本在家。家之本在身。非但不及於格物

致知。纔止於家之本在身。而不及於正心誠意。則又譏孟子以不知大學。可乎。故知八條之目。

非孔孟之意明矣。

黃東發既有是說。此蓋勸說之也。夫經文既歷說八目而結之曰。自天子以至於庶人。壹是皆以脩身為本。章句曰。正心以上。所以脩身。齊家以下。則舉此而錯之耳。是則條目雖八。而其歸宿則在於脩身。孟子既得其傳。故就恒言推其序。亦遂本諸身。而至於君子之守。脩其身而天下平。則并舉其實功。一言以盡之。豈不昭合一揆之著乎。不但是已。論語告子路之要。中庸列九經之首。又皆無不然。而詳略相率。彼此交發。而各有所當矣。向使韓子只推而至于身乃已。則何傷之有。既已歷舉條目。而至首目大端。無故頓遺之。是安得為不誤而免於不精不詳之譏乎。是等章句集註。貫通明白。無一毫可疑者。後之讀者。苟能少細私意。信聖賢必不

欺子。以深察熟玩焉。則凡有目者有心者。皆可得分曉領會。而亦不直白黑菽麥之易別而已。余頃戲語學者曰。爲此辨者亦不情。夫大學固朱子所註也。論孟亦其所註也。中庸亦其所註也。而合爲四書。以貽天下後世。以爲聖人之道脈在此者。亦朱子也。假使朱子大龜人。而恐不其參差矛盾。彼此不通至此。因大笑而止。大抵近世學者。讀朱子之書。固皆茫然泛然。不能至其門牆。與大全蒙引之類相爲伯仲。而間又爲明儒新說多議所搖。是以覈實未到。議論先崇。自視超邁。自信太過。動以己見爲權度。曾不知自家識度本色。仍舊不能窺其門牆也。以若不正不明之心。讀若不通不信之書。挾主客抑揚之私。以執想像億度之見。幾何其不踈脫紕繆至于此。

大學曰。脩身在正其心者。身有所忿懣。則不得其正。有所恐懼。則不得其正。有所好樂。則不得其正。有所憂患。則不得其正。夫存心之道。莫要於無所忿懣恐懼好樂憂患者耶。

此以下數段。皆未曾聞吾儒正心之學。而誤以爲絕此四者之用。於傳者語脈之精密。與章句或問之詳明。則惘然不省。不存不正之甚。孰加之。然則存心之道。雖外此心之用以求之不可得。而既指示其所失之端。則其所以無失之方。亦不待乎他求而在焉。此最緊要處。其操存持守之要歟。書曰。以禮制心。孟子曰。君子以仁存心。以禮存心。又曰。居仁由義。大人之事備矣。

今按所引三條。論其要歸。則固無異旨。而其立言命意。則各有所主。不可混也。書所謂以禮制心。是則正心之事也。禮則本心之則。而有恭肅之意。規矩之守。故持守之道。以此爲準。而

心能聽其制焉。則所察乎喜怒哀懼之際者。至精至密。慢易邪僻之心。無由而入。而四者各得其正矣。文言敬以直內是已。故章句即以此解正心。其義亦精矣。若夫孟子以仁禮存心。則本言君子接物不過于愛敬。故常以仁禮存於心不忘也。與存其心養其性。及以禮制心。文義元不同。以一章大意求之。可見不可與大學正心事相牽論也。况既曰存心云。則仁禮之道。不離乎此而得。始不須別著仁禮以存之。而與制字之意自不同。則於文理學術。亦無所當矣。至於居仁由義。則又士尙志之大體實事。非特主存心之功而語也。大學八目。正欲盡居之由之道。而大人之事實備矣。

大學乃不以此爲要。而徒欲無忿懣恐懼好樂憂患何哉。

或問已悉矣。此等妄論。更無可辨也。大率聖賢之說。因時制辭。對證按方。故設言各不同。而其血脉則一。爲此辨者。乃不此之識。纔見其所說不類。則便不能領其要。至於上文所引三說。則又却牽強媿合。以爲一意。其爽錯如此。而尙欲議正心。何不自思之甚。

夫此四者。心之用也。凡人有斯形。則有斯心。有斯心。則不能無忿懣恐懼好樂憂患焉。苟以仁存心。以禮存心。則此四者。即仁禮之著。而天下之達道也。何惡之有。大學乃不此之識焉。而徒欲無忿懣恐懼好樂憂患焉。此即不識孔孟之血脉故也。

心之用不能無焉。及天下之達道者。乃剽掠章句或問之語。而不自知其爲矛盾也可笑。仁禮存心

之誤。已辨于上。而其血脉之妄可見矣。

又曰。心不在焉。視而不見。聽而不聞。食而不知其味。可謂害道尤太甚矣。

然則人之於道。必昏聩迷罔。如夢如醒。漫不覺飯羹肉菹甘酸生熟之別之極。而後爲得也。吾不

意孔孟之血脉。使人喪神魂錯常度。乃至于此也。

非惟不識孔孟之血脉。蓋不信孔子。而欲自以己之學號於世者也。語曰。子在齊聞韶。三月不

知肉味。又曰。發憤忘食。又曰。顏淵死。子哭之慟。從者曰。子慟矣。曰。有慟乎。非夫人之

爲慟而誰爲。若以大學觀之。則可謂孔子亦不免放心也。

孔子之事。精誠純一之至。聖人所以爲聖人。蓋在此。而有纖毫雜妄間于其中者。所不能及也。

如大學所指。則彼昏雜顛錯。一心無主。萬事無綱。而不覺其身體所在之病證。豈可與之同年

而語哉。且如曰不知手之舞之足之蹈之。不知老之將至。亦豈可謂與既醉舍坐。不知其秩。

日月逝矣。是誰之愆者無異旨邪。忘字有以遺失而言者。如一朝之怒忘其身而及其親是也。有

以不經心而言者。如發憤忘食樂以忘憂。及好善而忘勢之類是也。夫子哭顏淵。哀傷之至。不

自知其慟。與孟子聞樂正子將爲政。喜而不寐。亦皆天理人情之極。尤足以見其心之至正矣。

是皆適足與此章相發。而非所以爲病也。若只如此。隨語生解。不顧其本意。則妨碍交塞。何

往不然。且言祇今人心不在焉之時。有能視而見。聽而聞。食而知其味者邪。若然凡聖賢千言萬

語。教人求放心要存心者。皆贅無用之功。而誑天下後世也。不亦左乎。

夫撰大學者。非踈漏而然。亦非有意義相通。其學本不見仁義之良。而欲剛制其心。蓋告子之流

耳。

曰明明德。曰顧諟天之明命。曰好入之所惡。惡入之所好。是謂佛入之性。曰孝弟慈成。教於國。

曰君子有絮矩之道。不見仁義之良而云然乎。以剛制解正字。古今訓釋未見其義也。告子不能

知言。則與格物致知者相反。不能持志集義。則與誠意正心脩身者相反。乃薰蕕冰炭之異。而

所言勿求云者。偏拗冥執。正是心不得其正之實病也。非有意義相通。及前欲自以己之學號於

其世等語。似不與大學相應。或後學以此自稱。偶有着題者耳。

又曰。正心二字。又見於孟子。然尙有當議之者。孟子曰。我亦欲正人心息邪說。距詖行放淫辭。

以承三聖者。所謂正人心者。謂禁民之非心。而俾之無邪說暴行之甚。與大學之意自異矣。

已曰自異。則彼此各有說而不相碍。經傳如此者甚夥。然若吾心爲邪說私見所蔽。不能自覺。則

以此自反。亦自正心分內。何不可之有。吾未聞枉己而能正人者。孟子固言之矣。

若孟子之意。正心二字。當施之於民。而不可施之於己。故平生誨人。或曰存心。或曰養心。而

未嘗言正心。其意可見焉已。存心云者。欲其不亡也。養心云者。欲其長也。而大學以爲人之

制心。當若造器物者。其形方正端直。一定不可變焉。此豈識心者乎哉。

心之持守一而已矣。而其立言不同。則其意各有所主。不可偏廢也。存心云者。欲其不亡也。養心云者。欲其不害也。正心云者。欲其不偏也。是所以使精明滋長。莫邪曲固滯之累者。其功互相根。固無彼此先後之可言。而存也養也。專稱也。在於大學。則爲脩身之本。必曰正心。然後見其所以爲一身應接之主宰準則。而脈絡接續。工夫相根之實耳。制心若造器物之說。今反覆考之。於大學無所見。且人之爲心。本以欲爲一身之主。而泛應事物之變。若使其若器物一定不可變。則便是不正之甚。與有所喜怒哀懼者同一病。爲大學之道者。所方當早察力化。以得其本然之正者也。正字且不識。尙何識心之議。其臆度妄說。大抵亦王陽明對竹試格物之比耳。

大學曰。大學之道。在明明德。按明德之名。屢見於三代之書。然三代之書。本記聖人之所行。或以此美聖人之德。或曰明德。或曰峻德。或曰昭德。其意一也。故雖數數見於典謨誓誥之間。然非學者之所能當。故至於孔孟。每曰仁。曰義。曰禮。而未嘗有一言及於明德者矣。作大學者。未知其意在。見詩書多有明德之言。而漫述之耳。豈非不知孔孟之意乎。

是亦全不知本領之言。此義也。愚別於明德說述之。今不復贅於此。且夫仁也義也禮也。一明德也。不知明德而謂知此三者。豈真知孔孟者哉。

又曰。爲人君止於仁。夫孔孟之學。以仁爲宗。而凡學者莫不從事於此。今大學獨屬之於人君。而無與學者道之者。是亦與孔孟之指異矣。

仁固全德。聖學之所宗也。而人君一身既曰爲億兆萬物之主。則其好生之德。不忍之心。尤以爲其當然之極而不容已。惟文王爲能盡之。而傳者因指以示君德之至善耳。其餘四者亦然。至論其要歸。則仁敬孝慈信。亦只一仁。末章惟仁人放流之。唯仁者能愛惡人者即是。而大學工夫。則所以求之也。况孔子所謂君子體仁。足以長人。孟子所謂親親而仁民。發政施仁。行仁政於天下。人君好仁無敵於天下。凡此類亦皆無非主君德而言也。何可疑之有。此等癡論。自以爲是。而欲入人之信。亦可異矣。

又曰。欲正其心者。先誠其意。夫意一也。論語說毋。大學說誠。一正一反。必不可無是非。而中庸曰誠身。而不曰誠意。則誠字當施之於身。而不可施之於意矣。

大凡讀書。不究同異之所然。惟以類湊闢。彼此兩累。朱子平生訓戒尤詳矣。夫意則心之所發。好善惡惡。而心裏了了者便是。而有潛行親貼。不言而獨知之味。是以前未嘗不出乎正。而幾微之間。輒雜乎計較委曲之私而至自欺也。論語說毋乃以私意言。而大學原乎其所發之良而指之者。一正一反。各有所主。而意字本義。以大學爲正也。若必皆以爲不善而宜無之。則言不盡意。以意逆志。先意承志等語。皆不可解。而今此辨中。亦動稱孔孟之意。此皆何意邪。且如母固之固。謂執滯不通。而擇善固執之固。乃堅守不搖之意。是亦豈一正一反必有是非邪。其他

是類不可殫舉也。中庸誠身者實理。皆體於己而不忘。以成功言也。大學誠意。則審於心之所發而不自欺。以用力言也。專言誠身。舉其全也。誠意則在於致知正心之間。接上基下。其功方有所主。而自脩之首也。故章句於終篇便合結之曰。第六章誠身之本。其義亦審矣。

又曰。楚書曰。楚國無以為寶。夫楚南蠻缺舌之俗。中國之所不齒。而陳良楚之產。乃不學於其國而北學周公仲尼之道於中國。今大學不引文武周公之訓。而遠用楚人之言。最不可解焉。

此無以他論矣。陳良已產於南蠻缺舌之俗也。而至於其善變。則孟子便以豪傑之士。北方之學者。未之能或之先許之。楚書固亦出於南蠻缺舌之國也。而其言合聖人之旨。則大學援以明不外本內

末之意。而其義尤為深切。是則大學孟子用心大公無累。尤後學所宜欽仰法式焉。且傳十章引詩書之言。以發明要義者。前後比比。即莫非文武周公之訓矣。而讀者漫不能省。至此偶引楚書

乃其言褊狹遽到此。陋哉。况楚之為國。自二南化行。而至春秋戰國之際。賢能忠義。格論正義。不愧乎齊魯之士者。不為尠矣。孟子南蠻缺舌之言。特以許行誣先王倡邪說。甚醜詆之之辭。

猶後世沐猴操觚之比云爾。若使當時許行之學。素不悖先王之道。則不惟不從而招之。成美寔容。其亦陳良而已。豈為纔為楚國之人之言。則始不論其善惡是否。槩可坐羅織網打之法。目以

南蠻缺舌而不取邪。尹氏所謂以不正之心度聖賢。於是乎信矣。又曰。生財有大道。夫財者生民之所資以生者。固不可不為之立禁設厲。量入為出。預講度支

之方。然均無貧。和無寡。安無傾。君子詎求生財之道乎。

大學生財之道。則所以均無貧。和無寡。安無傾也。若不務此。徒欲求其平均安和。則所謂立

禁量入。預講度支之方者。亦特掩耳盜鈴耳。其不頭會箕斂。爭民施奪。而至于貧寡傾覆之禍

者鮮矣。此尤此章大義所係。即絜矩之道。而章句或問。叩竭詳著。其為天下後世慮。至深遠矣。

後之讀者。未能領其意。則且置而附之不信亦可。乃不慮不圖。輕議草說如是。可謂妄甚矣。

况禮義信三者。尚不謂之大道。其於生財有大道何哉。非孔氏之徒之言可知矣。

平天下一章。反復詳究。無非發明絜矩之道。而其間以大道稱者二焉。一為君子居位。脩己治人

之大要。而一則承上文。又為生財而發。其意至深。固非孔氏之徒。所不能言也。但所謂大道。

亦猶言大方法云爾。若當綱紀維持各提其要。則禮義信又何不謂之大道。特孔孟之言。上下語意

自不須稱大道耳。

又曰。此謂國不以利為利。以義為利也。是亦以利心言之者也。孟子曰。王何必曰利。亦有仁

義而已矣。夫君子之行義也。惟義是尚。而不知利之為利也。苟有以義為利之心焉。則其卒也莫

不捨義而取利也。

夫傳文引孟獻子之言。而結之曰。此謂國不以利為利。以義為利也。則其不以利心言明矣。其

唯不以利心言。是以前以義為利也。乃其所以自安而不知利之為利也。正猶上文楚國無以為

或謂。辨者之意。言夫子以禮義信三者。均無貧。和無寡。安無傾。致者。同。然。今。大。學。尚。不。以。三。者。為。平。天。下。之。大。道。而。但。於。生。財。有。大。道。則。非。孔。明。矣。今。辨。之。亦。然。則。其。妄。本。文。

既曰君道生財則不道者凡德者本末之實皆在區區二數或謂邪者據禮運則亦失之禮說也主禮而義也信也仁也讓也皆其功效之推耳况其推上文語二大道者已信乎

寶。惟善以為寶之意也。豈可謂苟以善為寶。則是亦以好寶之心言之。而其卒也莫不捨善而取寶也乎。至于下文。更言由小人務財用者。以利為利之害。而至雖有善者亦無如之何矣。又復結之以前說。其丁寧警戒。反復深切。凜然乎言意之表。而以義為利之大旨益著。孟子已承大學之傳。故其告梁王。首以此說。曰王何必曰利。亦有仁義而已矣。而下文推至上下交征利而國危之害。遂曰未有仁而遺其親者。未有義而後其君者也。是即理之自然。未嘗外乎義而言。則何必曰利之本旨自若也。豈亦可為孟子教人君必驗其不遺親後君之為利。而後為仁義耶。是大學孟子所以與董子之言相發。實為儒學之大端。而拔本塞源之云。豈直也哉。蓋戰國之際。陷溺之久。人皆悅利。而自王公大人。以至於庶人。惟利是欲問。故雖被服儒者。每憂其術之不售。必以利陷人。所謂生財有大道。又曰。以義為利。蓋用此術也。大學非孔氏之遺書益明矣。

大學生財之道。曰德本也。財末也。外本內末。爭民施奪。曰財散則民聚。曰與其有聚斂之臣。寧有盜臣。曰長國家而務財用者。菑害並至。恐皆不惟利是欲問者之所喜聞也。戰國儒生處士。固雖不足言。而其揣摩逢迎之術。則盡巧。政使此書出于其手。然不應其方枘圓鑿。迂濶倒逆。如此之甚。若然真拙謀下策。其術之不售也益甚。而與操瑟立齊王之門者何異。可笑。

大凡愚所著十辨者。雖不悉繫乎血脉之合否。然其一二命意措詞之差。本皆因不識血脉。然則今亦

不得不為之辨也。

其惟自不識血脉。是以十辨之說。悖妄無理至此。不知費幾年工思。力排大學。而其所著止如斯。與其妄意聖門之學。以取詬于天下後世。孰若移此工力歲月。以道遙于詞藻翰墨之場。尚為不負百年風月身好秀才而死哉。

世衰道微。邪說暴行又作。孟子既言之。今觀柱下書遠遊篇。邪說之行。固已尚矣。况乎戰國之際。去聖既遠。經殘言闕。世之學士大夫。自以為至寶。而不知實為邪說之所誤也。今不全為左衽之俗者。尚幸由孔孟之遺教存也。

大學之教廢。而邪說之害起。斯文之存否盛衰。全繫乎此書之明晦。如朱子序文所叙。而後學或罔其方。涵育于遺風餘澤之中。而自叛。務忘脩己治人之學。以為得一樣鄒魯之真傳至寶。而獨行于正心誠意之外焉。則其亦邪說之尤者。而為左衽之倡。不待他求矣。

漢儒擇之不精。識之不徹。貪多務得。不知其害道之甚至于此。

漢儒未為聞道。而其輯禮記。固純駁混雜。然在當時秦火殘缺之餘。惟恐蒐之不衆。傳之或亡。則搜索蘊崇。未暇精擇而甄別焉。是亦時勢之必然。比後世徒決乎胸臆耳目之所及。而無忌憚者。尚為存古人傳疑之風。而若具眼者。能沙汰去取之。則先聖賢遺言微辭。禮制事實。賴而存者。不一而足。其功亦大矣。况大學中庸乎。其所自以為道者。已非聖人之道。則大學何不為己害。

而其所議乎漢儒者。恐不止同浴而譏裸裎而已。

大學本在禮記。則為一章書。而不詳出於誰人之手。至於朱考亭氏。始分為經一章傳十章。經以為夫子之言。傳以為曾子之意而門人記之。蓋出於其意之所好尚焉。而非有所考證而言。後學不識。真以為孔子之言而曾子傳之。可謂害道之尤者也。

朱子平生闕疑傳疑。雖二字之微。亦不敢苟焉。而至於大學。則斷然不疑。如或問所云。則必有故矣。豈若後世家集紀錄。必標其籤題。記其姓名。如經籍志所載而後可證乎。以好尚論人。

施于棲逸風流之徒。以山水茶畫自賞者可也。豈所擬于道學之傳乎哉。若惟以素心所嚮云爾。

則朱子於大學。亦猶孟子願學孔子。豈得為阿其所好邪。呼朱子曰朱考亭氏。曰宋儒。皆外之之辭。便出乎意中安排。而其心術之微。亦隱然于言表。鄙矣哉。大學之出於禮記。而朱子分以為孔曾經傳。事歷昭然。後學孰不知之。惟誠信心服。無容疑者耳。

愚之至無似。何敢望考亭。德行之勤也。學問之博也。文章之富也。其懸絕不翅萬分之一。其不可跂及。固不待言之矣。

此尚為贅言。抑後學於朱子。日夜鑽仰。猶恐不足窺其藩籬也。況乎以懸絕不逮之資。無稽不師。自鑿門戶。欲侮棄聖經。凌駕千歲。而莫忌憚。固雖無傷於日月之明。而其自絕而背馳。豈特萬一之不可跂及哉。

然竊自思。於識孔孟之血脉。則不敢自讓焉。

其嘗送浮屠也。自稱其好學。雖聖人亦不敢讓焉。至是其識孔孟之血脉。亦復不敢讓于朱子。則果何代無聖人。上文云云。特盛德之謙辭耳。

於是不敢自揣。漫述孔孟之血脉。以附之兒曹。實恐孔孟之旨。不大明于後世也。按此及上文不敢二字。皆當作敢不。字法謬也。

大學之書顯于世。而後孔孟之旨。坦如大路。勿過憂焉。

孟子曰。予豈好辯哉。予不得已也。憂道之君子其諒諸。

惟當移其不得已之辨。以痛自辨焉。則庶乎求艾之功。尙或收之桑榆耳。夫邪說害正。如楊墨老佛者。固其渠魁。而經孟子以來至宋。數君子相繼攘擯。或息或衰。而歲月因循。其尙窟穴盤據者。雖未即就消滅。然邪正真妄。界辨甚明。無有能以彼淆此者。其擿埴冥行。放蕩不反者。率不過乎流俗之愚而已。唯其間儒名儒服。以道自任。如荀卿楊雄之徒。以至近世陸象山。楊慈湖。吳草廬。程篁墩。王陽明。王龍溪。羅近溪之類者。雖未敢顯然豎幟倒戈。與吾聖人之道為寇敵。然其離正立異。舍規趨徑。陽假陰誘。以亂大道而誤後學。其害既不在四者之下。而至於似而非大亂真。則又已甚焉。是亦豈不聖門之榛蕪壅塞。而憂道之君子。所必關而不容也哉。苟也楊也。大本已差。如象山慈湖。亦幸生乎當時。而朱子所以往復辨明。踈謬蔽匿之跡洞然也。若夫不幸出于

朱子之後。不為蕩滌一掃。固為可憾。而所以衛正闢邪。脩己以教人。規矩準繩。儼乎具在。垂示不朽。是以豪傑之士。能沿流溯源。聲罪致討。而不雜者。間有其人。而更千歲而萬世。雖詭言恠論。變樣換體。競起無端。然大學之道。未墜于地。人心之明。本得乎天。苟考其說而驗。據其理以訂。豈又遠遁其情乎哉。

愚向讀此辨。以為此等本無足言。因舍而不辨。已而又思初學之士。心無素定。其可西可東。為是為非。惟倚于人。而新奇可喜。簡省易趨。既為先入所蔽。則又非一朝一夕之可解焉。遂條折辨裁如右。以予學者。其他猶有可辨者。然朱子所謂於此有差則無所不差者。一言足以概之。則其是非得失。不問可知矣。己巳之歲十二月。淺見安正識。

辨大學非孔氏之遺書辨畢

辨伊藤仁齋送浮屠道香師序

送浮屠道香師序

此文蓋倣韓退之送浮屠文暢師序而作。然其立言命意。悖戾淺陋。固非儒者之言也。夫韓子未為實知道者。而其衛正排邪。自以為己任。雖躬遭竄謫。屢瀕九死。而不以為悔。如佛骨表。原道諸篇。歷歷可觀。而其送文暢。詞如溫藉含薑。而其意之嚴。凜不可犯。今仁齋之送道香也。始終本末未嘗少有闢正之旨。而動似涉含糊調停。以取悅於彼之意。使韓子聞之。則亦失所望必矣。

余少時甚好學。忘寢食廢百事。唯學之耽。不為名進。不為利務。立則見其參于前。居則見其進于席。凡至于飲食談笑。出入應接。野遊郊行。望山瞰水。暨聆里巷歌謠。觀市上戲場。觸機隨事。舉皆靡非吾進學之地矣。其然。豈其然乎。

自以為吾性愚魯。百不足稱。然於好學一事。雖聖人亦不敢讓焉。其自信之篤也如此。夫孔門三千子。獨以顏子為好學。而又嘗曰十室之邑必有忠信如丘者焉。不如丘之好學也。則好學之至難可知。况自稱自許。至有雖聖人亦不敢讓之云。豈學孔子者之所宜言乎。

〔一本〕夫孔門三千子。獨以顏子為好學。而他人不與焉。又嘗曰。十室之邑。必有忠信如丘者焉。不如丘之好學也。則好學之至難可知矣。仁齋所好果何學耶。而雖聖人亦不敢讓之云。殊非學孔子者之所宜言也。

夫愛類於己者。而惡異於己者。人之同情也。無擇於親疎遠邇。苟聞好學而勤。勤而有成。則注視傾想。欽仰嗟歎。若聽空谷之足音。若在遐荒而逢故人。忻忻然有不勝其悅者也。雖浮屠醫方。異端小術士。有嗜學務業。嶄然特起於衆者。心竊慕焉。將以麾之。奚敢以異視。既愛類于己者如此。其惡異於己者。果何在邪。

〔二本〕孔子曰。惟仁者能好人。能惡人。若徒知仁之無不愛。而昧於義之裁制。則但知好惡同情之常態。而不能察其可好可惡之實矣。夫仁齋儒也。道香佛也。己為儒而好儒之學。則彼為佛而為佛之徒者。其不異于己。而可惡者乎。今已不能先明辨邪正是非之大端。而特以其勤苦不厭。為類於己。稱悅忻慕。至如下文。謂之不佞于佛。吾不信矣。

釋道香師博學不厭。遍讀大藏經。譚玄理津津如也。又深嚮吾聖人之道。自詩書語孟。而下至於閩洛諸君子之書。靡不涉獵探討講磨切劘。以究源委之所自。豈向所謂嗜學務業。嶄然特起於衆者。夫非斯人乎。夫非斯人乎。

夫深嚮聖人之道。而究語孟閩洛之源委。此何等見識。何等地位。而問其人則釋門道香師也。問

其所得。則讀大藏經譚玄理津津如也。是安不為天下後世獻笑之資。而虛美妄舉。佞佛到此。是豈儒者之所為哉。

〔一本〕孔孟程朱之書。廣大精深。豈讀大藏經者所能究乎。若能實究之。則何至於斷髮唱偈。以陷于緇林之族。恬然不知自恥乎。且夫天下之廣。嗜學務業者。恐或有之。為吾儒之道者。何苦於浮屠邪說之輩。再三歎美。以犯赧赧然之譏耶。

然近覺宋儒之說。與孔孟之道有差。聞予講古學。而遠來自豐州。質以所疑。予為剖別其紕繆。以告之。師一聞之。便釋然矣。

讀而至此。不覺失笑。幾不能揮毫矣。因謂世之儒者。徒咀嚼乎宋儒之語。而未廣涉乎緇林之書。所以不知宋儒之學本自禪來。

朱子嘗言。佛學之與吾儒。雖有略相似處。然正所謂貌同心異。似是而非者。不可不審。明道先生所謂句句同。事事合。然而不同者。真是有味。非是見得親切。如何敢如此判斷邪。此言學者所宜深察而明辨。而近時儒者。眼力實卑。氣魄實小。不能見道體本然之全。而察義理精微之實。是以凡吾儒所以語道要者。才與異端相類。則指摘避忌。不敢以自誦于口。不亦錯乎。抑道香以己為釋流。而譏宋儒之出於禪。亦可謂不見其睫之甚矣。或渠慍朱子痛辯佛學之非。無逃其情。欲假仁齋以壓之。亦未可知。

惟我能識吾子辯宋儒之繆。實出於不得已。而語之詳。擇之精。指斥疵病。抉剔瑕類。昭昭然。晰晰然。莫所能逃其情。乃孔孟之真傳也。從此相得懽甚。

仁齋直斥程朱。自以孔孟正脈任。則其自視爲如何。而至蒙異端竺徒之印可。相得懽甚。何其聖學之衰也。余又觀其所作大學非孔氏之遺書辯。及語孟字義。彼於大學語孟。文義尙不通。何及其理之當否乎。以此妄議程朱之說。無忌憚之甚。

〔一本〕世遠教替。孔孟之傳失其緒也久矣。今言仁齋已得之。則學者何患於無所依歸焉。但其所謂得者。實非孔孟程朱之正傳。則徒足賊人。而非所以教後學矣。嗚呼。道之傳。豈易言哉。孔孟已沒。茫茫千四百餘年。至程朱始出。真知躬行。以率天下後世。而後聖道之全。復明于天地之間。而道統之傳。不容得而辭矣。夫孰擬議焉哉。然仁齋直斥程朱。自以孔孟正脈任。則其自視爲如何。而至蒙異端竺徒之印可。相得懽甚。何其聖學之衰也。余又觀其所作大學非孔氏之遺書辯。及論孟古義。彼於大學論孟。文義尙不通。何及其理之當否乎。以此妄議程朱之說。無忌憚之甚。

近又將歸于豐。謂予曰。願爲我述一言。以示爲學之法。

異學之徒而講乎聖賢之書。其迹似庶乎善變者。然其心實不在此。特以此爲龍斷之計耳。予曰。我素寡陋諛聞。奚足以爲子之贈。然問而不告。非禮也。告而不盡。非忠也。擇之在子。

詎報盡言。

孔子曰。可與言而不與之言失人。不可與言而與之言失言。知者不失人。亦不失言。孟子於夷之。謂不直道不見。而必先辯服其陷墨之非而後止。今婉語寬說如此文。則豈止失言而不直而已乎。

夫自學者見之。固有儒有佛。自天地見之。本無儒無佛。唯其一道而已。

儒者所學則天地之一道。而雖堯舜孔孟。亦儒而已矣。佛乃悖之害之。猶君父之有亂賊。五穀之有螟莠也。然則自天地見之。儒道本然之成名。而佛則虛稱惡物。不可不去可見。今乃兼舉儒佛。略無彼此辨別之言。至於并以爲天地之所無。此特溺襲習俗之故。以儒爲專門家流之通號耳。其自媿而無稽。亦甚矣哉。

〔一本〕學者所學。則天地之道。儒之所以爲儒。正以此。而究而言之。雖堯舜孔孟。亦儒而已矣。今乃以此連彼。賊害彝倫。斷滅名教之學。并以爲天地之所無。則失聖人立教明道以示人者。皆誑天下萬世。而吾所務以從事于儒學者。亦始不得與天地之道相關也。是何理耶。蓋欲以爲道香極說儒佛一道爲意。則其悖妄至此。亦不足怪矣。

所謂道云者。即天下之公道。而非一人之所得而私焉。雖聖人莫能損益之也。有於此實見得焉。則識釋氏之乖道。而知與道香謀之非義。何至於計利害徇人情。以貽吾黨

之詬哉。吁其亦不講乎程朱之書之過爾。往者不諫。來者可追。仁齋於此濯去舊學所染之非。而新遵宋儒道學之美。則其變故習而反正路。亦不難矣。此區區之望也。

〔一本〕此等話。即皆孔孟程朱平日之訓。有於此實見得焉。則識釋氏之乖道。而知與道香謀之非義。何至於計利害。徇人情取笑千歲。以貽吾黨之詬哉。以下同此本

今師生于天地間焉。則當從今日之天地而求焉。勿向前求之。勿從後推之。邇而求于遠。非善道也。厭常而趨于異。非善教也。天地之間。必有父子有君臣。有夫婦有昆弟。有朋友之交。

〔一本〕此少似以道論道香矣。但不直正大害倫傷彝之罪。以救其髡髮黑衣之非。而止平說常話如此。則何益之有哉。

晨興而夜寐。夏葛而冬裘。雖天子不能改焉。雖聖人不能易焉。亘古今而準四海。根乎人心。而通乎物理。是吾所謂一道也。雖佛不能離於今日之天地而獨立焉。則可知離於今日之天地而無所謂道者也。

道已如此矣。而佛則欲離天地絕人倫而獨立。此其所以得罪於聖人也。今已知如此。而不痛辯之。猶稱釋氏推其濶而不已何邪。

〔一本〕道已如是矣。而佛則欲絕人倫而獨立。此其所以得罪於聖人也。仁齋如知此。則何不痛辨之。而反助於彼之甚耶。

師之道吾之道。豈有二焉乎哉。又唯其是而已。

此意欲不斥彼之非。不佛彼之意。平說天地自然之本。為渾厚廣大之言。以誘之自服耳。殊不思彼欲聞儒者之道。而甘心釋徒舊態。則其不實無志。固亦可見。而我之告之。已不能刺頂門上一鍼。以衝其膏肓。則千喻萬囑。徒為姑息因循。足長其暴棄耳。夫何益之有。

〔一本〕此言尤可駭。蓋天地本一道。而儒佛所為。乃有正邪之別。不容不辨。所謂正則順此一道。而邪則悖此一道者也。孔子謂攻乎異端。斯害也已。孟子謂邪說誣民。充塞仁義者。正為此也。仁齋以儒鳴於世者。而其言如此。其務為無異於佛。而不顧聖賢成說之所在也。亦甚矣哉。

吾聞佛之教。以貪嗔癡三者。為其大戒。雖儒者犯此三戒焉。則吾不見其為君子。況於名為佛之徒者乎。今儒者必欲攻佛而廢之。佛者必欲援儒而一之。如虎相攫。如牛相舐。執戟而相鬪。固壘而相守。未必不相涉此三戒。

此言非常之笑囿也。以儒者之攻廢佛氏。為犯於三戒。怪言異說。可笑可歎。可笑等四字。一本作可歎可笑。使孔孟在天之靈聞之。則其憂患何如哉。且仁齋真以彼所謂貪嗔癡三戒。為與吾儒省察克治之實功。省察以下七字。一本作懲怒窒欲改過者。無異術邪。有邪。若有異則何必附會牽強。為吾道之汗。以黨于彼哉。必以為無異。則是亦佛也而已。何望議他人之禪不禪也。夫孟子叙堯舜以來一

治一亂。自以距楊墨放淫辭。為承三聖者之功。而其惡邪說暴行之甚。不止于亂賊禽獸之害。其豈有二毫私忿忤害之心哉。蓋其憂道闢邪之嚴如此。而自不容已耳。而其惡邪說以下至此。一本太略。唯作其憂道闢邪之嚴如此。而今稱承孟子之傳者。顯然以攻佛而廢之為非。而著之於送佛徒之文。則根本已乖。夫復何言。古人有言。寧可得謗于今人。不可得罪于天下後世。何可不思哉。今師之問我。我之告師。從容和寬。意消氣平。問焉而無所挾。答焉而無所諱。何曠之有。此所謂放飯流歎而無齒決之問者耳。况道香之於仁齋。不為無所挾。而仁齋所告。本亦無足諱者乎。

〔一本〕佛氏自知其非道。而常欲靠吾儒而立焉。其為三教一致之論。職此之由。今道香之於仁齋。豈為無所挾乎。且仁齋所告唯如是。則本莫可諱者。而尚卑巽自辨致此。亦可憐矣。倘使佛聞之。必拊掌稱善哉。於是乎書。時貞享乙丑之歲仲春初六日。伊藤維楨謹書。

仁齋以真儒自名。每譏宋儒嫌於禪學。而今黨佛如此。則拊掌善哉之報。固其所也。嗚呼聖學廢而邪誕蠡起。其為吾道害。莫如釋氏之甚者。是則苟有志於儒學〔一本作聖學〕者之同憂。而雖仁齋亦吾黨耳。故於此等舉錯。深為吾道歎惜。而至於感激訐直。取怒於人。則有所不暇顧焉。友人某持伊藤維楨與浮屠氏一文。來示予。予一讀之。駭愕甚矣。固雖不足深論。然亦恐初學或惑於其言。而輕信邪說。遂逐一辨批其非。以與諸同志。孟子不云乎。能言距楊墨者。

聖人之徒也。此後學所當謹守也。貞享丁卯十月十八日。佐藤直方〔一本作佐藤氏〕識

正德三癸巳年九月吉祥日

京師 芳野屋 權兵衛 開版
大坂 出店 同五兵衛

〔一本〕元祿四年辛未五月吉日板行

辨伊藤維楨號仁齋

某曰。欲爲孔孟之學者。不可不明乎名分之大義。而能爲孔孟之學者也。昔者孟子引孔子之言曰。知我者。其惟春秋乎。罪我者。其惟春秋乎。蓋孔子之聖。賢於堯舜遠甚矣。而孟子之所以願學孔子。而羽翼聖道者。其功亦不在禹下矣。然其語聖功之大。特不踰於作春秋以討亂賊。而又自以息無君無父之說。爲承三聖之功。則明未識乎名分之所_二在者。不可_一以爲孔孟之徒也。夫論語一經之大典也。世人徒知爲孔子之語。而未嘗識孔子之道在入倫。尤莫大於尊崇王室也。是故若無可以觀於人倫之本。而大德踰闌。則雖曰有文章之富。細行之美。然鄉原之魁。而不孔孟之徒也。語曰。或問子西。子曰。彼哉彼哉。蓋子西之才。知可以超於衆人。而不能以正乎名分。而革僭王之號。則所以孔子之不與也。亦可以觀焉。而矧雖繁纓之微物。躬自僭之者。正所以孔子之不容也。彰彰明矣。所以曰欲爲孔孟之學者。不可不明乎名分之大義者。正爲是也已矣。夫避諱之禮其嚴。耳聞而口不得言。如朱子二生不書慎字。慎字神宗之名。而孟子亦曰。諱名不諱姓。姓所同也。名所獨也。然本邦未聞其禮之嚴如是也。唯自古於御諱。則如說國人爲國民。舉可以見其禮之有也。今仕侯國者。尙皆識以避其名字。而不敢行之。則况

於御諱。則必不容以口言。斷然無復可疑矣。近世有伊藤維楨者。自少好學。長而成一家。自許以為得孔孟之血脉。驟以排斥程朱之學為己之任。而如世人喜新尚詭。初不揣其本。則以為其說高於岑樓。相和者尤多矣。然觀號其齋者。則曰仁。噫嘻。孔孟之道。要之專在五典。而自先反之。履霜且乘。何猜天秩之重耶。不諱名。非禮也。孔孟之血脉其衰矣。其不思惟。何如此太甚也。恭惟仁之一字也。豈非本邦中古以來。主上之御諱之通字。而今上之御諱耶。竊嘗聞之。天無二日。地無二尊。而率土莫非王土。普天莫非王臣矣。孔孟程朱之門。雖奴婢皆以識是義。而讀孔孟之書者。雖未得其血脉。然亦豈誰不知之。而況得其血脉。而師於人者乎。今也不然。蓋以主上之數十世相承而所獨為齋號。而恬然無所顧而忌憚。則初悖於大義。而於孟子之言何之所當哉。使魯仲連聞之。必寒心而不容無雄辨矣。又維楨稱論語曰。最上至極。宇宙第一書也。殊不知若實知論孟之尊如神明。必識不容僭竊。天子之禮樂。如八佾之責。當諱名如孟子之言。而不敢應僭。御諱矣。而適以僭竊焉。不敢以為忌諱。則何以為識論孟。而知其血脉者耶。故曰如維楨。則不啻不識孔孟之書。實躬自僭竊。而不識。天子在。則悖於孔孟春秋之道者矣爾。豈特如子西之不能革王號乎哉。雖曰有文章之才。細行之美。然大節既踰閑。則其餘不足觀而已矣。嗚呼。聖人之道也。一高卑。合遠近。幽明始終。本惟一理。而以其近而所係關之大者言之。則君父之定理。莫所逃於天地之間。而維楨反以是理為自葱嶺來。而背窮理。徒主張一己之見。

以侮大人之言。一生拘泥於文字。卒不察聖賢所宗而熄矣。噫可哀焉。蓋邪說橫流。充塞仁義。酷於浩水猛獸之禍。而孟子之所關以為承三聖者。其意尤嚴。而其成物之功最大。其就不驗於此。哉。或曰。世人率以仁為稱者不少。而子獨責維楨。苛刻太甚。何哉。曰。自任重者。其責亦不可不嚴矣。是則孔子罪趙盾之大法。而又朱子獨責備于揚雄之意也。今觀維楨碣銘。有洙泗正統。本邦主盟。學耶。德耶。日月雙明之久。然則此豈與世人比者乎。蓋洙泗正統。本邦主盟。而懵然不覺天子之在。敢強梁僭踰。則正統主盟。何在耶。又學耶。德耶。日月雙明。而觀其所著之書。素惑乎入德之塗。未識建立大本經綸之教。而妄議大學中庸。以為非孔門之書也。是以其心未明不正之驗。既媚浮屠。阿童蒙。曰儒佛無二道。而其顛倒錯亂之至。躬自犯非分。居然至屬纊。不能知其罪咎。則固異於曾子。而生不順。死不安。其不敬不信。亦可以見焉。然則學德雙明者在耶。吾安得不責焉哉。然予辨之竊有懼焉。蓋春秋之義。不明於天下。則孔孟程朱之道不著。而馴致於無君無父之邪流。而天下之危亂亦將至也。是以吾安得已乎。子曰。必也正名乎。志於孔孟之道者其諒諸。

享保甲子之春

土佐 貞齋 鈴木重充 謹識

辨道

日本 物茂卿 著

道難知亦難言。爲其大故也。後世儒者。各道所見。皆一端也。夫道。先王之道也。思孟而後。降爲儒家者流。乃始與百家爭衡。可謂自小已。觀夫子思作中庸。與老氏抗者也。老氏謂聖人之道僞矣。故率性之謂道。以明吾道之非僞。是以其言終歸於誠焉。中庸者。德行之名也。故曰擇子思借以明道。而斥老氏之非中庸。後世遂以中庸之道者誤矣。古之時。作者之謂聖。而孔子非作者。故以至誠爲聖人之德。而又有三重之說。主意所在。爲孔子解嘲者可見焉。然誠者。聖人之德。豈足以盡之哉。至於孟子性善。亦子思之流也。杞柳之喻。告子盡之矣。孟子折之者過矣。蓋子思本意。亦謂聖人率人性以立道云爾。非謂人人率性。自然皆合乎道也。它木不可爲杞柳。則杞柳之性有枯槁。雖然。枯槁豈杞柳之自然乎。惻隱羞惡。皆明仁義本於性耳。其學惻隱不足以盡仁。而羞惡有未必義者也。立言一偏。毫釐千里。後世心學。胚胎于此。荀子非之者是矣。故思孟者。聖門之禦侮也。荀子者。思孟之忠臣也。然當是時。去孔子未遠。風流尙存。名物不爽。及乎唐韓愈出。文章大變。自此而後。程朱諸公。雖豪傑之士。而不識古文辭。是以不能讀六經而知之。獨喜中庸孟子易讀也。遂以其與外人爭者言。爲聖人之道本然。又以今文視古文。而

昧乎其物。物與名離。而後義理孤行。於是乎先王孔子教法不可復見矣。近歲伊氏亦豪傑。頗窺其似焉者。然其以孟子解論語。以今文視古文。猶之程朱學耳。加之公然岐先王孔子之道而二之。黜六經而獨取論語。又未免和語視華言。我讀其所為古義者。豈古哉。吁嗟。先王之道。降為儒家者流。斯有荀孟。則復有朱陸。朱陸不已。復樹一黨。益分益爭。益繁益小。豈不悲乎。不佞藉天寵靈。得王李二家書以讀之。始識有古文辭。於是稍稍取六經而讀之。歷年之久。稍稍得物與名合矣。物與名合。而後訓詁始明。六經可得而言焉。六經其物也。禮記論語其義也。義必屬諸物。而後道定焉。乃舍其物。獨取其義。其不泛濫自肆者幾希。是韓柳程朱以後之失也。予五十之年既過焉。此焉不自力。宛其死矣。則天命其謂何。故暇日輒有所論著。以答天之寵靈。且錄其綱要者數十。以示入門之士者乎爾。

孔子之道。先王之道也。先王之道。安天下之道也。孔子平生欲為東周。其教育弟子。使各成其材。將以用之也。及其終不得位。而後脩六經以傳之。六經即先王之道也。故近世有謂先王孔子其教殊者非也。安天下以脩身為本。然必以安天下為心。是所謂仁也。思孟而後。儒家者流立焉。乃以尊師道為務。妄意聖人可學而至矣。已為聖人。則舉而措諸天下。天下自然治矣。是老莊內聖外王之說。輕外而歸重於內。大非先王孔子之舊也。故儒者處焉不能教育弟子以成其材。出焉不能陶鑄國家以成其俗。所以不能免於有體無用之誚者。亦其所為道者有差故也。

道者統名也。舉禮樂刑政凡先王所建者。合而命之也。非離禮樂刑政別有所謂道者也。如曰賢者識其大者。不賢者識其小者。莫不有文武之道焉。又如武城絃歌。孔子有牛刀誚。而子游引君子小人學道。可見已。孔安國註。道謂禮樂也。古時言語。漢儒猶不失其傳哉。後世貴精賤粗之見。防於濂溪。濂溪乃淵源於易道器之言。殊不知道謂易道也。形謂奇偶之象也。器謂制器也。易自卜筮書。不可與它經一視焉。如宋儒訓道為事物當行之理。是其格物窮理之學。欲使學者以己意求夫當行之理於事物。而以此造禮樂刑政焉。夫先王者聖人也。人人而欲操先王之權。非僭則妄。亦不自揣之甚。近世又有專據中庸孟子。以孝弟五常為道者。殊不知所謂天下達道五者。本謂先王之道可以達於天子庶人者有五也。非謂五者可以盡先王之道也。堯舜之道。孝弟而已矣。亦中庸登高必自卑意。非謂堯舜之道盡於孝弟也。又如以中庸為道。亦欲以己意擇所謂中庸者。苟不學先王之道。則中庸將何準哉。又如以往來弗已為道。是其人所自負死活之說。猶爾貴精賤粗之流哉。凡是皆坐不識道為統名故耳。

先王之道。先王所造也。非天地自然之道也。蓋先王以聰明睿知之德。受天命。王天下。其心一以安天下為務。是以盡其心力。極其知巧。作為是道。使天下後世之人由是而行之。豈天地自然有之哉。伏羲神農黃帝亦聖人也。其所作為。猶且止於利用厚生之道。歷顓頊帝嚳。至於堯舜。而後禮樂始立焉。夏殷周而後粲然始備焉。是更數千年。更數聖人之心力知巧而成焉者。亦非一聖人一生

之力所能辨焉者。故雖孔子亦學而後知焉。而謂天地自然有之而可哉。如中庸曰率性之謂道。當是時。老氏之說興。貶聖人之道為偽。故子思著書。以張吾儒。亦謂先王率人性而作為是道也。非謂天地自然有是道也。亦非謂率人性之自然不假作為也。辟如伐木作宮室。亦率木性以造之耳。雖然。宮室豈木之自然乎。大氏自然而然者。天地之道也。有所營為運用者。人之性也。後儒不察。乃以天理自然為道。豈不老莊之歸乎。

先王聰明睿知之德。稟諸天性。非凡人所能及焉。故古者無學為聖人之說也。蓋先王之德。兼備衆美。難可得名。而所命為聖者。取諸制作之一端耳。先王開國。制作禮樂。是雖一端。先王之所以為先王。亦唯是耳。若唯以其在己之德。則無天子之分矣。若以平治天下之仁命之。則後賢王皆爾。制作禮樂。是其大者。故以命先王之德爾。其實聖亦一德。如書曰乃聖乃文。詩曰聖敬日躋。及周禮六德。聖居其三。是豈先王之德之全哉。然既已以命先王之德。自此之後。聖人之名。莫以尚焉。至於子思推孔子之為聖。而孔子無制作之迹。又極言道率人性。則不得不言聖人可學而至矣。故以誠語聖也。至於孟子勸齊梁王。欲革周命。則不得不以聖人自處矣。以聖人自處。而堯舜文周嫌於不可及矣。故旁引夷惠。皆以為聖人也。子思去孔子不遠。流風未泯。其言猶有顧忌。故其稱聖人。有神明不測之意。若孟子則止言行一不義殺二不辜而得天下不為也。是特仁人耳。非聖人也。要之孟子亦去孔子不甚遠。其言猶有斟酌者若此。祇二子急於持論。勇

於救時。辭氣抑揚之間。古義藉以不傳焉。可嘆哉。蓋後王君子。奉先王禮樂而行之。不敢違背。而禮樂刑政。先王以是盡於安天下之道。是所謂仁也。後王君子。亦唯順先王禮樂之教。以得為仁人耳。是聖人不可學而至焉。仁人可學而能焉。孔子教人以仁。未嘗以作聖強之。為是故也。大氏後人信思孟程朱。過於先王孔子。何其謬也。

後儒多強學者。以高妙精微凡人所不能為者。而曰聖人以是立極也。妄矣哉。先王立極。謂禮也。漢儒訓極為中。禮者所以教中也。又解中庸書而謂子思說禮意矣。其說雖未當。要之去古未遠。師弟所傳授。古義猶存者爾。蓋先王制禮。賢者俯而就之。不肖者企而及之。是所謂極也。是凡人所能為者也。不爾。務以凡人所不能為者強之。是使天下之人絕望於善也。豈先王安天下之道哉。故所謂事理當然之極。及變化氣質。學為聖人類。皆非先王孔子之教之舊矣。近世伊氏能知其非是。而廼以孝弟仁義謂為規矩準繩。果若是乎。則人人自以其意為孝弟仁義也。亦何所準哉。可謂無寸之尺。無星之稱已。

孔門之教。仁為至大。何也。能舉先王之道而體之者仁也。先王之道。安天下之道也。其道雖多端。要歸於安天下焉。其本在敬天命。天命我為天子為諸侯為大夫。則有臣民在焉。為士則有宗族妻子在焉。皆待我而後安者也。且也士大夫皆與其君共天職者也。故君子之道。唯仁為大焉。且也相親相愛相生相成相輔相養相匡相救者。人之性為然。故孟子曰。仁也者人也。合而言之道也。荀子

稱。君者群也。故入之道。非以一人言也。必合億萬人而為言者也。今試觀天下。孰能孤立不群者。士農工商。相助而食者也。不若是則不能存矣。雖盜賊必有黨類。不若是則亦不能存矣。故能合億萬人者君也。能合億萬人。而使遂其親愛生養之性者。先王之道也。學先王之道而成德於我者。仁人也。雖然。士欲學先王之道以成德於我。而先王之道亦多端矣。人之性亦多類矣。苟能識先王之道要歸於安天下。而用力於仁。則人各隨其性所近。以得道一端。如由之勇。賜之達。求之藝。皆能成一材。足以為仁人之徒。共諸安天下之用焉。而其德之成。如夷齊之清。惠之和。尹之任。皆不必變其性。亦不害為仁人焉。若或不識用力於仁。則其材與德。皆不能成。而諸子百家由此興焉。此孔門所以教仁也。孟子惻隱以愛語仁。是其性善之說。必本諸人心。故不得不以愛言之耳。雖有愛人之心。而澤不及物。豈足以為仁哉。故雖孟子亦有仁政之說矣。後儒廼不識孟子實為勸世之言。而謂用力於仁。莫切於孟子也。則輒欲推其惻隱之心以成聖人之仁。可謂妄意不自揣之甚已。主張其學者。遂至謂佛有仁無義也。夫佛無安天下之道。豈足以為仁哉。墨子乃有見先王之道。仁莫以尚焉。遂謂仁足以盡一切矣。殊不知天地大德曰生。仁亦聖人大德也。雖然。亦一德也。若天地一於生。則何以有夏秋冬乎。聖人一於仁。則何以有勇智信義乎。孟子舉義折之者是矣。然仁義並言。而仁由是小矣。安在其為大德乎。宋儒又欲合二者之異。乃造專言偏言之目。專言足以盡一切。偏言足以與衆德對立。庶足以孔孟之教並行而不相悖也。

是其理學之說。欲瞭然於言語之間者已。安足以知先王孔子之道乎。先王之道多端矣。且舉其尤者言之。政禁暴。兵刑殺人。謂之仁而可乎。然要歸於安天下已。先王之教多端矣。智自智。勇自勇。義自義。仁自仁。豈可混合乎。然必不與安天下之道相悖。而後謂之智勇與義已。如孔子曰。據於德。依於仁。人各據其性之德而不失之。性之德雖多端。皆不害於仁。祇未能養而成之。故悖於道。養之道。在依於仁游於藝。依者如聲依永之依也。樂聲必與詠歌相依。清濁以之。節奏以之。依之謂也。依於仁亦爾。人雖各據其德。亦必和順於先王安天下之道。不敢違之。然後足以各成其德。此孔門之教也。大氏先王孔子之道。皆有所運用營為。而其要在養以成焉。然後人迫切之見。急欲以仁盡一切。是以不得不跳而之理。而究其說。乃不過浮屠法身徧一切之歸悲哉。

多謂人有仁義猶天有陰陽也。遂以仁義為道之總。是後世之言也。當先王孔子之時。豈求一言以盡乎道焉。求一言以盡乎道者。務標異聖人之道者也。先王孔子之時。豈有是哉。古者禮義對言焉耳矣。仁者聖人之大德。豈禮義之倫乎。故孔門之教。仁是為上。至於孟子並言仁義。以是而辨楊墨之非可也。以教學者。不可也。如仁義禮智。亦孔子時所無。孟子始言之。亦備楊墨所不有者。以見吾道之備已。其實禮義人之大端。而仁於斯為大。如知者。人喜以才智自高。是其情也。故聖人未嘗以知為教矣。如曰知者仁者。成德之名。各因其性所稟殊焉。若夫仁義禮智就一人之身

言之者。未嘗聞也。漢儒以屬五行。或智爲土。信爲水。或智爲火爲水。未有定說。可見非古道已。論語屢以好仁好義好禮好德好善好學好古爲言。而未嘗以好知好信爲教。故其非孔門之舊也。荀子譏子思孟子造五行。豈誣乎哉。

仁者養之道也。故治國家之道。舉直錯諸枉。能使枉者直矣。脩身之道。亦養其善而惡自消矣。先王之道之術也。後世儒者不識先王之道。廼逞其私智。以謂爲善而去惡。擴天理而遏人欲也。此見一立。世非唐虞。人非聖人。必惡多而善少。則殺氣塞天地矣。故通鑑之於治國。性理之於脩身。人與我皆不勝其苛刻焉。遂使世人謂儒者喜攻人。豈不悲哉。大氏商鞅之後。不啻朝廷。雖庠序亦用其法。宜其不及三代矣。

先王之道。安天下之道也。後世言經濟者。莫不祖述焉。然後世更封建而郡縣。而先王之道。爲世贅旒。故世之稱先王者。廼所謂以經術緣飾吏治是已。大氏封建之道。其於民猶且有家人父子意。至於郡縣。則唯法是仗。截然太公。無復恩愛。加之隋唐後。科舉法興。士習大變。所務番列。詳備明粵。是其至者已。士生於其世。法家之習。淪於骨髓。故其談道解經。亦從其中來。是烏知所謂道術者乎。宋儒所貴。綱目悉舉。巨細曲盡。豈足以爲先王之道也。

先王之道。立其大者而小者自至焉。故子夏曰。大德不踰閑。小德出入可也。蓋不若是。不可以進道也。子貢曰。賢者識其大者。不賢者識其小者。故識大者爲賢。識小者爲不賢。後人之不賢。

唯小是見。銖銖而稱之。至石必差。寸寸而度之。至丈必過。其論務欲窮精微之極。析蠶絲。剖牛毛。而不知其大者已先失之也。是何能養人才安國家哉。其論聖人。亦謂渾然天理。無二毫人欲之私矣。是亦以一己之見窺聖人者也。傳曰。一張一弛。文武之道也。孔子曰。可以無大過矣。子思曰。雖聖人有所不能焉。不爾。堯之用鯀而舜殛之。舜征三苗而禹班師。周公殺管蔡。孔子墮三都而不能克。吾不知其以何解嘲也。孔子不撤薑。以其嗜之也。傳所載。文王嗜昌歠。庸何傷乎。朱子引通神明。豈不博會之甚乎。大氏聖人之德。與天地相似焉。聖人之道。含容廣大。要在養而成之。先立其大者。而小者自至焉。後人迫切之見。皆其所識小故也。

脩德有術。立其大者而小者自至焉。此孔門所以用力於仁也。去惡有術。如童牛之牯。如積豕之牙。今人則欲一日而衆善傳諸身也。襲而取之。矜以持之。譬諸振苗。豈知油然而生之道乎。又欲一日而衆惡如深也。扶而剔之。吹毛求疵。譬諸庸醫治疾。豈知標本之道乎。何況化之道乎。言性自老莊始。聖人之道所無也。苟有志於道乎。聞性善則益勸。聞性惡則力矯。苟無志於道乎。聞性惡則棄不爲。聞性善則恃不爲。故孔子之貴習也。子思孟子蓋亦有屈於老莊之言。故言性善以抗之爾。荀子則慮夫性善之說必至廢禮樂。故言性惡以反之爾。皆救時之論也。豈至理哉。歐陽子謂性非學者之所急。而聖人之所罕言也。可謂卓見。變化氣質。宋儒所造。淵源乎中庸。先王孔子之道所無也。傳所謂變者。謂變其習也。夫先王孔子

之道。安天下之道也。安天下。非一人所能為矣。必得衆力以成之矣。辟諸春夏秋冬備。而後歲功可成焉。椎鑿刀鋸備。而後匠事可為焉。寒熱補瀉備。而後醫術可施焉。錐欲其銳。椎欲其鈍。石膏大寒。附子大熱。不爾。先王治天下。莫有所用其材也。雖然。石膏煨附子煨。是則在禮樂哉。石膏雖煨。不損其大寒之性。附子雖煨。不減其大熱之性。故知變化氣質之說非矣。且氣質者天之性也。欲以人力勝天而反之。必不能焉。強人以人之所不能。其究必至於怨天尤其父母矣。聖人之道必不爾矣。孔門之教弟子。各因其材以成之。可以見已。祇如君子不器。仁人之謂也。君相之器也。比諸匠者與醫焉。或謂可舟可車者。萬萬無此理矣。據於德。依於仁。各隨其性所近。以成其德。苟能得其大者。皆足以為仁人焉。不器之謂也。

思孟以後之弊。在說之詳而欲使聽者易喻焉。是訟者之道也。欲速粥其說者也。權在彼者矣。教入之道則不然。權在我者矣。何則。君師之道也。故善教人者。必置諸吾術中。優游之久。易其耳目。換其心思。故不待吾言。而彼自然有以知之矣。猶或不喻也。一言以啓之。渙然水釋。不待言之畢焉。故教者不勞。而學者深喻焉。何則。吾不言之前。思既過半故也。先王孔子以之。故先王之教。禮樂不言。舉行事以示之。孔子不憤不啓。不悱不發。豈不然乎。至於孟子。則強辨以聒之。而欲以是服人。夫以言服人者。未能服人者矣。蓋教者施於信我者焉。先王之民。信先王者也。孔子門人。信孔子者也。故其教得入焉。孟子則欲使不信我之人由我言而信我也。是戰

國游說之事。非教人之道矣。予故曰。思孟者與外人爭者也。後儒輒欲以其與外人爭者言施諸學者。可謂不知類已。

後儒之說。天理人欲。致知力行。存養省察。粲然明備矣。以我觀於孔門諸子。蓋有未嘗知其說者焉。是何其僂侗也。孔子之教。蓋亦有未嘗及其詳者焉。是何其鹵莽也。然先王孔子以彼而不以此者。教之道本不可若是也。後世廼信思孟程朱。過於先王孔子。何哉。蓋先王之教。以物不以理。教以物者。必有事事焉。教以理者。言語詳焉。物者衆理所聚也。而必從事焉者久之。乃心實知之。何假言也。言所盡者。僅僅乎理之一端耳。且身不從事焉。而能瞭然於立談。豈能深知之哉。釋氏猶謂如飲水冷煖自知。曾謂先王不及釋氏乎。故不先之以事而能有成焉者。天下鮮矣。不啻先王之道。凡百技藝皆爾。

古者道謂之文。禮樂之謂也。物相雜曰文。豈一言所能盡哉。古謂儒者之道博而寡要。道之本體為然。後世貴簡貴要。夫直情徑行者。戎狄之道也。先王之道不然。孔子曰。文王既沒。文不在茲乎。後儒謂謙辭。夫文者文王之文也。段使孔子自謙。而謙文王哉。是自理學者流二精粗之見耳。又有文質之說。文者道也。禮樂也。質者學者之質也。貴忠信者。謂受教之質耳。忠信而無文。不免為鄉人矣。故孔子十室之邑。不貴忠信。而貴好學也。後儒僅能言精粗本末一以貫之。而察其意所嚮往。則亦唯重內輕外。貴精賤粗。貴簡貴要。貴明白貴齊整。由此以往。先王之道。藉以衰

颯枯槁。肅殺之氣。塞於宇宙。其究必馴致於戎狄之道而後已焉。蓋坐不知古之時道謂之文。而其教在養以成德故也。

善惡皆以心言之者也。孟子曰。生於心而害於政。豈不至理乎。然心無形也。不可得而制之矣。故先王之道。以禮制心。外乎禮而語治心之道。皆私智妄作也。何也。治之者心也。所治者心也。以我心治我心。譬如狂者自治其狂焉。安能治之。故後世治心之說。皆不知道者也。

理無形。故無準。如理學者流。以中庸為精微之極。其言誠然。然其人若先識先王之道。而後贊嘆之謂是中庸也。則可矣。若其人未嘗識先王之道。獨以己意擇中庸之理。而謂是與先王之道不殊。則不可也。又如訓道為當行之理。亦以贊嘆先王之道也。則可矣。若獨以己意求所謂當行之

理於事物。而合於先王之道也。則不可矣。是無它也。理無形。故無準。其以為中庸為當行之理者。廼其所見耳。所見人人殊。人人各以其心謂是中庸也是當行也。若是而已矣。人間北看成南。亦何所準哉。又如天理人欲之說。可謂精微已。然亦無準也。辟如兩鄉人爭地界。苟無官以聽之。將何所準哉。故先王孔子皆無是言。宋儒造之。無用之辨也。要之未免堅白之歸耳。

先王之道。古者謂之道術。禮樂是也。後儒乃諱術字而難言之。殊不知先王之治。使天下之人日遷善而不自知焉。其教亦使學者日開其知月成其德而不自知焉。是所謂術也。樂正崇四術。春秋教以禮樂。冬夏教以詩書。是之謂也。如後世所謂格物窮理。克治持敬。其意非不美矣。祇其不學無

術。事不師古。欲襲而取之。驟有諸己。可謂強也。大氏人物。得其養則長。不得其養則死。不啻身已。才知德行皆爾。故聖人之道。在養以成之矣。天地之道。往來不已。感應如神。為於此而驗於彼。施於今而成於後。故聖人之道。皆有施設之方。不求備於目前。而期成於它日。日計不足。歲計有餘。歲計不足。世計有餘。使其君子有以自然開知養材以成其德。小人有以自然遷善遠惡以成其俗。是其道與天地相流通。與人物相生長。能極廣大而無窮已者也。近世頗有言宋儒之非者。而顧其所為道德者。則亦不出言語講說之間。僅能削其已甚者。而稍傳以溫柔之旨云爾。吁終未免五十步之謂哉。

先王之道。莫不本諸敬天敬鬼神者焉。是無它。主仁故也。後世儒者尚知務窮理。而先王孔子之道壞矣。窮理之弊。天與鬼神。皆不足畏。而已廼傲然獨立於天地間也。是後世儒者通病。豈不天

上天下唯我獨尊乎。且茫茫宇宙。果何窮極。理豈可窮而盡之乎。其謂我盡知之者。亦妄已。故其所為說。皆陽尊先王孔子而陰已悖之。其意自謂能發古聖人所未發者。而不自知其求勝先王孔子以上之焉。夫聖人之教至矣。豈能勝而上之哉。凡聖人不言者。廼所當不言者已。若有所當言者。則先王孔子既已言之。豈有未發者而待後人乎。亦弗思也已。

先王四術。詩書禮樂。是三代所以造士也。孔氏所傳是已。然其所以為教者。經各殊焉。後儒輒以一槩之說解之。則奚以四為也。蓋書者。先王大訓大法。孔子所畏聖人之言。是也。古之時。舍此

則無書。書唯此耳。後王君子所尊信。學者所誦讀。先王安天下之道具是矣。後儒廼以爲樸學。而它求高妙精微者。其病坐弗思耳。古聖人一言之微。皆繫乎天下之大。盛衰治亂所由起焉。非疏通知遠者不能讀之。孟子不信書。其稱述堯舜。將何所睹記。宜其昧於先王安天下之道也。詩則異於是矣。諷詠之辭。猶後世之詩。孔子刪之。取於辭已。學者學之。亦以修辭已。故孔子曰。不學詩。無以言。後世廼以讀書之法而讀詩。謂是勸善懲惡之設焉。故其說至於鄭衛淫奔之詩而窮矣。且其所傳義理之訓。僅僅乎不盈掬焉。果若其說。聖人盍亦別作訓戒之書。而以是迂遠之計爲也。故皆不知詩者之說矣。如詩序。則古人一時以其意解詩之言。敘其事由而意自見焉。何假訓詁。然詩本無定義。何必守序之所言以爲不易之說乎。如大序乃關雎之解。古人偶於關雎敷衍以長之耳。後儒不解事。析爲大小序。可笑之甚也。大序詩之爲言。上自廟堂。下至委巷。以及諸侯之邦。貴賤男女。賢愚美惡。何所不有。世變邦俗。人情物態。可得而觀。其辭婉柔近情。諷詠易感。而其事皆零碎猥雜。自然不生矜持之心。是以君子可以知宵人。丈夫可以知婦人。朝廷可以知民間。盛世可以知衰俗者。於此在焉。且其爲義。不爲典要。美刺皆得。唯意所取。引而伸之。觸類而長之。莫有窮已。故古人所以開意智。達政事。善言語。使於隣國。專對酬酢者。皆於此得焉。書爲正言。詩爲微辭。書立其大者。詩不遺細物。如日月之代明。如陰陽之竝行。故合二經而謂之義之府也。若夫禮樂者德之則也。中和者德之至也。精微之極。莫以尙焉。然中和無形。

非意義所能盡矣。故禮以教中。樂以教和。先王之形中和也。禮樂不言。能養人之德性。能易入之心思。心思一易。所見自別。故致知之道。莫善於禮樂焉。且先王所以紀綱天下立生民之極者。專存於禮矣。知者思而得焉。愚者不知而由焉。賢者俯而就焉。不肖者企而及焉。其或爲一事出一言也。必稽諸禮。而知其合於先王之道與否焉。故禮之爲言體也。先王之道之體也。雖然。禮之守太嚴。苟不樂以配之。亦安能樂以生乎。故樂者生之道也。鼓舞天下。養其德以長之。莫善於樂。故禮樂之教。如天地之生成焉。君子以成其德。小人以成其俗。天下由是平治。國祚由是靈長。先王之教之術。神矣哉。四術之盡於教也。吾道一以貫之。豈特參賜乎。孔門諸子。皆聞而知之矣。宋儒推尊思孟。而又推本諸曾子。是其道統之說也。豈可據乎。或以一理言之。或以一心言之。或以誠言之。以一理言之者。天地人物皆爾。浮屠法身徧一切之見耳。以一心言之。以誠言之者。知歸重於聖人之德。而不知歸重於先王之道焉。孔子明言吾道。吾道者先王之道也。故孔子曰。文王既沒。文不在茲乎。夫先王之道。安天下之道也。安天下之道在仁。故曰一以貫之。何以謂貫之。仁一德也。然亦大德也。故可能貫衆德焉。先王之道多端矣。唯仁可以貫之矣。辟如繩貫錢然。故曰貫。若一理也。一心也。誠也。則一而已矣。何必曰貫。故曾子曰。忠恕而已矣。忠恕爲仁之方故也。曰而已矣者。猶之堯舜之道孝弟而已矣。孝弟豈盡於堯舜之道乎。則忠恕豈盡於道乎。然由是以求之。庶足以盡之矣。古人言語皆

如此。後世理學者流。無有運用營爲之意。急欲盡其理於目前也。故忠恕爲理之虛象。而有天忠恕聖人忠恕學者忠恕種種之說。豈曾子時語意邪。

後世人不識古文辭。故以今言視古言。聖人之道不明。職是之由。且舉其大者言之。易太極。謂聖人作易有_レ此太極耳。故曰易有_レ太極。初不以_レ天地言之。窮理。研幾。皆贊聖人作_レ易耳。後儒以爲學者事。誤矣。天者上天也。性者性質也。貞者不變之謂。訓正而屬諸智者。強矣。嘉會者如婚姻賓客之事。合禮猶合樂之合。婚姻賓客之事。所以大合禮也。利物者利用利器類。和義謂和順於義也。謂義之合宜處者非也。不變其守。乃所以幹事。豈智哉。故下文曰。行此四者。故元亨利貞配諸仁義禮智者。傳會之甚矣。繼之者善。如繼天之繼。善者謂善人也。訓流行者。失繼字義矣。成之者性。謂人各隨性所近而成務也。凡言德者。有對怨言者。有對財言者。其單言者。皆性之德也。不爾。據於德。何其荒唐。人心者民心也。如朽索之馭。故曰危。道心者導民心也。其機甚微。故曰微。大學者。古大學有養老序齒等禮。是其義也。明德者君德也。左傳諸書可稽焉。明者舉而明之也。非磨而明之之謂也。即謂養老序齒之事也。人倫明於上。而小民親於下。故曰親民。何必改新民。新民出康誥。革命之事也。大學之教。豈以之乎。物者禮之善物也。格者來之也。致者使之來至也。非極致之謂也。禮之善物至。而吾之知自然明矣。先王之教之術爲然。朱子引易窮理。不成字義。強矣。陽明訓正。引格君心之非。殊不知格皆有感格意。亦誤矣。敬者敬天爲

本。敬君敬民敬身皆然。豈徒然持敬乎。克己者約身之解是矣。克猶克家之克。不爾。克己由己。字義相犯。凡此類。皆失古義之大者也。

六經殘缺。縱其完存。亦古時言也。安能一一得其義弗謬乎。故後之解六經者。皆牽強耳。大氏後儒以一物不識爲恥。殊不知古所謂知者貴知於仁也。孔子未嘗以好知爲教焉。今之學者當以識古言爲要。欲識古言。非學古文辭不能也。前漢去孔子時未遠。故解經多傳授之說。至後漢漸失古義。然韓愈未出。文章未變。古言尙有存者。故博讀秦漢至六朝之書。熟讀玩味以求之。庶或得之哉。然吾亦不欲學者因吾言以廢宋儒及諸家之說也。古今邈矣。六經殘缺。要不得_レ不以理推之。以理推之者。宋儒爲之嚆矢焉。祇其理之未精也。是以滯乎理。精之又精之。豈有宋儒及諸家之過哉。且學問之道。貴乎思。方思之時。雖老佛之言。皆足爲吾助。何況宋儒及諸家之說乎。

享保丁酉秋七月望

物 茂 卿

非徂徠學序

夫三代邈也。程朱沒既久矣。元明之間。違道干譽之徒蜂起。鳴於當時。世稱通儒。蓋孔門猶惑於聞達。況於後代乎。我邦近世徂徠者出。猶元明之儒乘於好新喜奇。然其為害淺而且近。則不必闢而明矣。頃吾友蟹氏寄一書。開卷則辨彼者也。順利因思俗儒之見雖不足辨。而蟹氏之憂。亦是一理。此書之成。實一童蒙之聽。使不至岐多路惑。亦一治之功。接孟子者也。豈不美乎。於是書其意於篇端。以為序云。

寶曆十年庚辰季夏中浣

久米順利謹書

非徂徠學序

非徂徠學序

非徂徠學自序

自徂徠物氏出。而英俊多爲之所傷。以其曰道者先王所造。故士子尊道之心薄。曰窮理察微非也。故研精峻行之志弛。曰氣質不可變。故不必遏放蕩。曰宋學非古。而吹毛求疵。故喜奇好簡。以長驕倖。曰詞章爲經學之基。而使入先習詩賦。故詞人傲放之氣移。士子之心。放蕩愈長。忠信漸衰。遂爲先王孔子之罪人。其間有好勝于譽者。不必左祖徂徠。亦不必從朱子。意欲復古。業唯師心。以排先賢爲事。以立新說爲務。其曰兼取諸家。亦實主心所好。顧以朱子爲非中正。此皆實爲徂徠所化。而不自知爲徂徠之奴。門各異說。人各殊趣。新學小生不知所向。或一左陷大澤。則亦放蕩放慢。賊仁害義。嗚呼徂徠之學之害。可謂甚於洪水猛獸也。夫疾入於骨髓者。雖以扁倉之伎。而如不受何哉。若或在皮膚。乃施之療。則庶乎一吐而解毒矣。愚於是乎斥徂徠之非。以作此編。其所斥唯提大綱。蓋斥其大。則小者可知也。

寶曆甲戌春三月望

蟹維安序

非徂徠學

蟹維安著

徂徠物氏著論語徵。謗先儒之說曰。後世豪傑厚自封殖。以聖知自處。敖然自取諸其心以爲解。愚謂此徂徠不能見其睫云爾。徂徠著論語徵。貶黜舊解。自以爲得先王孔子之意。公然布於一世。彼說非孔子復生而授之也。非魂往冥漠而受之也。亦唯自取諸其心爾。夫孔子不復生也。魂未往冥漠也。獨自觀古考迹。決諸胸臆。徂徠與先儒何殊。若曰我善讀古書知古今言之異歟。則亦自以爲善讀善知也。先儒豈不善讀古書哉。豈不善知古今言之異哉。若曰我善學古文辭。故善通古訓也歟。則于鱗元美既善學古文辭矣。而其說未嘗如徂徠也。若曰二子未推及。我則推及之歟。則其推及云者。乃是徂徠之意見。依然取諸其心。強託其功於古文辭也。然而囂囂張口曰。不佞答天之寵靈。然則所謂以聖知自處者。徂徠自道也。嗚呼愚哉。甚矣徂徠之妄也。徵所收古訓者。多是牛溲馬勃。朱子汰之而不取。其辨備矣。彼未之知。探輯求媚。譬諸拾石以爲玉誇之盲人。春臺古訓亦然。徂徠之謬。其要在學則及辨道辨名。能察於此。則

徵之謬不必辨而明矣。

管子有學則章。宋儒亦著學則。皆示學習之法。以備準繩。未嘗有及議論者。徂徠學則。則異乎此。縷縷議論。紛紛誹謗。謂之學義則可也。而彼題曰學則。可謂不知文也已。又彼以古文辭自負。而學則一篇。雖雜用陳言奇句。然未免於唐宋之句法。十日所視。其可誣乎。嗚呼彼以文鳴。而名違其體。以辭自負。而錦綴於布。天之惜才而然邪。抑天責其罪使之眩邪。

學則曰。千載逝矣。俗移物亡。故之不可恃也。愚謂非也。千載逝矣。唯故可恃也。徂徠雖有才矣。初不得不假話。其中年讀古書。亦唯以話為之端緒爾。若夫話之不可恃也。則彼二辨一徵。何為紛紛訓話。何著不可恃者之多也。

又曰。吾奉于鱗氏之教。眎古修辭。習之習之。久與之化。而辭氣神志皆肖。辭氣神志皆肖。而目之眎。口之言。何擇。其附錄曰。不佞少小時。已覺宋儒之說於六經有不合者。中年發憤以讀古書。目不涉東漢以下。亦如于鱗氏之教者蓋有年矣。久而熟之。不啻若自其口出。其文意相發。不復須注解。於是回首以觀後儒之解。紕謬悉見。愚謂異哉徂徠。何與釋迦相似。釋迦言曰。天上天下唯我獨尊。徂徠之意亦唯我獨尊而已矣。彼開口則稱禮樂。而其言不讓。曰辭氣心志皆肖。曰紕謬悉見。此豈三代之辭氣耶。乃其曰肖者。自以為肖。而實是天地懸隔。然則彼目眎口言。昭昭乎俗眼俗論。何足以信之哉。朱子所解。無於六經不合者。徂徠少時已以為不合者。與彼慮不合

耳。其中年又以臆為主。求之六經諸子。及其成熟遷就成義。文意句勢與臆相符。於是乎愈自信以為千古卓見。其與妄見異者。指為紕謬牽強。終不知妄見之所成也。可謂昏愚矣。然彼妄本自浮淺生。而一世淺薄之士。亦嘗與彼同疑。故忽聞其說。以為卓越。雷同犬吠。浮淺愈長。亦終不知浮淺之所祟也。噫。

學則曰。聖人惡空言。仁義道德之說盛。而道益不明。又曰。聃者務言之者也。務言之者。明一端者也。舉一而廢百。所以害也。後儒乃非聃而傲其尤。言之不已。名存物亡。愚謂非也。嘗聞聖人以空言為不如行事。未嘗聞曰惡空言也。徂徠何其讀古書之疎也。且聖人特就春秋而言之。若尚書論語。不必見之行事。但非若老莊離物而說理耳。孔子曰。言思忠。又曰。慎言其餘。何尚不言乎。聃離物而言。所以非也。程朱即物而言。所以是也。若特以務言為非。則尚書論語醇醇話言。徂徠皆以為非耶。秦漢之間。物多亡。道不明。非言之罪也。言而不中之罪也。程朱勃興。言之而中。存物於未盡亡。明道於將墜地。愚故曰。仁義道德之說盛。而物存道明矣。唯徂徠之妄見未明而已。且夫徂徠惡空言。而學則辨道辨名論議紛紛。忿目攘臂。猶是未足。刻國字答問書。求其說之售於閭巷。何其言之不已。而且務言之耶。

學則附錄答安澹泊書曰。家禮神主制長尺二寸。象十二月。凡禮用十二唯天子為然。伊川乃用諸庶人。豈非僭邪。愚謂。徂徠可謂不知禮已。神主用尺二寸非僭也。深衣亦十有二幅。象十有二

月。由天子達庶人。禮文明矣。庶人服之。孰謂之僭乎。禮數有以三為天子之數者。有以五為天子之數者。有以八為天子之數者。有以十二為天子之數者。是故天子十有二旒。諸侯以下用之則為僭。而深衣十有二幅則非僭也。天子八佾。諸侯以下用之則為僭。而八佾之君用介八人則非僭也。其餘數亦皆類此。若必以用十二為僭。則一年十有二月。唯天子用之諸侯以下則不用。而可哉。但漢官儀有天子主尺二寸諸侯一尺之說。此特漢禮。非古經所言也。古禮主數。經無所見。周制棺厚自天子達庶人。喪為父母三年亦達于上下。以此推之。則主數豈可以尊卑有異耶。故程子斷然以尺二寸為度。所謂以義起者。可謂得聖人之法矣。非徂徠之所知也。凡徂徠之論禮。其疎妄多如此。世人信彼大言。以為達禮者。惑也。

仁齋徂徠惡窮理。不亦妄乎。昔者先王之設學也。天子之元子入焉。將以乘六龍御四海。其衆子及國之俊選入焉。將以輔王室備職任。故其學必即天下之物。天下萬機。事變不測。故能窮理以求應宜。升高必自卑。故曰因小學之成功。又曰因已知之理而益窮之。五品六藝豈理外之物哉。大學所窮豈物外之理哉。小學既教以物。及其入於大學。則欲以格於此物。名狀度數既能通曉。其理之精無所不窮。然後為格也。記曰。大學始教。小雅肆三。官其初也。官者何也。天子以天下為官。諸侯以社稷為官。卿大夫士亦各有官。皆將施於經世濟民。宜乎即天下之物也。後世治教異塗學政相分。當路之官或不知一丁字。讀經之士。則終身埋首於書冊。僅為人所問字而止。是以

朴實不欺足以自飾。飛耳長目足以應人。遂以為古亦如此。可謂秋蟬不識春矣。且夫理之當窮者。雖仁齋徂徠亦不得不然。童子問字義古義辨道辨名學則論語徵。皆是紛紛理窟。但與朱子不同。又徒以為衰世不得止。而終不知古之尤不得不然也。物莫不有理。理莫不可窮。窮理而後知至。可以審是非。可以應天下之變。二典二謨皆是窮理。魯論鄒孟亦示此方。其所謂窮之云者。先窮其當先者。未必窮其不必者。此之謂窮也。後儒誤見。以一物不知為恥。蓋不知孔朱之意爾。仁齋徂徠亦不知孔朱之意。謂朱子之意如後儒所見。夫朱子之意猶未能通。宜乎其不能通古訓也。甚哉徂徠之似法然日蓮也。其言曰。天下錯諸陶鈞之中。聖人之道為然。故君子錯身于斯。藏焉脩焉息焉游焉。德慧術智於是乎出。博厚高明於焉而至。又曰彼謂窮天下之理謂窮一念之微。皆不知道之言也。故辨是非別淑慝疎淪澡雪剔扶以盡。不俾一毫人欲之存者皆非也。吁此何言也。吁此何言也。夫博文約禮即是陶鑄之業。藏脩息游則其業之節度爾。故孟子曰。必有事而勿正。心勿忘也。勿助長也。徂徠蓋惡助長之疾。而遂開不耘之途。茫茫悠悠待效自然。猶之念佛唱題得冥薰於自然之教。愚故曰似法然日蓮也。且夫先王之陶鈞。君子之博約。豈彼摘字綴句之謂耶。窮理察微此乃樞要。藏脩于斯。息游于斯。車輪鳥翼。相須而成。德慧出焉。高明至焉。然其偏倚玩愒。或恐德慧難出高明難至也。若彼茫茫悠悠不用窮理察微之功。則雖誦詩讀書。亦徒口耳四寸之學。德慧何以乎出。高明何以乎至。況又詞章之習。聲律之巧。不求養於反躬。可謂先王之教乎。從徂

徂之道。則不窮理。不察微。不辨是非。不別淑慝。昂昂揚揚弄文操觚。自贊毀他。肆心所欲。以委成德於其中。吾恐其說啓曲學阿世之門。授游蕩放侈之窟也。嗚呼危哉。

徂徠之教。特以詞藻爲先。又徒讀經史。不尙窮理。猶之漢魏六朝之學爾。六朝之儒。非不讀經。非不尊聖。而溺乎詞藻趨乎名聲。不知窮理。不能窒欲。故終身不能明道義。或放蕩。或凡庸。無一行可取。顧爲小人所使。終使入倫殆亡。國運漸蹙。吾國中世之學。亦多此風。文藝競興。街博爭華。婦人猶有涉經史者。然而淫風流行。異教滋蔓。遂至皇綱解紐海內大亂。前車之覆。可不戒哉。

徂徠謂。通鑑綱目歷詆百世。愚謂非也。史之直筆。左氏之言著矣。豈謂之歷詆哉。且夫溫公之著通鑑也。受王命而立筆。闡美懲惡。謹備鑒戒。蓋應人主之需。其作不得不如此。然其所記。一善莫不存。可謂厚矣。朱子綱目全據溫公。特編年提要。欲以其易見而已。若夫書法發明。則後學所資。而問或至苛刻。乃違朱子之意。此後學之謬見。故善知朱子者不必取也。大凡聖賢論人。將以垂教後世。非爲嘲弄訶斥也。善而不稱。則歆慕或薄。惡而不咎。則懲戒或緩。聖賢所以不得已也。若曰褒貶皆非歟。則孔子論人。不啻一二。徂徠以爲非乎。徂徠之說曰。以殊相映而後足以論其世也。則徂徠亦不免論人也。

學則曰。自秦以功令治天下。禮樂泯焉。申韓之道移人耳目。以至今日。長養之道漸。而殺伐之氣

塞宇宙。後賢人君子皆生其中。所以差也。愚謂。朱子則不差。徂徠之差也甚矣。朱子之言。溫厚恭遜。推己及人。其經解者。舉取至當。勉進後生。未嘗有妄罵先儒者。徂徠師心而自負。二辨論語徵開卷則罵宋儒。如聞爭鬪然。殺伐之氣孰大於此。噫申韓之餘習哉。愚嘗聞徂徠門之講關雎。未述文王之德。先訶朱子之傳。怒目切齒。如馬卒之罵馬。愚不忍聞。逡巡而退。嗚呼溫柔敦厚之教。變爲侮慢忿怒之具。何其差之甚也。

程子曰。學以至聖人之道也。又曰。後人未達。以爲聖本生知。非學所至。而以巧文麗辭爲工。其亦異於顏子所好矣。夫程朱之學至矣。其防邪說也盡矣。而徂徠不能通其說。故曰。人可皆爲聖人者非也。寧爲曲藝之士而不願爲道學先生。嗚呼徂徠之不知道也甚矣。孔子以來。孰名聖人。既無可名聖人者矣。則氣質難變。誰不知之。而程子曰學以至聖人之道也者。其知豈不如徂徠哉。必有故也。不可不思也。徂徠不之思。故不能信。後生亦不之思。故左袒于徂徠云爾。舜人也。我亦人也。唯聖人盡人道而已矣。是故孔子常述自所得。以示門人。又曰。我非生而知之。好古敏而求之者也。又曰。爲之不厭。教人不倦。夫孔子之自述。豈其自驕之意哉。將以使之學之。而又使之與我無異也。若其成否。則見諸既學之後。未嘗始待之以不能知己也。故顏子曰。舜何人也。予何人也。有爲者亦如是。程子以顏子之學爲至聖人之道。可謂知言矣。程子曰。聖人可學而至矣。而程子未嘗曰。僅學則至。又未嘗曰。學者必皆至也。氣有清濁。生有天壽。豈知必皆

至聖人哉。亦豈知必雖學而不至哉。成之與否。係於天命。天命不可得而測。若曰必不可為聖。曰必不能善學。則是已測天心。而自以為知天也。能測天心者。其唯聖人乎。聖人猶自謂天心不可測。而今斷然曰天心豈使之為聖人耶。則是彼自測天心也。徂徠雖有才矣。非聖人也。苟非聖人而測天心。可不謂僭妄乎。後生不察。尤而效之。曰吾測天心矣。我不能為聖人矣。人亦不能為聖人矣。悠悠度日可也。無天無聖。莫大之罪。上帝之譴其可免乎。

辨道曰。夫道先王之道也。思孟而後。降為儒家者流。乃始與百家爭衡。可謂自小已。愚謂非也。天使思孟在王佐之位。則何為儒家者流。又何與百家爭衡。既不能然。而王道如綴旒。於是乎謹誦而傳之。以俟天下後世。乃不得不為儒家。百家蓋起。欲亂先王之道。乃不得不爭衡。時有思孟。人文斯存。微思孟吾其馬牛乎。大哉思孟之功也。謂之自小者。訛言爾。

又排仁齋曰。先王之道。降為儒家者流。斯有思孟。則復有朱陸。朱陸不已。復樹一黨。益益益小。豈不悲乎。愚讀之不覺大笑。先王之時。猶設造言亂民之刑。孔孟之時。有楊朱墨翟。朱子之時。有陸子靜陳同甫。今吾邦有仁齋徂徠。此正而彼邪。此中而彼偏。中正偏邪各以類分。自然之勢為然。分雖千百。中正巍然。但憂豪士之眩惑。君子所以辨也。故君子不患有黨。忠黨之不正。徂徠不悲黨之不正。而悲樹黨之自小。固已愚矣。且悲他人之樹黨。而復自樹一黨。僅與仁齋爭衡。何不自悲而悲人也。

又曰。子思孟子與老子抗者也。愚謂此亦夢受思孟之口訣欺。何為其言之無證也。思孟之時。楊墨為盛。觀於孟子而可見矣。老子之教。至漢而著。思孟之語。無一斥言老子者。但老子亦楊氏之屬。而思孟之辨楊墨者。自足以斥老子。且聖賢立言。豈必為一時一人哉。直指正道邪徑自著。今徂徠輒言斥老子。無證無稽。意自取之也。徂徠動則貶程朱。曰意自取諸理。而其自立說。則意自取之。何哉。

又曰。古之時。作者謂之聖。而孔子非作者。故中庸以至誠為聖人之德。愚謂非也。作者謂之聖。戴記言之。但未嘗曰不作則非聖也。作非聖人則不能。故有此言。豈為不作則非聖人哉。若果為不作則非聖人。則子貢何以有夫子聖矣乎之問。孔子亦何不答以不作。而曰若聖與仁吾豈敢也。且推徂徠之說。則孔子亦非聖人矣。甚哉徂徠之無忌憚也。

又曰。率性之謂道。子思之本意亦謂聖人率人性以立道云爾。非謂人人率性自然皆合于道也。杞柳之喻。告子盡之。它木不可為杞柳。則杞柳之性有杞柳。雖然杞柳豈杞柳之自然乎。愚謂非也。既曰率性之謂道。不曰率性而立之謂道。率性之為道明矣。徂徠所言乃自所謂遷就以成己意也。其曰非謂人人率性自然皆合于道者。蓋斥朱解之非云。然朱子之解。則曰率性即是道。非曰合于道也。徂徠不達朱解。往往如是。朱解猶未達。何知孔子之意哉。告子之言。以杞柳喻性。以杞柳喻仁義。非以杞柳之性喻人之性也。以為戕賊杞柳而後以成杞柳。乃是戕賊人性而後以為仁

義也。故孟子辨之云云。而告子不能答。此則告子之意。的如孟子所察爾。栝樵之爲物。待戕賊而後成。其可以爲栝樵者。固是杞柳之所有。非悖戾其所有也。匠人截而曲之。乃充其所有而已。仁人義士亦充其所有。豈有戕賊其性耶。若使告子以杞柳之性喻人之性。則孟子何必曰云云。而告子亦何默默乎。徂徠之於孟子。文義猶未能通。宜矣不知孔孟之意也。

又曰。惻隱羞惡皆明仁義本於性耳。其實。惻隱不足以盡仁而羞惡未必義者。愚謂。惻隱不足以盡仁羞惡未必義者。朱門之童亦知之矣。然孟子立論。專明仁義之爲性。若徂徠所言。則以仁義爲入意所造。就利避害之術而非天命之當然也。苟充徂徠之說。則蓋曰不仁不義固非悖於天心。其行仁義者。徒爲求利免害而已。若仁義而有害無利。則不必好仁行義。不仁不義而有利無害。則亦不必惡不仁不義也。此不唯非先王孔子之教。雖申韓蘇張亦憚言之矣。故愚嘗曰。彼人不唯先王孔子之罪人而已。申不害韓非蘇秦張儀之罪人也。且夫不仁不義。後必有害無利。仁義之終有利無害者。乃是從天與否之驗而已矣。仁義之爲天命。不亦昭昭乎。思孟之言。不偏不倚。程子得不傳之緒。亦特思孟之大功。而彼見以爲偏。以程朱爲非孔子之意。用心不正。毫釐千里。新學之成。胎胎于此。可懼矣夫。

又曰。及于唐韓愈出。文章大變。自此而後。程朱諸公不識古文辭。是以不能讀六經而知之。獨喜中庸孟子易讀也。遂以其與外人爭者爲聖人之道本然。又以今文視古文而昧乎其物。物與名離。

而義理孤行。於是乎先王孔子教法不可復見矣。愚謂非也。彼所謂古文辭者。六經及周末戰國文字爾。韓愈以後。文章一變。而古文辭則巍然存焉。程朱之於六經。終身盡心。旁及周末戰國文字。莫不徧讀審考。文章之變。古言今言之異。亦固能知而詳盡之。何曰不識古文辭哉。何曰不能讀六經而知之哉。何獨喜中庸孟子哉。何以與外人爭者爲聖人之道哉。何以今文視古文哉。何使物與名離而義理孤行哉。徂徠以天下之人爲無目乎。天下之有目者善讀程朱全書。則徂徠之誣明矣。特徂徠無目而然歟。抑將以蔽天下之目歟。或曰。程朱語人。必是時俗之語。經解雜著皆用當時之文何也。曰將以便於當時也。以今言解古言而示古教於今人。以古言如今言而入今人於古教。猶之以和語譯漢文而示聖訓於和人。以漢文如和語而入和人於聖教也。其以古跡今也至矣。故能移諸今言而不有差。不昧乎物也至矣。故物與名合而義理與物共行。於是乎先王孔子之教粲然復明于世。徂徠喜明文斧鑿奇澁。以爲真古文辭。不知古文之真不必奇澁。又以自己所見遷就成義。遂惡中庸孟子之難遷就。強生與外人爭之議。以廢黜之。以其自以爲古者爲真古。不能以真古跡古。名與物睽。義與古殊。於是乎先王孔子之教暗。而終陷乎商鞅李斯之流矣。推其所因。則浮淺之識詞藻之僻。互爲其惑。而自不知爲惑也。噫。或又曰。程朱未脩古文辭。故不能得古訓。必也脩古文辭如元美于鱗而後推之六經。可以得古訓也。曰不然。孔子生于衰周。去虞夏殆二千年。虞夏之辭。蓋多與衰周殊。若果擬作古文而後可通古義。則孔子必當使門人先執刀筆以擬

作古文。而今讀孔門之辭。全然當時之文。未嘗見擬作虞夏者。孔子豈不若徂徠哉。且夫程朱之於古文。非不識其體勢也。非不識其與今文殊也。泛考徂徠。神其通之。何必摸擬剽竊而後可以得古義哉。彼曰脩古文辭而後古訓可得者。孩兒之論而已。

又曰。孔子之道。先王之道也。故近世有謂先王孔子其教殊者。非也。愚謂。此蓋斥仁齋之說。仁齋固非。而徂徠亦非也。殷因夏禮。周因殷禮。而其間不能無損益。孔子曰。吾從周。而其告顏子。則曰。夏時殷幣周冕韶舞。且夫先王者。居上而教天下。孔子則居下而導門人。其勢不得不殊。又其不能盡教天下。則將傳之後世。是故。說不得不長。義不得不詳。門人謹而錄之。開入德之門。名曰論語。後世可以受古教者。於是乎備焉。時運之使然。豈得不有殊耶。先王之教止於四術。孔子加以周易春秋。亦可以見孔子之意矣。秦火以來。六經殘缺。所以興於斯者。則失其聲調。所以立於斯者。則十存其一。所以成於斯者。則無復可求。加之清淨寂滅之說。功利聲名之俗。去古益遠。則失意益多。離正益久。則異端益熾。方此之時。程朱生。四書新注。近思成錄。所以立本導志。豈可得而止耶。徂徠不之信。視先王之教。如死物然。故上之論孔子。則以為一欵一聳悉摸先王。如俳優之學劇。下之論朱子。則以為新注新錄不與三代同辭。蓋古言而古服乎。充其所論。則以聖教列諸伎藝。為之亦可。不為亦可。嗚呼。率天下之人而禍吾道者。必彼之言。夫徂徠以宋學為無益有害。其言曰。思孟而後。儒家者流立焉。乃以尊師道為務。安

意聖人可學而至矣。己為聖人。則舉而措諸天下自然治矣。是老莊內聖外王之說。輕外而歸重於內。大非先王孔子之舊也。故儒者處焉不能教育弟子以成其材。出焉不能陶鑄國家以成其俗。所以不能免於有體無用之誚者。亦其所以為道者有差故也。愚謂非也。先王之尊師道。禮說備焉。非肇於思孟也。先王以安天下為心。其教亦安天下之術爾。學安天下之術以得安天下之用。是之謂聖人可學而至矣。乃舉而措諸天下。天下可得而治矣。所謂舉而措之者。教禮樂施仁義。自邇及遠。無所不用其極。豈謂拱手默坐如茅山道士哉。夫如是。故其與內聖外王之意不唯天淵之殊也。又思孟之言未嘗曰天下自然治。彼曰自然云者。誣之甚矣。儒之不能教育陶鑄者。蓋有之矣。善學思孟。則不如此也。材有穎鈍。位有高卑。然皆隨分補國。故曰。過則聖。及則賢。不及則亦不失於令名矣。今徂徠所譏者。末流之誤。若以末流歸罪師門。則吳起李斯皆為孔門末流。其黷武焚書。謂之孔子之罪。而可乎。且徂徠自以為得先王之道。而其信從之士。多放蕩傲慢。與晉末明季之士同轍。未嘗聞有教育陶鑄之功者。愚未及聞歟。抑真不能教育以成材歟。

徂徠解道字。乃秦漢老莊之謬見。非先王孔子之義也。何也。其言曰。道者統名也。舉禮樂刑政凡先王所建者。合而命之也。宋儒訓道為事物當行之理。坐不識道為統名故耳。又曰。先王之道。先王所造也。非天地自然之道也。謬哉徂徠之言也。夫古經言道字者至少。其有道字。多是道路之道。至於論語。則道字居多。而皆未嘗有解其義者。但說卦有曰立人之道曰仁與義爾。子思之著

中庸也。卷首曰率性之謂道。道字之訓始明。而全篇詳說之。孟子之書。其說愈備。使天下後世不迷於亂名之說。思孟之功高矣。千載之後。舍之焉往。朱子善知思孟之意。解曰。當行之路。蓋提思孟所述之要者。而推之六經論語。無所不通。則周孔復生。不易其言矣。聖人脩事物當行之路。以立禮樂典章。禮樂典章道之顯者也。故子貢指禮樂稱道。子游亦以絃歌為學道。其為事物當行之路。於是乎愈明矣。徂徠不信朱解。訓曰統名。且曰先王所造。考之古經。既無此訓。稽之文理。又不必然。唯老莊之書。似以禮樂為儒者之所道。戰國諸子西漢諸儒亦多似為此義。愚故曰。徂徠之解。乃老莊秦漢之謬見。非先王孔子之意也。彼好讀老莊史傳。目觸心移。臆見乃熟。遂施於六經論語。自覺似有所通。苟有不合。遷就成義。習玩之久。日見其趣。自負以為孔子沒後唯我一人而已。傲哉傲哉。

辨道曰。宋儒訓道為事物當行之理。是其格物窮理之學。欲使學者以己意求夫當行之理於事物。而以此造禮樂刑政焉。夫先王者聖人也。人人而欲操先王之權。非僭則妄。亦不自揣之甚。愚謂非也。先王定禮樂刑政。後王後民謹而守之。然其所以謹守者。必知所以定之之義。然後可以得其意而全其道矣。故求夫當行之理者。將以守之也。非必為造之也。何曰之僭乎。小學受禮樂之教。粗知其理。及入大學。因其已知之理而窮之。非以己意求之也。求而得之。然後謹而守之也。何曰之妄乎。自知理之可求。故即物而窮之。天壽不貳。以俟天命。何曰不自揣乎。且夫

禮曰。禮從宜。又曰。可以義起。夫先王之制雖極縝密。非盡天下萬變之方。故有從宜義起之訓。而苟不知事物之理。則何以可得從宜義起哉。况世降教衰。風俗頹敗。先王之制。難行于今。時王之治。茫無定準。方此之時。必窮理以從宜。不失先王之意。此亦不得已之方。雖徂徠不能免此。何其弗思之甚也。

又曰。仁者養之道也。故治國家之道舉直錯諸枉。能使枉者直矣。脩身之道亦養其善而惡自消矣。先王之道之術也。後世儒者不識先王之道。迺逞其私智。以謂為善而去惡擴天理而遏人欲也。此見一立。世非唐虞。人非聖人。必惡多而善少。則殺氣塞天地矣。故通鑑之於治國。性理之於修身。人與我皆不勝其苛刻焉。遂使人謂儒者喜攻人。豈不悲哉。大氏商鞅之後。不啻朝廷雖庠序亦用其法。宜其不及三代矣。愚謂。此敷衍學則之說。前既粗辨之矣。夫孔子所謂舉直錯諸枉者。是立其本云爾。及其答顏淵。則曰放鄭聲。遠佞人。非不惡惡也。又答季康子曰。子欲善而民善矣。此亦立本之訓。以戒先殺之意。豈欲使之折鞭朴墮圍土哉。舜選於衆而舉皋陶。不仁者遠矣。皋陶刑官。非捨刑也。刑期於無刑而已。徂徠不識先王之道。迺逞其私智。見舉直之為仁。而不察於懲惡之助仁。猶老婆之愛幼孫。亦是庸醫懼瀉劑。偏施參芪。終不知其害之大甚也。脩身之術。亦何為善而已哉。虞舜之為聖。孰其不知之。然而大禹戒之曰。無若丹朱傲。惟慢遊是好。敖虐是為。皋陶賡歌曰。元首叢脞哉。股肱惰哉。萬事墮哉。此先王之道也。故程朱之訓。

必曰爲善而去惡。必曰擴天理而遏人欲。其先曰爲善。先曰擴天理。養善之爲本既明矣。而次之曰去惡。曰遏人欲。則不徒恃其本而忽之也。明道先生爲縣令。以視民如傷爲志。徂徠所謂養善而惡自銷者。亦是程子之言。而立本之謂也。其曰兵謀師律亦當講明。曰足不履非禮之地。則不徒恃其本之謂也。善識先王之道者。非程朱而誰也。徂徠偏養其善以待惡之自消。此則前所謂念佛之見。不唯不能消其惡。而願長之矣。豈曰之先王之道哉。通鑑之編。承王命以選焉。即是皇陶庶歌之意也。若夫性理之說。則使入立志篤信。和氣浹洽。何其苛刻之有。以此爲苛。則尙書論語確乎警戒。亦以爲苛刻乎。其使世人謂儒者喜攻人者。陋儒之謬。非真儒所爲也。且徂徠忌苛刻如此。而二辨一徵。國字答問。皆罵言先賢。聘盼世儒。使讀者怒目攘肩如前所言。何其苛刻之甚。而喜攻人也。商鞅之法。徂徠當自革焉。

辨道卷末章曰。古今邈矣。六經殘缺。要不得不以理推之。以理推之者。宋儒爲之嚆矢矣。祇其理之未精也。是以滯乎理。精之又精之。豈有宋儒及諸家之過哉。愚讀至此。未嘗不喟然大息也。嗚呼朱子窮理之教。原乎天而存乎人者。於是乎亦可見矣。徂徠此說雖出於遁辭。然窮而反本之端。使明師良友導諸少壯之日。精又精之。亦復精之。則焉不得知程朱之未嘗有誤耶。徂徠之爲人也所長者五焉。文巧矣。詩麗矣。譯明矣。立論不迂矣。讀書不少矣。然其脩辭擬古之好。徒備玩娛不足時用。故其述志。則多用今文。或以國字記之。詩亦泥於王李。未能得盛唐之調。

況於聖代之音乎。譯雖如審。而師心自用。強辨誣人多矣。至於經義。則肆其胸臆。以此爲孔子之真。不知燕石之取笑。但使陋儒囁嚅俗吏驚歎而已。其論務悅人。故流於術數。學好雜博。故終不能窮其精。世之非徂徠者。徒責其短而不顧所長。則已過矣。而黃口之兒。不能深察其弊。喜其文詞之巧麗也。效顰而自飾。喜其訓譯之易通也。偏信而不知所誤。喜其論之不迂也。陷于申韓而無慮。喜其學之博也。爲之所欺而不疑。遂仰之如太山北斗。適聞識者之駁。則怫然曰此妬疾爾。又或好自用者。則陽非而陰服。廢一而取九。終不知其害甚於洪水猛獸也。此所謂以其小者信其大者。弗思之甚矣。哀哉。

徂徠初作護園隨筆。左袒朱子。仁齋初信朱子。論著存於文集。世人因謂二子初熟朱學。然後立一門戶。其說可信也。愚謂二子徒讀朱子之書。未嘗知朱子之意。觀於隨筆文集而可見矣。其言強辨求勝。街名而已。宜哉終生妄見也。或謂徂徠譯筌善解文字。以是推之。則辨名之說可信也。愚謂不然。辨名強辨。譯筌爲之嚆矢。師心自用。駭乳臭之士。宿疾萌于譯筌。而成于二辨爾。世人多言徂徠是人傑。仁齋亦忠信人。之二子者。何莫所得。若無所得。則何以動海內乎。朱子固是豪傑。然而非聖人也。豈不無謬誤耶。愚謂不然。若以動海內信之。則釋迦之勝於孔子也大矣。豈有此理哉。愚讀二子書。幾絕韋編。然其可取者。瑣瑣訓詁。而亦明儒之餘唾而已。間有格論。皆是程朱既言之。而二子勦說者也。其不可取者。苟非無用之辨。必是亂名害心。如鄭聲佞人然。

又其誹朱子者。皆不通其說而詰之。未嘗有一句禦我者。是英雄欺人。亦是一盲牽衆盲也。朱子之訓。溫厚明暢。無一可疑。若其有疑。未得其意故爾。虛其心。平其氣。姑闕所疑。精思歷年。然後當知吾言之不欺也。

小學入道之門也。故朱子輯其遺法而解之。其解易簡。務養德性。四書窮理之器也。故朱子之解精察的確。分別纖微。仁齋徂徠不之信。其解語孟。務爲卑淺。使最上至極之教。徒爲童蒙養正之用。小大之分不明。遂生邪說。悲哉。

朱子之解。溫而密。闕疑以言其餘。不以人廢言。其於舊註。隱惡而揚善。務示受用之途。求效於警戒之際。仁齋徂徠則反于此。訐以爲直。自用不疑。蔑視先儒。仇讎何殊。吹毛求疵。務爭堅白。若其受用之途。不必盡其言。徂徠則謂弄經操觚自然有效也。是以。朱門善學者。用力於勉行。盡心於明道。二子之流。用力於操觚。盡心於謗人。是非得失。人人當自擇焉。

仁齋之學。欲以古語曉古教。不欲以今言換之。故斥程朱曰。古無此名。曰古無此語。非古教也。又斥程朱推原之解曰。設有此義。猶頭上置頭耳。徂徠務稱古文辭。亦砥其唾者也。夫古言之存。不必竭一世之名。古書之記。不必悉一時之論。安知今言之古必無之哉。設令古無此名。又無此語。後世肇造之。苟足以明聖旨。則亦爲古教矣。解經之方。曉義爲要。而古今言異。故當以今言曉之。物不推其所由。則入心不深。而信之不篤。況其世降材鈍。加以異教薰耳乎。

故程朱之解。必推其所由。至于論道。則窮其本原。是以信篤而學進。先王之教可行于當世矣。若夫漢唐諸儒。則徒拘名物。不能精義。此所以正學衰而異言盛也。但漢唐所以如此者。力不足而然。仁齋徂徠。則是廢其精。復其淺。好簡之士。靡然雲從。觀義日粗。信道日薄。其初雖未必輕聖教。而漸陷于詞章記誦。以取玩娛。以資名利而已。不啻無益于世教。而弛綱蔑倫之萌生焉。可不畏哉。

仁齋徂徠之說。近而易曉。又舉古書爲證。多多益辨。淺劣之士喜簡愛奇。且不知其證之爲遷就。遽信異說。以爲孔門之真。終不能覺彼與我質合。而實非孔門之真也。猶彼庸君唯悅庸人之論。不信賢臣之諫。終失國家而不自悟爾。又其門兼習詞章。且不貴精義察微。徂徠則以詞章爲先務。是故好名之士足以適情悅目。厭煩之徒無有苦思慙德之勞。用力不多。而華辭可以飾外。讀書不審。而大言可以駭俗。此所以靡然信從。信從愈多。則世人愈信焉。夫諛言易聽。諫言難通。豈必以易通爲是耶。君子難近。小人易狎。豈必以易近爲是耶。聖人之言。淺而深。簡而精。就淺以知深。就簡以知精。斯爲得之矣。豈必徒以淺且簡者爲古人之教哉。朱解精密發揮微指。使讀者得其意。非加本文所無者。徂徠仁齋見以爲添蛇足。不知本自有之也。朱子之教。用心於內。將以立本。實是孔子之訓。徂徠仁齋見以爲微佛氏。不知聖教本然也。蘭蕙難蕃。稊稗易生。何必以易生爲美。珠玉難拾。瓦礫易得。不必以易得爲貴。淫聲之快耳。孰若古樂之淡淡。箕踞之肆

體。孰若百拜之役役。街談之速通。孰若典謨之玄玄。大氏速通而易悅者。非妄論則邪說。忽快而適情者。非閑事則暴行。世人多以速通忽快為是。何其好危之甚也。朱子所導。如難速通而終無不通。如難適情。而終無不適。故曰。久自得之非偶然也。若其厭煩好華。欲以徒備玩娛者。末如之何也已矣。

徂徠之教。以信聖為先。其意則美矣。然其為學不欲知其所以當信。則何異於老婆之信彌陀哉。又以詞章為入學之門。謂學古文辭而後古言可通。此所謂巧言亂德者。其非既辨于前矣。或曰。詩者言志之技。文則載道之器。君子固不棄也。新學小生樂而玩之。可以記字。可以析義。豈不資經業耶。曰非也。讀書日久。口耳竝熟。然後聊用其心。足以言志載道。何必巧麗之貴。苟以此為先務。則不啻廢光陰。使其氣浮高。懶於精義。或為放曠之士。或其學陷于淺陋。加之鋪叙之巧。筆飾邪說。以惑後人。故古人有言曰。文人無行。信矣哉。二子淺陋。本文僻之所生。而其亂名惑世。亦是文才為之資。詞章之蔽。可不懼乎。

徂徠仁齋之徒。開口則曰。朱子嘗學釋氏。故其教歸于佛見。愚謂非也。朱子嘗學釋教矣。終知其非而棄之。以其審知佛教。故其辨之也確。其擇之也精。是以佛氏不能遁責。遂強以竊佛教為口實。卑陋姦曲。不堪捧腹。宋元佛氏之書可見。而朱子語類所載笑佛氏之屈者若干條。可謂明證矣。仁齋徂徠不之知。啜佛氏之餘唾。斥朱子以佛見。後生信之。以為卓見。不亦蒙昧之甚乎。

朱子經解間有引佛語者。斷章取義。足以發經。與孔子取滄浪之歌同意。又有成語似禪錄者。固是宋世俗語爾。或直舉禪話者。亦斷章取義。開發吾道。皆非竊佛教也。何以謂之歸佛見乎。設使朱子或做佛教。或由學佛而得之。苟能明孔子之道。得脩身治人之方。適足以為大幸。豈傷乎聖教哉。若或辭摸詩書。貌似舜禹。而大失聖意。不宜於時。無益於治。則其害均乎佛老矣。徂徠好讀老莊。又使門人讀之。其言曰。不求諸道而求之辭。譬諸使人遊倡家。乃曰唯視女容。勿溺艷色。雖欲不溺。其可得乎。程朱前學佛而廢之。又使人廢之。徂徠則終身讀老莊。又使人讀之。程朱僅取其三五句。徂徠則左右欲求之辭。就是孰非。識者當詳思之。

世載言以遷。何啻世世不同。一時人人或殊。郵書燕說自古而然。不然。則周公何勞著爾雅。又何苦立亂名之刑。道德之名孔老同時。而其義天淵。道德猶異其義。則其他有異者可知也。故以老莊之名義。移之孔門之所稱。則不陷為老莊者鮮矣。老莊之非。以亂名為最重。原其所謬。則由不知名始。徂徠賴老莊之名義。以移之孔子所言。其曰合于孔子者。徂徠臆見相合而已。豈若朱子以聖言證聖言哉。老莊之教。一變為刑名家。徂徠之說。亦歸刑名。荀子雜信老子。故有性惡之論。一變為李斯。焚書坑儒。徂徠左袒荀子不非焚書。亦其臆見所合也。愚嘗與徂徠高弟交。其言曰。周公蓋焚書矣。李斯何非。又曰。苟得吾志。當行聖人之道。其未得志。以莊子處身可也。愚問其說所因。則曰吾師之言也。愚於是乎愈信其為老莊所害。浸潤之毒深矣哉。

徂徠之徒曰。朱子之教出自佛老。以其相近故深忌之。吾師真是古學。不與佛老相近。故容之而不忌。愚曰非也。珉球美玉相似。不以相似為同。亦不以為美玉之瑕。佛氏之言近理而亂真。不得不辨而闢之。近則近矣。而此真彼亂。其近云者。何以為出自之證乎。徂徠之說甚不近理。不啻異於朱子。不能近於佛氏。譬諸瓦礫。不啻異於美玉。不能近於珉球。然推求其旨歸。則顧有與佛氏同。不啻近似也。佛氏謂孔釋竝立。未嘗相害。徂徠之意亦然。佛氏謂佛智不測。唯當仰信。徂徠亦曰。聖人不可及。唯強勸以仰信。佛氏謂誦經稱名。身心自正。徂徠亦曰。脩辭涉書自然成材。佛氏謂天竺世界之中。故佛特生天竺。徂徠亦曰。東海不出聖人。西海不出聖人。佛氏謂末世比丘唯傳佛說耳。徂徠亦曰。唯守章句傳諸後世而已。若悉舉其相似。則易燭而不盡。宜乎彼之不忘佛也。

仁齋辨大學以為非孔氏遺書。綱齋先生作辨大學辨。仁齋之非著矣。以此推之。則其教法經解之謬。不待辨而可知也。徂徠解大學曰。此大學養老之義也。夫養老者。學中之一事。若實為養老之義。則篇首當曰養老之道。何以曰大學之道乎。又以三綱領為養老求效之目。視三在字。猶去聲為字也。夫在也者。體當存守之謂也。故凡曰在某者。皆施實功之地。未有為去聲為字之義。下文在格物三字。以用力於格物言之。徂徠所解。不得不然。彼以知字鳴。而此解似不知字。蓋其疎妄。欲立新義。故眩瞶不自覺耳。又解中庸曰。中庸其至矣乎。言中庸非至極也。此解猶

狂人之言。中庸下文曰。父母其順矣乎。言順也。非曰不順也。又曰。鬼神之為德其盛矣乎。言盛也。非曰不盛也。然則所謂其至矣乎者。亦言至也。非曰不至也。凡徂徠之說。疎妄無稽。牽強矛盾。其解與論皆此之類也。好奇之士。喜新愛巧。心或知非。而口強為之辭。不亦愚乎。徂徠春臺務言經濟。政談經濟錄行于世間。愚者喜之。以為善言治者。其說多勦說熊澤氏書。適所自述者。卑拙甚於熊澤氏矣。要之王莽崔浩之流。加以申韓孫吳。泥於復古。不知時勢。徒為紙上之談。不可施于國家。施則可以招亂矣。士著一條猶不可行。况其它乎。世之諸侯聰明有識。無一人行其說者。可謂大幸矣。

海內之士。多為徂徠所動。亦好輕言經濟。且以讀左國史漢為急。夫左國史漢。玉石相混。茫然讀之。則人人得其性之所好。好權謀者長機心。好隱逸者長遁志。好功利者道義由此而消。好放蕩者警戒由此而衰。如此之害。不可枚舉。設其知安民強國之術。亦是管晏蘇張所為。施諸政事。足以取災而已。一犬吠虛。萬犬應之。時運如此。不亦悲乎。必也小學家禮以養其德。四書六經近思錄以成其業。脩齊之功粗得端緒。然後涉左國史漢及歷史諸子。則言行之是非可得而辨。經濟之義利可得而別。而安民之方亦將得其效焉。苟有志而迷塗者。速求朱門之明哲。以從其所指授。虛心平氣。潛玩朱書。則諸家之非可迎刃而解矣。不必勞筆頭舌端也。

跋非徂徠學

非徂徠學成篇。或問曰。君子無所爭。汝似好爭何也。愚曰。君子固不爭。其惡而辨則有之。子曰。惡似而非者。非有惡歟。又曰。佞人殆。非有辨歟。朱學得孔子之意。詳而古。精而簡。苟不得其門。則宮室百官不可得而窺焉。仁齋徂徠妄斥朱子自稱古學。實是新義。其似而非。猶紫之奪朱。駭俗悅愚。不唯佞人也。苟慕君子之行者。可不惡且辨乎。仁齋之非。則綱齋先生既辨之矣。徂徠之妄。愚不得默也。問者唯唯而退。因書諸卷尾云

維安

明和二年乙酉秋八月發行

尾陽書舖

名古屋本町

花井勘右衛門

堀川高辻上ル町

植村藤右衛門

寺町四條下ル町

植村藤次郎

京師書舖

江戸本石町十軒店

植村藤三郎

辯道解蔽

小倉 石川 正 恒 著

余讀物子辯道。至道非天地自然。廢書而嘆曰。必此言也。令天下視道如綴旒。視禮如桎梏矣。夫時非三代。地非鄒魯。禮樂之化。邈乎負矣。所賴降衷之有恒。古今不移。無有遠邇。是以上則揭示忠孝和睦以導民。下則信義相勵以成俗。讜直剴切之言。猶得藉之以陳於人主之前。雖有愚民狂夫。莫不有敬道之心矣。天下厭厭然皆以爲人道自然。不可得而遁。豈復議其所自來哉。苟民之有此心。爲君師爲父兄者。宜當導之如泉源。養之如萌芽矣。物子則是之不惜也。斷然以制作蔽道。因唱於世曰。道非自然也。嗚呼此言之行也。人將生心以疑於降衷。而後忠孝信義之屬。一世所以相維持。咸皆動搖。而禮樂之化。其邈自若。則君臣上下。將何所持循而脩己而治人乎。宜哉吾滄洲先生懼而戒之也。曰如斯出話。後將不勝其弊。嗟爾小子無爲喜新棄故。於今念之。懷戚戚如新有聞。雖然夫物子豈徒而然哉。蓋有所憤矣。憤生激。激生蔽。勢之不足怪也。與其憤。平其激。解其蔽。欲以反諸常古。懷之不能已也。作辯道解蔽。

道難知。亦難言。為其大故也。後世儒者。各道所見。皆一端也。

辯道之始。而稱其難知且言。辭亦厚矣。然據其作道之說而言之。道無難知之情。亦無難言之形。何者。制作之所起。體統雖大。必有其跡也。所見一端之言。亦似非其本旨。何者。其於思孟。則曰抗老子。與外人爭。未嘗斥其所見止於一端也。於程朱則曰非先王孔子之舊。未嘗稱其能得一端也。蓋著書已成。自覺言之率易。乃製是數言。以存博大之意焉爾。不然。則其於下文。何語勢之不相接也。覽者思諸。

夫道先王之道也。止可謂自小已。

王者不作。處士橫議。邪說汎濫。莫之能遏。仁人君子坐視之不忍。辭而距之。以閑先聖之道。是彼此之所以形。而辯言之所以出也。世道之變。誠可嘆息。今不悲可悲。而咎之以自小。苛矣哉。

觀夫子思作中庸。止是以其言終歸於誠焉。

仲尼沒而微言絕。七十子喪而大義乖。自夫子在時。子路已問死問鬼神。子貢稱性與天道不可得聞。則一再傳後。思馳高遠。各夸其所見。強聒不舍。亦可知矣。當是時。子思所憂。何獨老子之學。朱子序中庸曰。去聖遠而異端起矣。子思懼夫久而愈失其真也。言如是足矣。物子必以老子當之。所謂以分異為高者也。故率性之言。非抗老子也。正道之名也。道之名一正於

此。而衆邪自見於彼。過高者可由以裁。流蕩者可由以復。卑屈畏懦者可由以自振。譬之縣權衡以待輕重。固不為一物而設也。且抗者不當敵之辭也。用之於老子。何其視子思之汚也。終歸者不圖於始之辭也。施之於誠。誠之於中庸也。至重至大。豈得謂之勢之所移。不圖而至焉哉。

中庸者德行之名也。止遂以中庸之道者誤矣。

中庸之為德。論語有明文亡論。物子蓋以為道者先王所立。無待於後人之擇。夫中庸者德而非道。故得曰擇也。然所謂思道望道云者。擇焉之意。隱然可見。則道豈不可得稱擇焉哉。既曰子思借以明道。則鄭注因以為道。又何病焉。

古之時作者之謂聖。止豈足以盡之哉。

聖稱其德也。非以制作也。尚書乃聖乃神。求元聖。論語聖者與。必也聖。若聖與仁。聖人吾不得而見之。及左氏聖達節。焉用聖人。惟聖人能外內無患之類。可見矣。夫作者之謂聖。述者之謂明者。因其成稱以等述作之功已。非以述作訓明聖也。明聖者述作之謂者。反覆贊嘆。專美於述作也。又白虎通所謂作八卦。作易。神農氏及黃帝堯舜氏作。文俱言作。明皆聖人也者。似可證於物子之言。然是以其能作而知為聖也。非待有作而後命聖之名也。今謂孔子非作者。不合稱聖。既昧古義。亦不通樂記之旨矣。若夫至誠三重。各有其旨。一切以為解嘲語。豈可

乎哉。誠之不足盡聖德。或如其言。然中庸之說誠。如彼其盛。則何慊以之語聖人也。至於孟子性善。亦子思之流也。止。雖然栢椹豈杞柳之自然乎。性道教之義。本自明白。物子創作道之說。又忌作曰立。從而爲子思之本意。是矯誣之也。不則脩道之教。架屋屋耳。故其解中庸。說至脩道而苦矣。仁義人性之自然。栢椹非杞柳之自然。孟子所以非其喻也。人倫之至。聖人也已。聖人豈待矯揉如杞柳然哉。是以知杞柳之喻果非矣。

惻隱羞惡皆明仁義本於性耳。止。荀子者思孟之忠臣也。

孟子明言惻隱羞惡仁義之端也。其不足以盡仁義。人誰不知之。而待物子之言哉。一偏之謂。不知何所指也。荀子之非思孟。以聞見雜博造說五行。然五行之稱。已出尙書。而中庸孟子之書。反不見之。則造說者不可詳何謂。它如誠也。心也。惻隱羞惡也。荀子未嘗非之。不啻不非之。亦數稱誠與心。曰養心莫善于誠。曰誠心生神。曰人何以知道。曰心。心何以知。曰虛一而靜。曰主其心而慎治之。因此言之。則荀子非之者。又不知何所指也。

然當是時。止。文章大變

凡文章之變。訛勢爲甚。賞訓錫賚。撫訓執握。六朝之際。成俗靡靡。獨以大變斥韓愈。非通論也。齊令愈不出。而俳儷之習無革。詭巧之風未殄。則後世果能率由古言。不愆其義乎。

自此而後程朱諸公。止。先王孔子教法不可復見矣。

程朱諸公。亦有所不同。伯子以才敏。叔子以氣高。每逢獨得之見。輒引古以殉己。超然有不可羈焉者。物子見其如是。以爲不識古文辭故也。雖言不得其情。尙有所諉之。朱子則博習而謹嚴。言必稽。事必徵。如註詩易。其度越前古炤矣。謂之不識古文辭。不能讀六經而知之。不亦近誣乎。六經非皆難讀。而戴記諸篇。及它古書。易讀者猶多矣。謂之獨喜中庸孟子易讀而可哉。物子解中庸曰。戴記諸篇。所言皆不過一端。而唯此書體統甚大。莫不包括。此非不知中庸可貴。而獨負程朱以喜易讀之名。雖曰非毀。吾弗信也。與外人爭。辯見于下。義理孤行。未舉其實。不必論焉。

近歲伊氏亦豪傑。頗窺其似焉者。止。我讀其所爲古義者。豈古哉。

伊子之言曰。孔子之學。即堯舜文武治天下之道。外此而豈有所謂學問者邪。其不岐而二之也明矣。論六經曰。從之則存。悖之則亡。世有孔子。自當有論語。若六經。雖孔子亦不能作。其不黜六經也亦明矣。如令其它日所議。辭氣抑揚之間。有道岐爲二。六經自紉之勢。則從而舉其失以救之可也。安得以公然與黜一切病之也。

吁嗟先王之道降爲儒家者流。止。六經可得而言焉。

學有因入。思有時契。方其躍如也。舞劍可以悟書法。此物子所以有得於二家也。若爲不然。

則二家之書。豈足以語天之寵靈哉。吠聲之徒。謂王李之學可以適道。亦田父之守株也。
 六經其物也。止。是韓柳程朱以後之失也。
 孔門問答。固不應與六經異旨。然論語之為書。非為釋六經之義而錄之。則其言何必待一一相
 屬而後明焉。故取於其無異旨。充類而曰其義也。可矣。至於併諸禮記。以謂不可獨取其義。
 則過矣。

子五十之年既過焉。止。以示入門之士者乎爾

以爭辯小思孟。以昧物陋程朱。以和語鄙伊子。已則以古文辭。托于天之寵靈。狡焉夫子之
 承。是示之形勢。以威脅世儒也。士子毋震虛喝而取實禍可矣。

○孔子之道。止。安天下之道也

安天下之道者。蓋言先王所操而泄天下以安之之道術也。此說泛言則通矣。舉大者也。極論則
 窒矣。所遺者多也。蓋物子憤於道術淪於家人之言。君子失其守而不悟。反偶諸釋老。以外乎
 當世之務也。乃欲以道專為王公大人之事。其意誠美矣。然亡奈大夫以下所遺之多何。而物子亦
 自苦焉。是以數言之後。不免於牽合補湊之累。惜哉。

第三條第六
條所稱之類

孔子平生欲為東周。止。將以用之也

教學之事。豈曰有為。先覺之覺後覺。亦人紀之自然已。况聖人之仁。其蓋如天。其容如地。弟

子仰之如日月。慕之如父母。而相與之間。又有它意乎。故自行束脩以上。吾未嘗無誨焉。鄙
 夫問於我。叩其兩端而竭焉。誨人不倦。皆聖人之仁也。何必謂之將用也。幼而學之。壯而欲
 行之。聖人之教人。令各成其材可以施諸用。固也。見之以為聚黨養材以備它日之用。是有
 惑志於子西也。

及其終不得位。止。故近世有謂先王孔子其教殊者非也

近世蓋指伊子。辯見於上。

安天下以修身為本。止。是所謂仁也

脩身為本。安天下為心。非知道之言也。修身安天下。豈有二心哉。天子而無安天下之心。
 是身不脩也。諸侯而無治國之心。是身不脩也。大夫以下莫不皆然。故如斯言。施諸進納開諭。
 有時而切。措諸立言辯道。非謬則疎。

思孟而後儒家者流立焉。止。大非先王孔子之舊也。

尊師道之譏。其有招焉者。然亦世道之變已。二子之賢而希聖。固非所議。雖在後儒。謂聖人
 可學而至。非妄也。謂己必至於聖。乃妄也已。况自恃其可至於聖。居然望自然之治乎。物子
 設疑似之辭。以誣世儒。因欲以染於思孟。可畏哉。物有本末。事有終始。內外其本末之屬乎。
 知所先後則近道矣。輕重其先後之說乎。故如是之類。未可一概而論也。

故儒者處焉不能教育弟子以成其材。止亦其所為道者有差故也。概世儒以有體無用。憤也。以尊師道病於思孟。激也。以夫子教人將以用之。蔽也。覽者去激與蔽。以取乎其憤。未必無所獲焉爾。

○道者統名也。止莫不有文武之道焉。

道原于天。行于人。通于萬物。呼曰統名。未為失之。但其所謂統者。舉禮樂刑政之屬。凡先王所建者而統之。而聖人未有所建之前。天顯民彝自然而爾者。皆截然外之不收。惡在其為統也。如言先王未制道之前。父不知慈子。子不知愛親。上不知恤下。下不知敬上。蠢蠢如蟲蚋然。則吾弗知也。如言慈愛恤敬德也。非道也。則慈愛恤敬。獨存於心而不見於事乎。苟其見於事也。理得則順而通。理失則逆而塞。通塞逆順。道之情見焉。惟其得失紛拏。通塞相推也。是以先王設教以治之。得者養之令遂。失者復之令歸。通者從之令行。塞者開之令達。所謂禮樂刑政之屬。凡先王所建是已。而中庸脩道者。此之謂也。故古之言單稱道者。主天地自然而言之。而聖人脩治之功。在乎其中矣。曰恭默思道。曰儒以道得民。曰朝聞道。曰憂道不憂貧之類是也。思孟舍之。荀卿曰。聖人也者道之管也。天下之道管是矣。穀梁傳曰。人之於天也。以道受命。於人也。以言受命。亦足以徵古言矣。如稱文武之道。稱先王之道。則主其所建而言之。而其原亦不外於天地自然者也。至如漢儒策論。則一時取給之言。非脩辭立言之流。是

以其辯橫驚。古義益乖。賈誼曰。立君臣。等上下。使父子有禮。六親有紀。此非天之所為。人之所設也。夫人之所設。不為不立。不植則僵。董仲舒曰。道者所繇適於治之路也。仁義禮樂。皆其具也。班志曰。秦滅道。凡如是之類。或亂道之真。或訛道之名。而物子祖焉。乃不顧先秦古言。獨何哉。

又如武城絃歌。止漢儒猶不失其傳哉。

引孔註以為徵。可謂以一蔽百矣。論語言道者不止十數。而以禮樂解之者。獨有此章。及所貴乎道。鄭註曰此道謂禮也已。蓋武城章。上有絃歌之文。故孔以禮樂解之。所貴乎道。下有容貌顏色。故鄭以禮解之也。由此推之。則它章無解者。漢儒不以為禮樂可知矣。且二章之法。孔鄭共以謂言之。則其不直指道以為禮樂也亦明矣。物子欲援以為據。適足以自喪耳。

後世貴精賤粗之見昉於濂溪。

周子曰。不復古禮。不變今樂。而欲至治者遠矣。程子曰。古者興於詩。立於禮。成於樂。今皆無之。古之成材也易。今之成材也難。又曰。今之學者唯有義理以養其心。若威儀辭讓以養其體。文章物采以養其目。聲音以養其耳。舞蹈以養其血脈。皆所未備。因此觀之。則二子之所憂可知已。又其論文中子。屢非心跡久判之語。則不貴精而賤粗。不愈益明乎。

濂溪乃淵源於易道器之言。止不可與它經一視焉。

物子已以禮樂刑政爲道。而易不可牽合。則目以易道而殊別之。自便偏旨也。大傳曰。見乃謂之象。形乃謂之器。又曰。形而下者謂之器。是形與見爲虛字。器與象爲實字。物子反以形爲實字。以器爲虛字。語脈已錯。何問意義。且形而下者。謂之制器。既不成語。必欲以形爲中間一物。由而上下。亦非善讀書者。而上而下之解。疏家待之。

如宋儒訓道爲事物當行之理。止亦不自揣之甚。

道者統辭也。事物當行之理者散辭也。統則體大而難測。散則事近而易見。朱子欲令人就易見而識其真。積累漸致。至於難測之大。故以散辭解之也。欲以己意求理。是微文誣人也。蓋意度以求之。與即物而窮之。跡雖有似。其實相反。學者不可不察也。欲造禮樂刑政者。其意難曉。如從文而解之。則誣之甚者也。抑以求理爲造道。道爲禮樂。因以言欲造禮樂乎。則是物子一家之言。何妨於宋儒之事也。

近世又有專據中庸孟子以孝弟五常爲道者。止非謂五者可以盡先王之道也。

達以天子庶人之得矣。道必以先王稱之。則其家言。既曰天下。又何引先王。道之散於事物。小大殊方。緩急異務。惟五者天下所同。無往而不然。故曰達道也。故謂五者可以盡先王之道。固非本語意。而謂先王之道可以達於天子庶人者有五。亦失其旨。若夫以孝弟五常爲道。可謂能執綱領而急於先務。雖有所遺焉者寡矣。

堯舜之道孝弟而已矣。止非謂堯舜之道盡於孝弟也。

孝弟而已矣者。無外之謂。自邇自卑者。先後之謂。言各有當。意始不同。夫堯舜神聖之極致。孝弟家人之常行。孰不以爲殊途異術。然要其歸趣。則一而不二。此之謂堯舜之道不外於孝弟也。

又如以中庸爲道。止凡是皆坐不識道爲統名故耳。

以意擇中庸。而不學先王之道。祇可以論陸王之末弊。未可以指斥窮理之學也。往來弗已。亦原於係辭。先儒多稱述焉者。凡如是之類。不知有何所遺。而罪之以不識道爲統名也。如以貴精賤粗而言之。則物子是貴粗賤精也。惡在其爲統也。

○先王之道先王所造也。止豈天地自然有之哉。

按物子談道。其端四焉。曰先王安天下之道。所以別於獨善之流。一也。曰先王所造。所以別於自然之宗。二也。曰作爲是道。使天下後世之人。由是而行之。所以自補罅漏。三也。曰統名。所以自約多歧。四也。蓋其命意之序。先指先王所操以安天下者爲道。而其實爲禮樂刑政。則得謂之先王所造。持此二說者。欲以矯枯槁虛遠之弊。誠可美矣。然此言一立。而百姓所日用而不可須臾離者。不復知其所係也。於是乃曰。先王作爲是道。使天下後世之人由是而行之。罅漏既補。又悟名義有不相容焉者。以先王之所操爲道乎。道之稱不得通於民也。以道爲良

之所由乎。先王不得專道之稱也。二者不可以不彌縫。此其所以有統名之說也。故造道之說。以禮樂言之者。其本旨也。以百姓之所由行言之者。其強辯也。是讀此書者之所當知也。伏羲神農黃帝亦聖人也。止而謂天地自然有之而可哉。

伏羲畫卦。黃帝垂衣裳。其道豈止利用厚生。又傳伏羲制嫁娶。以儷皮為禮。神農作五絃之瑟。雖詩書所不載。然要之禮樂之漸尚矣。禮樂之文。三代始備。雖孔子亦學而後知焉。固矣。所謂生而知之者。不知何以處之也。一則曰天地自然有之哉。二則曰天地自然有之哉。辭亦甚矣。晏子曰。禮之可以為國也久矣。與天地並。先王所稟於天地以為其民也。古之善言者蓋如是矣。

如中庸曰。率性之謂道。止。豈不老莊之歸乎。

子思率性之言。其意蓋曰。道者非他也。率由其性而道生焉而已矣。上而性。性非它也。天所賦與而已矣。下而教。教非它也。脩治其道而已矣。故合天與人而有命之名。人保諸己而有性之名。見諸行事而有道之名。微者遂之。塞者通之。而有教之名矣。條貫分明。本無可疑。今下汲脩道之義。被諸率性之文。因言子思亦謂先王作為是道。謬矣。有所營為運用。雖對天地自然而言之。然亦生性之說也已。凡有血氣之屬。莫不皆有營為運用。則營為運用安足以語人之性哉。惟人之靈也。其所營為運用而四端者常相先後焉。此所謂性善而人之自然也。唯其自然。

故推諸古今而準。溥諸天下。不言而喻焉。是道之所以生也。自然謂之天之理。順天之理而行。謂之道。又何怪矣。餘辯見于上。

○先王聰明睿知之德。止。故古者無學為聖人之說也。

書載作聖之言。易繫聖功之辭。未可謂古無為聖之說也。孔門乃無是言者。蓋恐其有躐等之害。非為聖不可及而畫之也。故顏子所欲從非它。而力不足者中道而廢。亦至於聖之中道也。孟子稱顏子之言。舜何人也。予何人也。荀子非思孟者。猶曰。始乎為士。終乎為聖人。雖言之不似夫子乎。古之所相傳。亦可見焉。故謂聖人非凡人所能及者。言雖近人情。究之自畫之道也。程子曰。人之為學。忌先立標準。若循循不已。自有所至矣。若是則可謂備矣。

蓋先王之德兼備衆美。難可得名。止。自此之後聖人之名莫以尚焉。

既以制作為聖之本義。又引詩書周禮。以明聖為一德。可謂二本矣。不然夫豈以六德之聖為制作之謂哉。要之制作之解非。而一德之說是矣。惟所證詩書未允。不如引洪範五事之為確。德之全顯諸王者。亦為未盡耳。

至於子思推孔子之為聖。止。故以誠語聖也。

子貢有若皆稱聖於夫子。何待於子思之推。上文曰子思亦謂先王率人性而作為是道也。非謂人人率性自然皆合乎道也。至此乃曰極言道率人性。則不得不言聖人可學而至矣。似以率性之言。

為自然合道之謂。所謂誣人之辭游者乎。

至於孟子勸齊梁王欲革周命。止。故旁引夷惠皆以為聖人也。

此亦誣辭也。孟子曰。伯夷伊尹皆古聖人也。吾未能有行焉。乃所願則學孔子也。其志蓋可知矣。

假令孟子為革命故以聖自處。如物子之言。宜引伊尹太公望散宜生為聖人。以自比而足焉。今太公望散宜生不稱聖。而夷惠稱聖。則其非自為亦可知矣。

子思去孔子不遠。止。辭氣抑揚之間古義藉以不傳焉可嘆哉。

孟子曰。大而化之之謂聖。聖而不可知之之謂神。又曰。所過者化。所存者神。上下與天地同

流。如之何得言無有神不明不測之意也。此所舉之言。乃語伯夷伊尹之所同於夫子而已。始非

稱聖人之全德也。何其不考也。急於持論。勇於救時。先儒以正道廓如為其功。物子以古義不

傳為其罪。人填浮氣而存忠厚。主名教而推變通。正大以待之。公平以聽之。而後功罪可定

也。

蓋後王君子奉先王禮樂而行之。止。大抵後人信思孟程朱過於先王孔子何其謬也。

未嘗以作聖強之者。是也。聖人不可學而至焉者。非也。唯物子亦知說有所窮也。乃借仁人

以通之。然仁人亦非可強。至於人人之地。故夫子必以恕先之也。難之而不絕望焉。易之而不

驕志焉。學之則也。物子反此。

此條論聖蓋有二意。一則明其以制作稱之。苟無制作之跡。則雖有聰明睿知之資。不得稱聖

也。一則論其不可學而至焉。凡後王君子。不待問制作之有無。其德自不可望聖也。而二意者

錯出互見。頗苦紛糾。其非有定見。從可知矣。

○後儒多強學者以高妙精微。止。豈先王安天下之道哉。

後儒之言失於高妙則有之。然非強學者以人所不能為。乃凡庸之流不為耳。極者至極之義。標

準之名。訓為中者。自孔氏之誤。朱子辯之詳矣。建極云者。人君躬保天下之純德。以其一身

而立至極之標準於天下也。非設科立條責諸天下之謂也。制禮之說未為不可。然語焉不詳。恐

其誤人。蓋先王之制禮。既不務過高。亦不趨便安。義必方正。用必中和。其在於高明。有如

不足為者。而其實人之所當行。自流俗而視之。有如不可行者。而其實人之所能為。故賢者

不得不俯而就之。而不肖者不得不改而及之也。如其不辯方正。不擇中和。惟凡庸之所能為

是準。則漢祖所謂度吾所能行為之也。夫人情樂放縱而厭檢束。告之以若說。塗塗附也。

故所謂事理當然之極。止。皆非先王孔子之教之舊矣。

事理當然之極。即事物當行之理。上已辯之。解至善故曰極。然亦非欲以之強於天下也。朱子

答人問新民之極。以勞來匡直輔翼振德為言。其意可見矣。變化氣質。有教無類之謂。學為聖

人。未見其止也。

近世伊氏能知其非是 止 可謂無寸之尺無星之稱已。

伊子固不取朱學。然其言曰。人倫日用當行之路。曰資質之變化。又舉伊川一語以為確論。曰有欲為聖人之心而後可與共學也。今在上文正列是三義者。而此承之以伊氏知其非是。言失其當。何所準者。所謂道德仁義非禮不成之意。然人有良知。而事有往行。苟多其聞見。闕疑以行之。雖不中不遠矣。譬以無寸之尺。吾懼後生不達。以孝弟仁義為汗漫難識之物。而不肯為之。一有欲為之者。反以冥行妄作目之也。

○孔門之教仁為至大何也 止 人之性為然

道必稱先王。仁必稱天下。雖言之大。所遺多矣。於是乎乃舉諸侯大夫士皆有安民之義以補之。又稱親愛生養人性自然。以通仁意於庶人。補湊之跡可見已。

故孟子曰仁也者人也 止 必合億萬人而為言者也

孟子之言閉約單竭。蓋有可疑者。物子引之。釋其半以用之。半則舍而不議。其意難曉。今從文言之。仁者本乎未合而言之。是可以一人言也。道者待合而後名之。是非以一人言也。不識物子之意然否。若以為然。則仁之說與上下不合。若以為不然。則何不為之解以明所引之意。是不可曉也。道無所不在焉。何必待合億萬人而後為言也。或億萬人而言之。或一人而言之。斯見其大已。

今試觀天下孰能孤立不群者 止 能合億萬人而使遂其親愛生養之性者先王之道也

遂性之說良善。與先王作為是道使人由是而行者。虛實邪正非同日之談也。

學先王之道而成德於我者仁人也 止 可謂妄意不自揣之甚已

物子見仁有含容生育之意。故以敬天命為其本。不欲以愛語之。近乎喻姑息之為。可謂所見者大矣。然人非有惻隱之心。何由知敬天命。而求含容生育之志乎。故惻隱之說弗可改也已。孟子言仁原於心性。達於政事。內外終始莫不舉焉。可不謂之善用力於仁乎哉。

主張其學者 止 豈足以為仁哉

佛教滅人倫。仁之絕塞莫甚焉。故見其煦煦。謂之有仁。固非也。待其無安天下之道。而後不與其為仁。亦迂矣。

墨子乃有見先王之道仁莫以尚焉 止 安足以知先王孔子之道乎

孔門之教。雖仁為大。然義亦其所上。孟子雖連稱仁義。亦未嘗無差等。且其論政治。陳君道。常主於仁。而於義或及或否。七篇之文可觀焉。如見其並言。遽以為同班。則陰可以疑陽。相可以耦君也。而可乎哉。專言偏言之目。雖防於宋儒。仁兼衆德。自古有說。韓無忌曰。恤民為德。正直為正。正曲為直。參和為仁。是也。固亦有限於一德。君子曰。仁而不武。是也。故談仁而屑屑乎專偏之分。固為未塗之失。謂之全無專偏之別。亦不可以讀古書也。仁有數義。

表記亦云。

先王之道多端矣。止。此孔門之教也。

知勇仁義不可混合。然必不與安天下之道相悖。而後謂之智勇與義。語似無病。然以仁者必有勇勇者不必有仁言之。則仁非必不可混合。而智勇之稱。非盡不悖於道也。其唯禮與義乎。可以謂之不與道悖而後云云已。據德依仁皆失其解。據於德者。不問其得於性與得於學。凡身之所有。據守之而不移也。依於仁者。其所思所行。皆務依放於仁而不違也。此自為學之常。修身之方。何必言養德之道在和順於先王安天下之道不敢違之也。物子欲張不變氣質之說。乃以性語德。而至如是之迂耳。且據於德。上與志於道聯。依於仁。下與游於藝聯。二者各相待而後義備。物子以為據依相濟。亦謬矣。

大氏先王孔子之道皆有所運用營為。止。乃不過浮屠法身徧一切之歸悲哉。

有事助長之義。程子亟稱之。即運用營為養以成焉者。未可遽以迫切斷之矣。

此條論仁反覆丁寧。可謂三致志焉。然原始要終。未見其覈於名義而切於行事也。仁一也。數條中或以為德。或以為道。或以為心。一出一入不可把捉。夫仁之為義也廣矣。以心言之。以道德言之。宜若無不可者。惟其不道所以該通。而尤雜無統也。使人泛乎如濟無津涯。故曰不覈於名義也。先王安天下之道至大也。至公也。至微也。自非博學篤行知遠之君子。孰能

辯其數。達其意。必和順而不違之。若是可謂業廣而功難矣。所謂各成德者。謂各成一德而已。非謂仁人也。謂足以為仁人之徒也。非謂其德可以安天下也。謂其材足以共諸安天下之用也。若是可謂材小而事易矣。今也廣且難者之先責。而小且易者望成於後。非事之序也。解者必曰非此之謂也。言知先王之道在安天下。而心能嚮之也。和順之辭失於重耳。曰辭失輕重。其能切實。故曰不切於行事也。彼又將曰。覈云切云。皆是宋儒糟粕。欲瞭然於言語之間者也。吁此條之辯何主也。主辯仁而已矣。辯而不明。將安用之。故瞭然之弊。救諸先儒可也。自為不瞭不可也。愚竊以謂夫子之稱仁也。尊而親。約而廣。故說務於切近者。喪尊與廣。務於遠大者。遺親與約。要不離心德之解為是。故曰仁遠乎哉。我欲仁斯仁至矣。大小遠近以形之者為非。故不以博施濟眾為仁。而以己欲立而立人言之。若夫天下歸云。行於天下云。皆言其無往而不合也。非遠大之謂也。物子必以安天下為之說。用雖大。義雖尊。亦異於夫子之教矣。

○多謂人有仁義。止。是後世之言也。

天道遠而難見。故以氣為道。曰陰與陽。非以氣為道。寓乎氣而言之也。人道邇而易識。故

以道為道。曰仁與義。已以道為道。又安用埋氣之辯。由此言之。仁義之與陰陽固有分矣。

故雖程朱之談陰陽。亦必曰一陰一陽。必曰所以陰陽。至如仁義。未嘗聞其以一與所以語之也。

今謂人有仁義。猶天有陰陽。而使仁義並行而不相悖。則可謂善效法焉者。若夫泥於對待流行之說。而視仁義如晝夜寒暑。兩兩相推。間不容一物。則陋矣。故物子之言亦不可不思也。當先王孔子之時。止。先王孔子之時豈有是乎。

此言得之。

古者禮義對言焉耳矣。止。亦備楊墨所不有者以見吾道之備已。

說卦中庸老子管晏。及莊周與孟子同時。皆並言仁義。其為古言可知矣。備楊墨所不有。以見吾道之備者。何其言之鄙也。

其實禮義人之大端而仁於斯為大。止。若夫仁義禮智就一人之身言之者未之嘗聞也。

上云先王之教多端。智自智。勇自勇。此云聖人未嘗以知為教。何也。仁義禮知之稱。雖經無明文。然據虞書九德。周禮六德。文言四德。及義以為質。禮以行之。孫以出之。信以成之。知及之。仁守之。莊澁之。動之以禮。臧武仲之知。公綽之不欲。卞莊子之勇。冉求之藝。文之以禮樂。行五者於天下為仁。曰恭寬信敏惠之類。參伍以求。則四者之義。其來舊矣。而不可謂四者非一人所能兼焉也。

漢儒以屬五行。止。可見非古道已。

此言信矣。

論語屢以好仁好義好禮好德好善好學好古為言。止。故其非孔門之舊也。

論語六言好仁為首。好知次之。不可謂不以好知為言也。然其為言也。主於戒不學。而非

主於教知。則未以為教之言。猶似無所礙。至如好信。則夫子明言上好信則民莫敢不用情。

不知物子之言何謂也。

荀子譏子思孟子造五行豈誣乎哉

辯見于上。五行之說。余別有所考。猶未審其是否也。故不載于此。不識物子亦有所考而言

之與。有則吾欲聞之。如其不概見何也。

聖人不知為教者。雖非通論。要之於人情。亦不為無所見也。且夫乾之四德。貞居其一。

而知不與焉。又按春秋列國士大夫歷稱衆德者。多數於信而不必及知。則古所相承。庶乎可見

矣。故仁義禮智。雖不可謂孔子時所無。然謂古者恆言必然。亦非矣。至於孟子亟稱知。則蓋

有以矣。當戰國之時。人務權譎。世賢辯知。是非之心昏昧。正邪之分貿亂。是孟子之所深憂

也。故推本之於人性曰。是非之心知也。又責其實曰。知之實知斯二者弗去是也。無乃所以抑

人機知巧詐。令之歸于正乎。故說知如孟子。又何不可之有。嗚呼物子與孟子同憂而不達其意

者也與。

(上卷終)

○仁者養之道也。止。宜其不及三代矣。

甚矣哉物子賊人之子也。人未能去其惡。而以爲惡不可不去。未能遏其欲。而以爲欲不可不遏。忌憚焉。顧畏焉。愧耻焉。感激焉。義或可由以徙。而不善或可由以改矣。詩曰。仲可懷也。人之多言。亦可畏也。知欲之不可不遏。而能忌憚顧畏者也。夫養其善而惡自消。勢之自然也。然謂修身之道止於此而已。則君子恃善之可養也。必溺優游不斷之流。小人藉口於養善也。必長惰慢邪僻之習。如是人與我皆不勝其壞亂也。且修身治國殊其塗焉。何者自治之與治人異也。故君子於己則曰克。於人則曰恕。而物子引舉直錯枉之言。以謂修身之道亦爾。可謂過矣。均之治人。教誨之道爲嚴焉。是夫子所以罪晝寢乎。通鑑之治國。性理之修身。如病其苛刻。去其苛刻而可也。何務反其說。取愉快於一旦。以不顧戰戰兢兢之戒之爲。寧巖論陽處父曰。沈漸剛克。高明柔克。夫子壹之。其不沒乎。物子之教與處父反。而失則一也。

○先王之道安天下之道也。止。豈足以爲先王之道也。善哉物子之論封建也。以爲於民有家人父子意。可謂篤論矣。朱子曰。達君臣之義於天下。使其恩禮足以相及。情意足以相通。其意正同。科舉之弊。法家之習。皆如所論。然豪傑之士者。能知其弊於當年。而不肯受其染也。讀其書。論其世。斯可以知其人矣。

○先王之道立其大者而小者自至焉。止。蓋不若是不可以進道也。立其大者而小者自至焉者。施諸政事則可。用諸修身則危矣。孟子所謂立乎其大者。言操存其

心。不奪乎耳目之欲耳。子夏之言。非言之粹者。蓋有爲言之也。故小心翼翼。以稱文王。克勤小物。以嘉畢公。周書不云乎。不矜細行。終累大德。易不云乎。小人以小善爲无益而不爲也。以小惡爲无傷而不去也。故惡積而不可掩。罪大而不可解。必如物子之言。則此數者皆不可由以進道也。惟治人之與自治異也。故曰與人不求備。檢身若不及。古之道可知也已。

子貢曰賢者識其大者。止。識小者爲不賢。子貢所稱在於禮樂度數。非大德小德之謂也。所引非倫。

後人之不賢唯小是見。止。是何能養人才安國家哉。後儒之教。其弊如此言者時或有之。豈曰厚誣。

其論聖人亦謂渾然天理無一毫人欲之私矣。是亦以一己之見窺聖人者也。所論聖人之心。數之常而物之情也。豈其一己之所窺哉。惟辭不爾雅。計較之跡露。而不測之意鬱。是爲可恨耳。

傳曰一張一弛文武之道也。止。朱子引通神明豈不傳會之甚乎。一張一弛。本以治人言之。雖在修身。亦時其可張而張之。時其可弛而弛之。斯爲得之矣。豈跡弛之行。不拘小節之謂哉。無大過。謙辭也。不知不能。言道之所至有不可知不可能焉者也。非識大而不識小之謂也。堯舜禹周公孔子之事時也。不可知也。不爾。是數者何微事末

節。而聖人舍而不論。略而不問焉哉。不撤薑。朱子引通神明。鑿矣。方辯道。物子旁爭末義。煩矣。

大氏聖人之德與天地相似焉。止。後人迫切之見皆其所識小故也。此以治道言之。固無病。

○修德有術。止。譬諸庸醫治疾。豈知標本之道乎。何況化之道乎。

此言去惡而論其術。殆非上數條之比矣。然復之六三有之。曰頻復厲无咎。人去惡而得其術則善矣。如未得其術。頻復之厲。不猶愈於已乎。

○言性自老莊始聖人之道所無也。

老子不言性。莊子言性。而後於子思數十百年。不得謂言性自老莊始也。亡論經有性之名。書載降衷。詩詠秉彝。易繫性命。論語稱生直。非語性而何。可謂罕言。不可謂所無也。

苟有志於道乎。止。可謂卓見。

勸矯棄恃之論。鄉黨之利口自喜者皆能言之。非所以望於先生長者之誨也。夫性善者言順而理直。其說之行。必使人諄然有生乎中者矣。性惡者言不順而理不直。其說之行。必使人務矯僞事色。莊。鄙詐之心入之而不自知矣。此二教者。於先王禮樂之化。孰近孰遠。荀子慮廢禮樂而言性惡乎。救經引足之喻。渠將不能自免也。歐陽子言非所急。言所罕言。而不言所無。抑與。

物子異矣。

○變化氣質。宋儒所造。止。聖人之道必不爾矣。

變化氣質。非宋儒所造。孟子已言之。曰居移氣。養移體。非惟孟子言之也。雖論語亦有之。曰有教無類。非惟論語言之也。雖周書亦有之。曰沈漸剛克。高明柔克。且夫力不足者非氣質乎。而夫子強之於人。令其廢而後止。未嘗聞其以勝天為忌也。物子則謂氣質不可變。天不可勝。欲令人舍而不用力焉。亦異於夫子矣。又即其煨燬之說論之。煨緩其性。煨去其烈。安在其不可變也。氣質之有美惡。人養其美者。而去其惡者斯可矣。豈謂盡變其性度。如換骨易髓然哉。周子有言。剛善為嚴毅。惡為強梁。柔善為慈順。惡為懦弱。朱子解之曰。易其惡則剛柔皆善矣。是變化之說。煨燬之善者也。物子以煨燬專為禮樂之功。欲以外諸變化之義。可謂拗矣。

孔門之教弟子各因其材以成之可以見已。

因材施教之。誰曰不然。抑不知成之之方。一於長進而無所用裁抑乎。其於子路子貢。恒以退為教者何也。

○思孟以後之弊在說之詳而欲使聽者易喻焉。止。夫以言服人者未能服人者矣。教人之道。此言得之。然孟子固已前言之。曰不為拙工改廢繩墨。引而不發躍如。是也。

蓋教者施於信我者焉。止。予故曰思孟者與外人爭者也。

孟子當其世已有好辯之謗。不待物子之言也。孟子親以不得已應之。亦無待於後人之解已。後儒輒欲以其與外人爭者言施諸學者可謂不知類已。

七篇之旨深切著明。自心性以至政事。皆其正言。雖有與人爭者焉。亦皆距邪扶微之辭。學者以此辯志。於道何有。

此條首尾雖並稱思孟。然中間專論孟子。則子思特連及耳。故今之所辯。亦止於孟子。

○後儒之說天理人欲致知力行存養省察粲然明備矣。止。凡百技藝皆爾。

物子每病程朱以味乎物。以余觀之。物子乃有此病已矣。何者天理人欲致知力行存養省察。文雖不具於論語。其義則備焉。物子以名求之而不得。輒謂孔門無是物。可不謂味乎物乎。曰人之生也直。天理之順也。曰戒之在色與得。窒人欲也。曰喻於義喻於利。天理人欲之辯也。曰學而思。致知之方也。曰敏於行。曰用力於仁。皆力行也。曰文行。曰博文約禮。致知力行之備也。曰居處恭。曰默而識之。存養之務也。曰日省。曰內自訟。省察之勤也。如見大賓。如承大祭。己所不欲。勿施於人。存養省察之完也。是皆夫子所以為教。而思孟以降所以誦法。其統可見矣。安得恠其名不合。而遂謂孔門無是物乎。夫言與世遷。文以書異。苟義之不畔。何必爭輕重於音聲間也。必文同而後志不賤。言一而後道不岐。則義不相通於詩書。而道裂於虞夏。

商周也。罔醇罔疵。辭之不類古者。必引繩排根以去之。則聖者有作。而明者無述也。是故君子匪名之眩。惟物之觀。至若力行。人倫本務。論語所稱不可勝數。物子乃曰。諸子未嘗知其說。孔子未嘗及其詳。余不知其何說也。君子一言以為知。一言以為不知。物子之不慎言亦甚矣哉。先王之教以物者。論不詭於古。實獲周程之心。然後世禮樂之化不可復見。則士之所有事惟躬行而已。物子乃謂力行非孔門所教。而不使入用力焉。則其所謂先事者。空言無施耳。惟其不以理者。亦有可議矣。夫民可使由之。不可使知之。中人以下不可以語上者。皆以物不以理之謂。而君子之所以待於衆庶也。若夫士大夫中人以上之材。則不惟春誦夏絃是游。必也有有道之正焉。必也有輔仁之會焉。於是乎言不得不及義。而教不得不以理矣。是論語所以纂思孟所以述。程朱所以講。而先聖謨訓所以得傳於玉帛鐘鼓之外也。故程子曰。今之學者惟有義理以養其心。既已喪禮樂於耳目。是而不足。亦將奪理義於心懷。君子弗忍矣。

○古者道謂之文。止。豈一言所能盡哉。

物子謂禮樂道。則道謂之文固其所也。然其實道也文也禮樂也。名已不一。則義亦各有所主矣。如之何其漫然無復識別也。蓋道者通乎顯微。貫乎終始而言之。及其刑於威儀。宣於音聲。而後禮樂之名立焉。無言無行。無政令。無事業。無書策。無歌詠。無禮無樂。凡道之攸英攸發。炳耀赫著於外者。乃謂之文。舜之煥乎。周之郁郁。文王之文。夫子之文章。經緯天地曰

文。文之以禮樂。此其大者。朱子曰道之顯者謂之文。是也。夫名不正則言不順。言之不順。雖有不誤人者幾希。豈可以不慎哉。物相雜曰文。所以談交位。而相雜之義。未足以盡乎炳曜之意。况於以語道之全體乎。

古謂儒者之道。止。先王之道不然。

博而寡要者。言諸子百家皆失諸一偏。惟儒者為博。而苦其寡要也耳。夫天之所顯。先王之所奉。夫子之所脩。六藝之所載。與乾坤相範圍。與日月共貞明。百姓日用而不知。此之謂道之本體也。儒者談之。而博之稱歸焉。非其人不疑。而寡要之謗興焉。此豈道之本體也哉。且古者謂儒者寡要。物子更添一道字。從以為道之本體。欲用以語禮樂。可謂自便之甚矣。直情徑行。戎狄之道。所以論禮文之不可已。非所以語於道之本體也。故子游明言禮道則不然。而物子竄改禮道二字。曰先王之道。於是乎率性之言。以舊說則疑於直情徑行。而先王率人性而作道之說。得由以奪焉。紛更之跡。不可不察也。

孔子曰文王既沒文不在茲乎。止。是自理學者流二精粗之見耳。

謙辭之解。物子駁之是矣。然未知所以駁之。朱子蓋以為若文王之道。吾豈敢。今之所存。惟其遺文。是其所以讓於文王。故曰謙辭。何嫌於其代文王而謙也。故文之不為謙辭。非此之謂也。蓋聖人知命之至。自信之確。一則曰文王。一則曰天。辭氣之尊嚴亦可想矣。又何憚而不敢

當於道。退以托於文也。其不曰道而曰文者。抑亦有說。道者統言也。天下之所同也。文則待其人而後具且著焉。文王之所獨也。夫子之所獨也。此謂道文之辯也。又有文質之說。止。故孔子十室之邑。不貴忠信而貴好學也。

四教之目。其相終始而無偏重也。隱然而見焉。物子乃言忠信受教之質耳。是以忠信非教也。何其與七十子之徒所傳異也。蓋其所祖在禮器。而禮器歸重於忠信。亦與物子異矣。質勝文則野。文勝質則史。文質彬彬。然後君子。物子止言忠信而無文不免為鄉人。何其說之偏枯也。大因朱註。忽竄二字。何其辯之變幻也。文猶質也。質猶文也。誰能軒輊於二者之間。十室之邑有忠信者。非不貴忠信。勉其學之急也。如藉口斯語以薄忠信。則文莫之語。亦可以累於文也。要之。物子之言。右文左行之意居多。其不賊人之子者寡矣。敏事慎言。就正有道。夫子謂之好學。不遷怒。不貳過。好學之稱斯專矣。今物子欲以文斷好學。偏哉。曰道。曰文。曰忠信。曰學。物子悉更其故約。易置部位。於是乎名不正而言不順。遂以自致於賊道誤人。悲哉。後儒僅能言精粗本末一以貫之。止。蓋坐不知古之時道謂之文而其教在養以成德故也。辯見于上。其不見者。不足為辨。

○善惡皆以心言之者也。止。故後世治心之說皆不知道者也。以禮制心。誰其尸之。亦斯心也已。是故放心不可以不求矣。吾黨增勝之駁狂者之喻曰。惟狂

克念作聖。豈曰不可自治。患在不自知其狂耳。然物子之學。而猶論制心之道。亦可嘉也。

○理無形故無準。止。要之未免堅白之歸耳。惟理無形。以順為形。惟順無準。良知為準。良知而不大。於是乎有學也。自是以往。先王之道可識。而中庸之理可擇矣。識也擇也。有何先後。所見人人殊。而有不人人殊者存焉。舉而措之。無所不行。所謂道也。北看成南。乃時措之宜。方因看而定。中隨時而在。豈無所準哉。西鄉人爭地界。有官以聽之。人欲交乎前。天理拒乎中。心有官以決之。何患無準。天理人欲。樂記所稱。宋儒特主張之耳。以造呼之過矣。

○先王之道古者謂之道術。止。可謂強也。

治人育才之術誠善矣。但專諸己。而謂先儒反之。物子之不公也。程子所愛乎言者三。優柔廢飲水釋理順居於其一。又曰。說書非古意。轉使入薄。是豈襲而取之。驟有於己之謂哉。格物窮理克治持敬。雖說盛于洛閩。其義原自洙泗。能用之。何害於長育。固並行而不相悖也。物子不云乎。仁亦一德。聖人一於仁。則何以有勇智信義乎。故學而不知養則失矣。舉一而廢百。亦未為得也。

大氏人物得其養則長。止。能極廣大而無窮已者也。

議論有章。聲氣可樂。亦善言。道術者也。其與天地相流通。與人物相生長。能極廣大而無窮。

已者。即道之體也。朱子有曰。大化流行。各有條貫。亦謂此已。特不知流通云。生長云。無窮已云者。物子以為道。為理勢。若以為道。則難知難言之說信。而制作之論屈矣。何者。雖

有制作之巧。終不可以得造流通造生長造無窮已。如天地之化也。若以為理勢。則制作之論。要而難知難言之說游矣。何者。道與理勢分立乎彼此。而不測之妙去此歸彼也。

近世頗有言宋儒之非者。止。吁終未免五十步之謂哉。譏貶之言。未指事實。不論。

○先王之道莫不本諸敬天敬鬼神者焉。止。豈不天上天下唯我獨尊乎。

天與鬼神皆不足畏。世儒或有此病。蓋其材未足以語上。躡等陵節。代匠傷手者也。豈窮理之罪乎哉。然物子之言。亦可以警人矣。

且茫茫宇宙。止。其謂我盡知之者亦妄已。

以是言觀之。似未得窮理之解者矣。

故其所為說。止。豈能勝而上之哉。

向以希聖為宋儒之罪。既而懼其不厭天下之心。於是乎乃設勝聖法以陷之。何其深文也。

凡聖人所不言者。止。亦弗思也已。

言因事發。名待物命。雖有作者。安能逆物變於百世之下。而縷陳之於百世之上哉。其所不可

及。在於能學其會要。明之統類。使天下後世引伸觸長以得之也。且文古今殊。教寒暑遷。故仁不見於虞夏。而中罕言於魯論。前聖後聖差池如是。所顧一揆耳。五代嘉言。豈盡於尚書。而七十子之問答。論語能有所遺哉。故知言有術。必審其可以訓與否而已矣。凡聖人所不言。概以為非聖人之志。術亦疎矣。

○先王四術詩書禮樂 止 書唯是耳

尙有三墳五典八索九丘。未可以無書斷之也。

後王君子所尊信 止 其病坐弗思耳

樸學之稱出於漢武。蓋尙書之言。比諸它經。尤為質直。漢武以好大愛奇之心觀之。故以為樸

已。物子所稱後儒。蓋指宋儒。宋儒豈以書為樸學哉。不啻不以為樸。所謂高妙精微者。得之

於茲誠不鮮矣。物子乃曰它求。是後儒非弗思。物子者弗思也。

古聖人一言之微 止 宜其昧於先王安天下之道也

孟子之論古。其所微惟詩與書。豈曰不信。如稱述堯舜。文或因史乘。事或從問者。其義則

孟子自取之矣。惟其自取義也。何常略記之有。物子見其不如無書之言。執為左券以詰之。鄙

哉。

詩則異於是矣 止 故孔子曰不學詩無以言

詩之所以為教。論語之文燦如列星。豈得獨據無言之訓。以為脩辭之資而已哉。所謂無以言者。非惟由辭之不脩也。抑有深焉者矣。刪詩之義。程子為優。而猶有可言者。言之長也。以俟

它日。程子刪詩說見于其詩解

後世廼以讀書之法而讀詩 止 故皆不知詩者之說矣

詩有美刺。猶春秋有勸懲也。然春秋懲意實勝。故曰懼。詩美辭為正。故曰興。勸懲嚴於一人。

而著於行事。美刺主於風俗。而通於情性。是其辯也。故以勸懲視詩者。固非矣。然美刺之分。

非獨可以風於當時。後世學者通而誦之。比而觀之。亦可以興於己也。

如詩序則古人一時以其意解詩之言 止 可嘆之甚也

詩序之說。且備於一家而可也。然以愚觀之。不若程子之明斷近於事情。而有舊說可據矣。關

雎序總論詩之綱領。疏家固已言之。其析為大小序。誠可嘆也。程子詩序說見于其詩解

大氏詩之為言 止 故古人所以開益智達政事善言語使於隣國專對酬酢者皆於此得焉

大氏以下言皆善矣。上文以脩辭蔽詩教者。將何說以自解邪。零碎猥雜二句。微有瑕類。然無

損於大體。

書為正言詩為微辭 止 故合二經而謂之義之府也

此言亦得之。

若夫禮樂者德之則也。止。四術之盡於教也。

禮樂之論最善。蓋其得意之言也。曰合先王之道。曰先王之道之體。由此言之。則道與禮果有分。而非如前數條所言之也。

○吾道一以貫之。止。豈可據乎。

諸子皆聞而知之。不知何所據。其果然乎。二子未聞之前。其所造詣。反不及諸子也。而可乎哉。門人不達。曾子且以忠恕形之。是豈可人人得聞之言哉。物子平生忌精微。其說至於此而窮。乃為抗厲果斷之辭以自張耳。

或以一理言之。止。古人言語皆如此。

一者一也。無多方也。左右以之。上下以之。故曰貫。是道也夫子所行。故曰吾道。子思所謂大德敦化。孟子所謂過化存神。蓋謂此也。一理也。一心也。誠也。物子駁之。以謂是則一而已矣。何必曰貫。似是矣。先儒說一過深。其宜虛看而實看之。所以來物子之難。然物子亦不明其病所在。反以為一未得所實。貫亦失其施。乃尤而效之。以仁實一。而引貫以繳於吾道。猶蔽之之於三百。可謂謬滋甚矣。如令一果仁之謂。則夫子宜當正言仁以貫之。何所回避而詭秘其形乎。其謬可知一也。令貫之之言。必待於吾道之文。而後有所施。則其語子貢不曰吾道。其謬可知一也。故一貫之為義。始無難曉者。惟夫子所以一貫。其方難識且言已。是以曾子特舉。

夫子之道。而形之以忠恕。斷之以而已。欲令門人求茲於茲不復它適也。伊子曰。忠恕所以一貫之也。非以忠恕訓一貫也。邢氏曰。更無他法。故云而已矣。皆可從矣。先王之於道。聖人之於德。豈後人所得而輕重焉哉。務在直道而奉之而已矣。故知歸重於聖人之德。既不足以為得。不知歸重於先王之道。亦不可以為失矣。必以吾道為先王之道。而不顧義之當否。適足以見其務歸重之蔽耳。法身徧一切。物子屢稱之。夫道自道。浮屠自浮屠。論道而顧異同於浮屠。吾不知何謂也。

後世理學者流。止。豈曾子時語意邪。

此論得之。

○後世人不識古文辭。止。謂人各隨性所近而成務也。

太極雖不以天地言之。易與天地準。則天地本有太極之義也。窮理研幾。贊聖人作易。是矣。朱子固已言作易之極功。而猶施諸學者。轉用焉耳。天。上天固矣。性。性質無害。然亦在人所解。貞者不變。屬智者強。所見略同。嘉會如婚姻賓客之事。未盡之。嘉會者嘉其所會也。合禮猶合樂。乃是。利用。利器者否。使物各得其所利也。物各得其所利而不相悖之謂義之和。令義和。故曰和義。非和順於義也。繼天之繼。得之。善善人。失之。天下之善皆出焉。故曰繼也。保於己以為性。故曰成也。非隨性成務之謂也。

凡言德者有對怨言者止故曰微

單言者何必皆性之德。物子不得據德之解故已。民心導心。雖義切治體。然文無明徵。未可以革舊說也。況有荀子之言可稽焉乎。

大學者古大學有養老序齒等禮是其義也止豈徒然持敬乎

養老義者說何據。明德之解可從。親民之辯不可從。大學見引康誥。而曰新民出康誥。大學之教豈以之哉。不可曉已。格物致知。一家之言。而格非皆有感格意也。論敬亦不是。亂而敬。敬直內。何必問所施焉。

克己者約身之解是矣止凡此類皆失古義之大者也

約身之解非是也。克訓勝。弗可改矣。考於左傳而可知焉。克己由己。何犯之嫌。凡一辭中文異旨者。其比多矣。

大極以下舊解。物子以爲失古義之大者。而觀其所更改。多不安者。以其歷舉衆義。粗示大意也。今之所辯。亦且存梗概以相應云爾。

○六經殘缺止何況宋儒及諸家之說乎

六經殘缺。不得無理推。博讀書而不及王李。參伍求之。微意可知。孰謂百家往而不反乎。大凡責道於君上。及厭虛遠。疾苛刻。下智計。固是一篇之美意。論封建。論治術。論詩。論禮

樂。亦皆天下之通論。惜哉其於先儒。不公辯而力排焉。務出於其所未言。高自標異。是以辭失體要。辯入矯誣。美意未顯。淳風已散。通論纒立。琦辯俱焉。可不惜乎。至於先王孔子之時。不求一言以盡乎道者。余有取焉。

右辯道解蔽二十五則

寶曆五年乙亥五月門人小倉川江敏德繕寫授工

辯道解蔽終

二儀判。日月運。抗為山。墊為澤。羽而翔。毛而走。其誰使之然乎。豈出乎庶物。與二儀相參。山澤羽毛從為之用。仰觀俯察莫之能逃。又誰厚之於我也。先天而天不違。後天而奉天時。先王之所以率天下。其亦在茲乎。宣尼承周衰。所修而傳。豈其異道哉。微言既絕。大義日乖。放言之流熾。而破道之辯興。則尺霧障天。七聖皆迷。天下始偃偃焉不知所歸。閉塞昏昧焚坑極矣。漢興收拾餘燼。昏耄口授。科斗出壁。其義稍稍備矣。蓋道之有昏明。猶世之有治亂。其一治而不復亂。一明而不再昏者。未之有矣。故君子必有當年之務。以通其昏塞。此解蔽所以有作也。夫道若大路。可謂坦明矣。宋儒舉群言。一切斷諸性理。微則微矣。而物子以為非孔氏之舊矣。物子以禮樂統道。安天下為主。大則大矣。而解蔽以為亂道之真也。由此觀之。二說者之所執。皆失諸偏。而亂道賊人。則不止有體無用之謂也。故以禮樂統道。禮樂亡而道喪也。而可乎哉。安天下為主。人君專之。而士庶人不與也。而可乎哉。患宋儒之出於枯槁。而不知自張之為偏也。重禮樂之作於聖人。而不知其所以作者朕於太初也。急於培擊前人造一家言。而不知率天下而禍乎道。遂并家言喪之也。六籍之所載。孔氏之所傳。細大悉舉。精粗兼至。何必天下而禮樂而已也。此辯道之蔽所以不可不解也。或曰。君子不爭。何不作一書以辯道。而解人蔽之為。答曰。天下之言。自非經藝。多有所蔽。蔽而易知者。不必解焉。物子躬絕人之資。舞文試巧。輕重任意。不使人窺其際。迎天下之欲。奪天下之正。置之術中而令不覺焉。是蔽而難知者。何解

之不可為也。道在方策。炳焉著明。效諸品類。可推而知。別作一書。將安用之。唯其亂道也。不得已起而應之已。解蔽之於辯道。取則取。舍則舍。未嘗不直道而行之。雖爭而不爭也。曰辯道之蔽。既得其解。而解蔽於道。所主難見。恨哉。答曰。芟夷蘊崇。善者信矣。是解蔽之志也。宜矣子之苦於所主難見。然子亦不思耳。解蔽曰。道原于天。行于人。曰天之所顯。先王之所奉。夫子之所修。曰百姓日用而不知。曰合天與人而有命之名。人保諸己而有性之名。見諸行事而有道之名。諸如此之類。皆其本意。孰謂解蔽於道。不見所主乎。或欲使解蔽求諸古人之所未道。別設一端。以衍新異乎。抑亦欲規規乎箋註之末。如盤脫然乎。皆非勝之所知也。故舍可解蔽。別為辯道。是以不爭餽之也。非固滯自守。則造說相標。是汲汲乎立門戶也。是數者安足以論於解蔽之前乎。昔者阜陶聽訟。天下無冤。周公制法。頑民亂治。涇渭已分。而執迷不悟。雖解蔽如之何。書成上木。謹揭其所因而作。并錄所答人者。以附卷末如此。

寶曆五年乙亥六月

門人 同藩 增 井勝之 謹書

□ □

寶曆五歲乙亥孟秋發行

升屋治兵衛

平安書林

錢屋三良兵衛

風月莊左衛門

序

予少有挾策癖。而獨學無師友。則孤陋而寡聞。固其所也。雖然。不逐時尚。不落凡套。乃能自發慧眼。達觀宇宙。而論說其是非得失也。一一從自己胸襟流出者。亦由此得之矣。嘗謂儒為經世。佛為出世。固不一其致。夫唯不一致。是以可兼學也。韓歐以儒排佛。固非矣。程朱以佛混儒。亦未是也。必也不排不混並行不相悖。是為得也。故予之於學。內外雙修。經出相資。而未嘗偏廢焉。年及四十。乃通于周易華嚴。於是乎始知。自本自根無儒無佛。尙何是非得失之有。雖然。莊生之齊物論。固既明無是非也。但其以無是非為是。以有是非為非。則依舊未出是非境界也。不如口說是非。而心忘其有無也。是以予之閱古人書。苟有可議。則弗肯少假借焉。抑亦忘有無之是非也哉。若夫此方時師所著。則固莫足以置齒牙間。獨奈黃口兒輩。為其大聲所恐嚇。如風如顛。如精魅馮焉。予深憫之。不得不為一燃犀。以照鬼窟。是斯冊子所由錄也。庶幾自今已往。邪崇有小瘳乎。

明和己丑之春

蘇門道人服天游序

目錄

卷門 數人 題天 雜引

大元大明 闕字 臨摹 陶字音義 魚鱗鶴翼 隋書律曆志 建安七子 明七子文章 高李選唐詩 宰相 河圖洛書 季氏富於周公 直躬

燃犀錄目次

- 大元大明
- 闕字
- 臨摹
- 陶字音義
- 魚鱗鶴翼
- 隋書律曆志
- 建安七子
- 明七子文章
- 高李選唐詩
- 宰相
- 河圖洛書
- 季氏富於周公
- 直躬

- 一
- 二
- 三
- 四
- 四
- 五
- 七
- 八
- 〇
- 一
- 二
- 三
- 四
- 七
- 八

擊壤歌

九夷

歷史中俗語

徂徠議論文

高麗書

關西文字

新文

讀書

讀書

讀書

讀書

讀書

讀書

一九

二〇

二一

二二

二三

二四

二五

二六

二七

二八

二九

三〇

三一

燃犀錄

平安服天游著

大元大明

徂徠カ明律解ニ云。刑法ノ書ヲ律ト云。コレハ明ノ代ノ刑書ナルユヘ。明律ト名ツク。本書ニハ大明律ト云ヘリ。總テ大字ヲ加ル。當代ヲ尊ブ辭ナリ。タトヘバ漢ノ代ニハ大漢ト云ヘ。後世ヨリハタゞ漢トイフ。唐ノ代ヲモ。當代ヨリハ大唐ト云ヘ。後世ヨリハタゞ唐トイフ。日本ノコト。此方ニテハ大日本國ト云ヘ。異國ヨリハタゞ日本國トバカリ云テ。大字ヲ加ヘタルタメシナキガ如シ。今日本ハ明朝ニ服御スル國ニモ非ズ。コトニ異國ニテモ。イマ代替リテ。清ノ代トナリタレバ。當代ノコトヲバ大清ト稱スレ。明朝ノコトヲバ大明トハイハズ。マシテ日本ニ於テハ。大明トイフベキ子細ナキユヘ。今刊行ノ本ニハ大字ヲ除クナリ。

按ズルニ此説是ニ似テ非ナリ。何如トナレバ。大漢大唐ノ如キハ。誠ニ當時臣子ノ尊稱ナレバ。異代ヨリハ大字ヲ加フマジキコト勿論ナリ。タゞ大元大明ノ大字ハ。其例ニアラズ。元來元ハ北狄蒙古國ヨリ起リタレバ。天下ヲ有ツノ後。國號ト爲スベキ無シ。故ニ前代ノ例ニ抱ハラズ。易ノ象傳ノ大哉乾元ノ義ヲ取リテ。國號ヲ大元トイヒ。至哉坤元ノ義ヲ取リテ。年號ヲ至元トイフ。故ニ大元ノ大字ハ。自ラ加フル所ニシテ。臣子ヨリノ尊稱ヲ待タズ。明ハ中國ヨリ起リタレ。遂ニ元ノ制ニ沿ヒテ。又

自ラ大明ト號セリ。故ニ太祖一統ノ後。朝鮮安南等ノ外國ヘ。詔勅ヲ遣ハシテ。即位ヲ告ラレシニモ。ミナ國號大明ト有リタルナリ。サレバ明史ハ今ノ清朝ニ出來タレト。ソノ藝文志ニ載セタルヲ看ルニ。大明律ト書キタリ。然レバ今和刊ニモ。本書ノマ、ニシテ。大字ヲ除クニハ及バザルナリ。徂徠明ノ制度ニ於テハ。精覈セルヤウニ自負スレト。カ、ル疎漏モアリケルナリ。明朱國禎カ湧幢小品云。國號上加大字始於元。及明因之。以別於小明王也。其言大漢大唐大宋者。乃臣子及外國尊稱之詞。近見新安刻歷祚考一書。於漢唐宋及司馬晉。皆加大字。失其初矣。

闕字

譯文筌蹄ニ云。倭語ニ闕字トイフハ誤ナリ。闕字トイフハ。元ヨリ闕オチテアルナリ。倭語ノケツ字ハ。禮式ニテ人ヲ敬フユヘ。一字アクルナレバ。闕字ニハ非ズ。中華ニテハ空ニ一字トイフ。是徂徠タ、明制ニ倣ヒテ。博ク古ヲ稽ヘザルガ故。闕字ヲ倭語ナリト云ヘリ。唐六典曰。凡上表疏牋啓。及判策文章。如平闕之式。謂昊天。后土。天神。地祇。上帝。天帝。廟號。祧。皇祖妃。皇考。皇妃。先帝。先后。皇帝。天子。陛下。至尊。太皇太后。皇太后。皇后。皇太子。皆平出。宗廟。社稷。太社。太稷。神主。山陵。陵號。乘輿。車駕。制書。勅旨。明制。聖化。天恩。慈旨。中宮。御前。闕廷。朝廷之類。並闕字ト。カクノ如クナレバ。闕字ハ唐ノ代ノ禮式ナリ。總テ古吾邦朝家ノ格式ハ。多ク唐制ヲ遵用セラレシユヘ。其名目今ニ遺レルコト多シ。此闕字モ其一端ナリ。シカルニ徂徠曾テカヤウノワケヲ知ラズ。倭語ナリ誤ナリ

トイフハ。反テ倭語ナリ誤ナリ。又

山君彝カ七經孟子考文凡例云。其所校諸本。有曰宋板者。廼足利學所藏。五經正義一通。所以識其爲宋板者。凡字遇宋諸帝諱。輒缺其點畫。如殷作般。弘作弘。胤作胤。敦作敦。眩作眩。敬作敬。讓作讓。慎作慎之類。各避其所諱也。臣向得唐九成宮石刻穀梁傳殘本。高祖諱淵作淵。太宗諱世民作世戶。又嘗閱唐玄宗八分書墨刻孝經亦爾。唐宋之際。避諱之例。可以見也。以此驗之。其爲宋板爲疑。

右避諱ノ説。誠ニ暗合シテ。誤無シトイヘト。山氏問學孤單ナルガ故。其本據ヲ考出スアタハズ。遠ク石刻殘本等ヲ引ヅリ出シテ。徒ラニカヲ費ヤス。憫笑スベシ。コレモ又唐六典云。若寫經史群書。及撰錄舊事。其文有犯國諱者。皆爲字不成。

臨摹

譯文筌蹄ニ曰。摹ハ摹倣ト連用ス。古人ノ墨跡ヲ似スルコトナリ。臨ハシキウツシニスルコトナリ。臨ハモト上ヨリ下ヲ視ルコトユヘ。シキウツシニ用ユ。

是臨摹ノ義。アチラコチラナリ。カ、ル近キヲトリチガユルトハ。餘リノコトナレバ。恐ラクハ筆受者ノ寫誤ナルベキカ。又

太宰氏ガ國字書札ニ。書學ヲ論シテ云。初ハ紙ヲ重ネテ。スキウツシヲサセソロ。是ヲ摹寫トマフ

シソロ。其後法帖ヲ案ノ前ニ少卑ク置テ。見ウツシニ寫サセソロ。是ヲ臨寫ト申シソロ。是ハ臨摹ノ義ヲミゴト知り得タレト。尙臨字ノ上ヨリ下ヲ視ルノ義ニ泥ミテ。案ノ前ニ少シ卑ク置クト云リ。笑フベシ。中華ニテモ。タ、旁ニ置クトイヘリ。拘ハルベカラズ。輟耕錄曰。今人皆謂臨摹爲一體。殊不知臨之與摹。迥然不同。臨謂置紙在旁。觀其大小濃淡形勢而學之。若臨淵之臨。摹謂以薄紙覆上。隨其曲折。婉轉用筆曰摹。

陶字音義

徂徠與滕東野尺牘云。觀兒嬉於窰中。因思古所謂陶復陶穴者。不獨穴土。其謂之陶。亦火之耳。又思皇陶下音遙。窰亦陶音轉爾。

是徂徠ガ得意ノ發明ト見ヘタリ。然レモスデニ古人ノ沙汰シオキタル。陳腐ノ說ナリ。徂徠聞見寡陋ニシテ。自ラ新奇トオモヒ。揚揚トシテ其門人ニ誇説ス。笑フベシ。六書正譌曰。甸燒瓦灶也。象形。漢書南山有漢武舊甸。注燒瓦處也。又借爲徒刀切。詩甸復甸穴義同。俗通用陶。乃地名。故从阜。別作窰窰竝非。阜甸字乃本音。

魚鱗鶴翼

徂徠ガ鈴錄ニ云。和軍ニ魚鱗ノ備ト云ハ。車輪陣ヲ。古ノ博士ガギョリント讀傳ヘタルヨリ。魚字ヲ付替タルカ。又魚虎陣ヲ誤リタルナリ。鶴翼ハ虎翼陣ノ唱ヘ誤ナリ。車輪魚虎サヘ。モト裴緒李

筌ガ杜撰ナレバ。マシテコレヲ誤リタルハ。論ニ及バザルナリ。

按ズルニ唐太宗帝範序曰。余以弱冠之年。懷慷慨之志。思靖大難以濟蒼生。躬擐甲冑。親當矢石。夕對魚麗之陣。朝臨鶴翼之圍。シカレバ鶴翼ハ古ノ陣ノ名ニシテ。誤ニハ非ズ。且魚鱗ハ魚麗ノ訛轉ナルヲ明ナリ。魚麗ハ左傳ニモ見ユ。其陣法コソ傳ハルマシケレ。名稱ハ誤アルニ非ズ。シカルニ徂徠ナニガナ和軍者ヲ毀ラントテ。牽強附會ノ說ヲ妄作シテ。反テ己ガ不學ヲアラハスト。捧腹ニタヘズ。スベテ徂徠ハ唐ノコニトリワキ疎ナリ。明律解ニ。唐律ハ後世ニ傳ハラズト云リ。皇都朝紳ノ家ニハ。今ニ現在セルコヲ知ラズ。寡聞ノホド。餘事ヲモ察スベシ。

隋書律曆志

徂徠度考。引隋書律曆志。辨周尺畢曰。按唐承周隋後。以玉尺爲古周尺。以調律呂作冠冕。又以此作量衡。湯藥用之。太宗御制晉書。載荀勗尺。畧不詳。其臣房玄齡等亦是之。其注管子亦以玉尺解之。唯魏徵心知其非。而國是所在。口不能言。故其撰隋書。獨詳其始末。又以晉前尺爲本。以校諸尺云云。於後世古尺可考者。乃魏徵之力也。魏徵人唯稱其善諫。以此觀之。其不能隱沒是非者。亦性爲然。然此事非治國理民之所關。故當時不必爭其是非者。其識亦出後世諸儒之上二等。

按ズルニ世ニ隋書ヲ魏徵ノ撰ト云ヘルハ。新唐書ヲ歐陽脩ノ撰ト云ニ同シク。略シテ其一ヲ擧タルナ